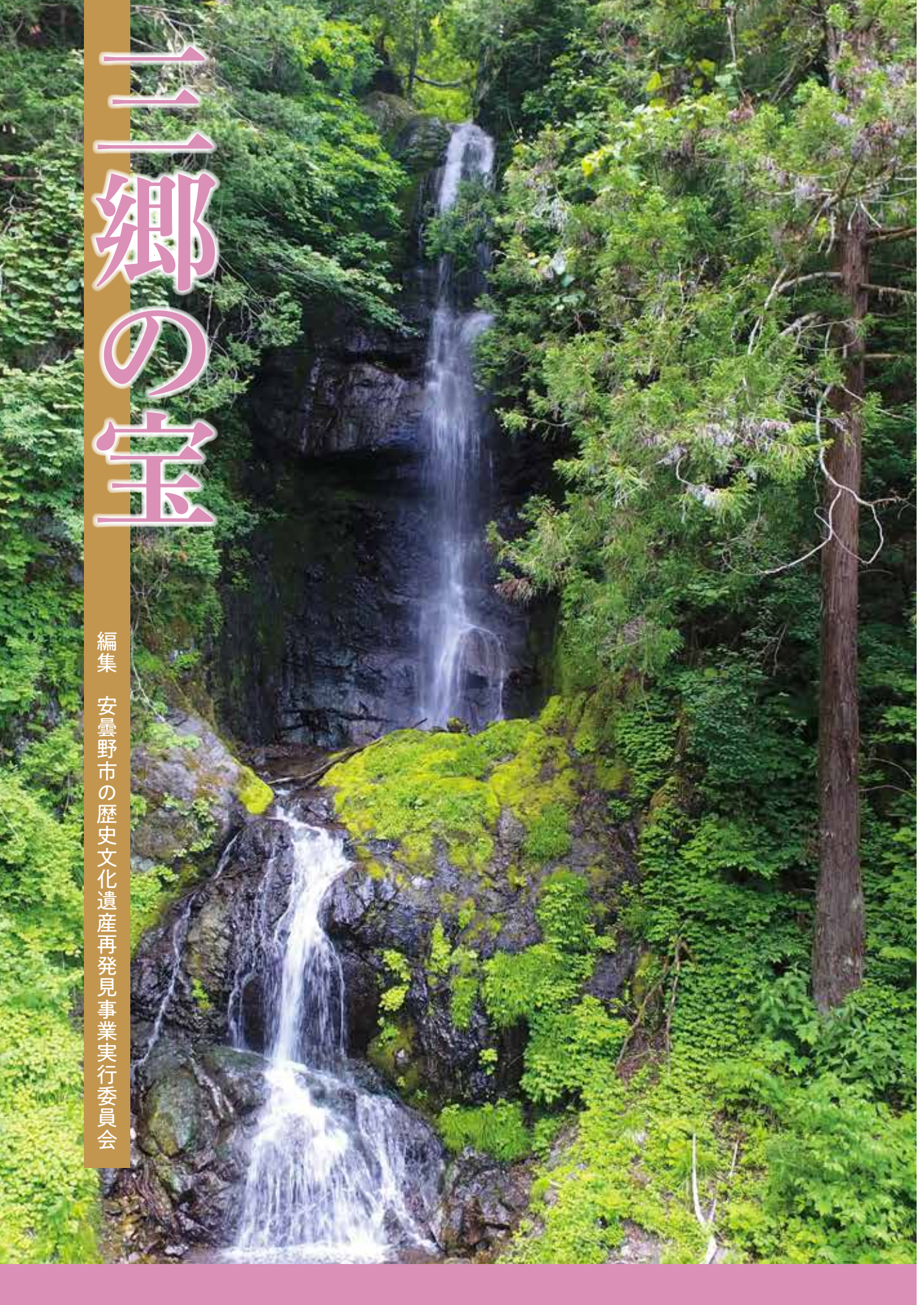


三郷の宝

編集

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会



はじめに

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員長 原 明芳

室山アグリパークにある「でいらぼっちゃ」の展望台に登り東を望むと、眼下には多くの住宅地とともに、赤くたわわに実るリンゴなどの果樹園が大きく広がり、またその向こうには水田地帯が広がる温、明盛地区を見ることができ、振り返れば、紅葉が美しい豊かな自然が残る小倉地区の里山が広がる。

今から一〇〇年前の三郷といえ、蚕種製造業の村であった。

明治三四年の蚕種製造業者を見ると南安曇郡全体で六八軒、うち明盛村が四軒となっている。それが二〇年ほど経った大正三年には、南安曇郡全体で五一三軒と急増している。明盛村では三七軒、一軒もなかった温村では実に九五軒が蚕種製造業を営んでいる。すなわち、この頃に蚕種製造によりもたらされた大きな富が、現在の豊かな三郷地域の基礎を築いたといっても過言ではないであろう。

しかし現在、室山から見渡せば、かつて広がっていたはずの桑園はどこにも見当たらない。

歴史を少し遡れば、室山は御巢鷹山と呼ばれ、小倉の官林が東に広がっていた。さらに中世においては、三郷を中

心とした住吉庄は、麻布を生産し、都へ送っていた。当然当時は広い麻畑が存在したはずである。だが見渡す限りそれらの痕跡もない。

しかし、時代とともに移り変わってきた三郷地域には、様々な魅力があちこちに残されている。

「でいらぼっちゃ」が見つめる風景は、今後どのように変わっていくのであろうか。

令和五年二月



三郷の宝

「目次」

はじめに	3
関連地図	7
第1章 三郷をつくる自然	
1 三郷の大地の形	8
2 黒沢上流の生きものたち	12
3 黒沢洞合自然公園	16
4 三郷の自然の縮図 住吉神社	22
5 室山 絵図にみるかつての自然と暮らし	24
6 山地帯上部の動植物	28
7 屋敷林をつくるケヤキの巨木	32
8 白澤保美 日本林業の発展と樹木の研究に尽くした林学博士	34
第2章 掘り出された三郷の歴史	
1 縄文時代の三郷	38
2 弥生時代の三郷	41
3 平安時代の三郷	44

第3章 中世から近世へ／開発・信仰・交通

1	住吉庄をめぐる争いと西牧氏	46
2	二木氏と小笠原氏	51
3	複雑に移り変わる堰 長尾堰・温堰・庄野堰	56
4	中世から続いた観音信仰の面影 平福寺・泉光寺・神宮寺・長徳寺	62
5	海へと続く飛州新道	68
6	槍ヶ岳開山 播隆上人	72

第4章 貞享騒動

1	貞享騒動 領民の生きる権利を求めてたたかった人たち	76
2	貞享騒動にまつわる供養と伝承	84

第5章 暮らしを彩る民俗

1	子どもの歌 高らかにひびく祭り	90
2	古い集落を揺られゆく大きなお船	94
3	いうなり地藏	96
4	消えゆく庚申講	98
5	墓地を見守る枝垂れ桜	100
6	山と里の交流	102

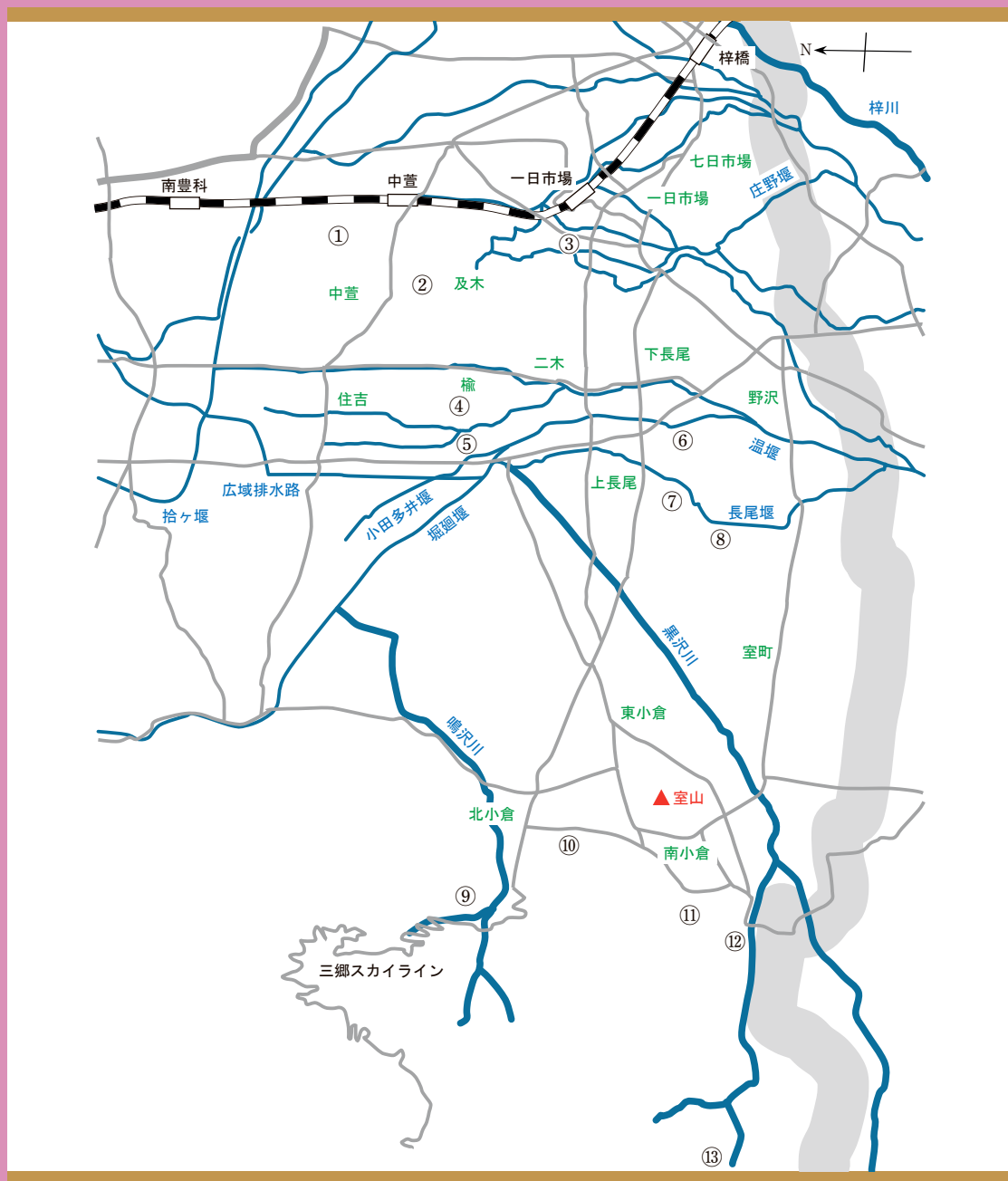
第6章 近代化を支えた人々

1	三郷村の誕生	104
---	--------	-----

第7章 現代／三郷の産業と人々の力

2	廃仏毀釈と立ち直る寺院……………	108
3	学校教育 それは三郷の誇り……………	112
4	松岡弘 正義と愛に生きた教育者……………	118
5	植原悦二郎 自由主義を貫いた憲法学者・政治家……………	122
6	務台理作 平和と幸福を追求した哲学者……………	126
7	三郷の芸術家たち……………	130
8	信濃鉄道開通 大糸線は、なぜ一日市場駅を通ったか……………	136
9	山林から農地へ 小倉官林の開墾……………	140
1	黒沢川の恵み 三郷のリンゴ栽培……………	146
2	林檎村音楽祭……………	152
3	農業を観光へ 日本アルプスサラダ街道……………	154
4	上高地に続く夢 三郷スカイライン……………	156
5	室山アグリパークとファインビュー……………	160
6	人と森の交差点としての室山……………	164
7	地域へ飛び出し、地域に学ぶ子どもたち……………	166
	参考文献……………	172

『三郷の宝』 関連地図



本書で紹介する主な社寺・史跡・自然のみどころスポット

- ① 歓喜寺 ② 中萱熊野神社 ③ 一日市場長徳寺観音堂 ④ 龍峰寺跡 ⑤ 住吉神社
 ⑥ 瑠璃光寺 ⑦ 平福寺 ⑧ 長尾城跡 ⑨ 小倉城跡 ⑩ 浄心寺 ⑪ 泉光寺跡
 ⑫ 黒沢洞合自然公園 ⑬ 黒沢の滝

1 三郷の大地の形

三郷の地形

三郷は安曇野市の南に位置する。特にJR大糸線の沿線である明盛や温は松本市のベッドタウンとして機能している。また、小倉には黒沢川や鳴沢川が形成した複合扇状地が存在し、その扇状地から頭を出した室山とともに、三郷の地形の大きな特徴となっている。西側には黒沢山（標高二〇五一・四㍎）や鍋冠山（標高二一九四・二㍎）があり、そのさらに西側に大滝山荘のある大滝山（標高二六一六㍎）や蝶ヶ岳ヒュッテのある蝶ヶ岳（標高二六七七㍎）といった北アルプスが連なる。

扇状地と河岸段丘

三郷を真上から見たときに、まず目に飛び込むものは黒沢川扇状地であろう。航空写真で見ると農地の色が違うことから、扇状地の範囲が良く分かる。色の違いは栽培されている作物の違いによるものである。黒沢川扇状地はローム（火山灰が風化した赤土）で覆われており、傾斜し



写真中央の扇状の地形が黒沢川扇状地。中央を黒沢川が流れ、黒沢川の北側に室山が頭を出している。扇状地と手前の土地の色の違いから、栽培されている作物の違いが分かる

た水はけのよい土地となっている。そのため、リンゴなどの果樹園や畑が多い。対して、温から東側は水田が多く、比較的平坦な土地となっている。また、黒沢川扇状地は梓川の河岸段丘の上野面でもあり、約六〇万年前以降の更新世中期に形成されたものである。その下の水田の多い地域は同河岸段丘の丸田面であり、約一万年以前以降の完新世に形成された段丘面である。なお、この下にさらに下位の岩岡面と呼ばれる段丘面があり、明盛の七日市場区と豊科高家の真々部区との境界付近に段丘があるが、三郷地域に岩岡面は含まれない。

黒沢川と扇状地

黒沢川も鳴沢川も黒沢川扇状地の上を流れている。北アルプスから流れ出た川は、これらの河川と同じくほとんどが扇状地を形成している。黒沢川は黒沢山の山頂から北東の谷を源流とする北黒沢と、南東の谷を源流とする南黒沢が南小倉区と室町区の境で合流し、本流となる。その後、扇状地の上を流れ、黒沢川橋付近からは天井川となる。黒沢川橋より上流側では両岸から遺跡が見つかっているのに対し、下流側の両岸からはほとんど遺跡が見つかっていないことから、昔は大雨が降れば、水害が頻繁に発生したであろうことが想像できる。そして、流れ下る中で地下に浸



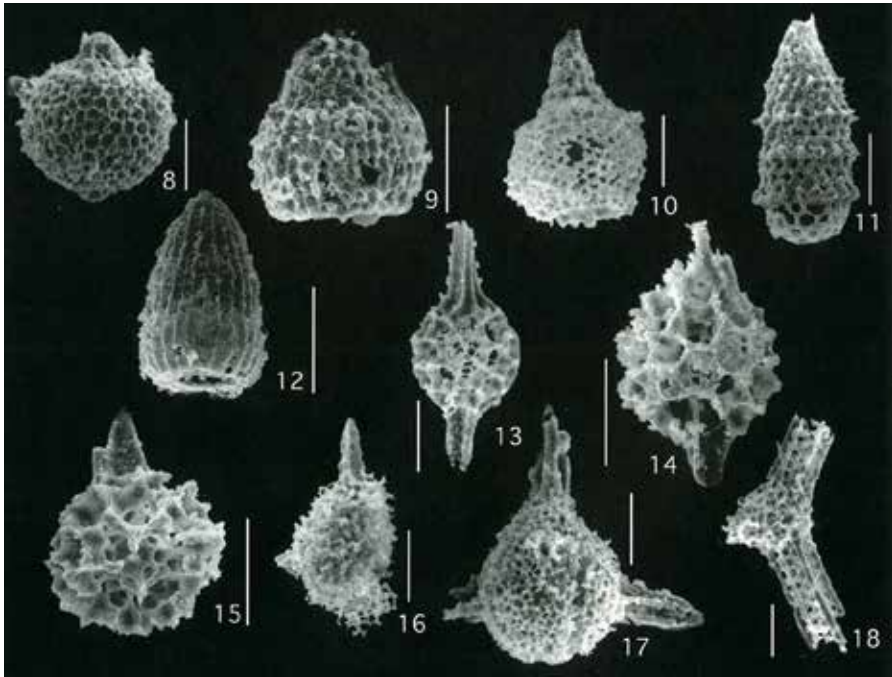
黒沢川の末端部分。丸の箇所では河川が途切れている

透しながらその水量を減らしていき、住吉神社の西側の堀廻^{まわしせき}堰に合流する部分で川が途切れている。典型的な末無^{すえなし}川となっているのである。

三郷で見られる岩石

先ほどから名前の出てくる黒沢川であるが、名前のとおり黒っぽい有色の岩石が河床に目立つ。これはより北側を流れる烏川も同じである一方、さらに北側を流れる中房川などは真っ白な河床が目に見える。北アルプスは常念岳の山頂あたりを境に南北で岩石が異なる。南側は約二億年前の付加体、北側は約七千万年前の花崗岩から形成されている。そのため、黒沢川の河床には付加体に含まれる堆積岩で

ある砂岩や泥岩、チャートなどの有色の岩石が多い。対して、中房川などは火成岩の花崗岩で真っ白な河床が目立つ。付加体の岩石の中でも特にチャートは三郷で見られる代表的な岩石の一つであり、三郷小中学校の敷地内には縞模



走査型電子顕微鏡（SEM）による放散虫化石の写真（三郷村誌Ⅱ）。放散虫横の白いスケールは50 μ m（0.05mm）

様が綺麗なチャートの庭石が置かれている。このチャートの縞模様（「層理」と呼ばれる）は、チャートの元になる放散虫の死骸が長い時間をかけて海底に堆積したものである。放散虫は海洋プランクトンの一種であり、大きさは一センチ以下でシリカからなる固い殻（骨格）をもつ。チャートを造る珪酸はこの放散虫の殻のシリカ由来のものである。チャートの堆積速度は極めてゆっくりであり、千年間に一〜二センチの厚さしか堆積しないとされる。

そのほかに砂岩や泥岩などの堆積岩が見られるが、三郷地域の山地で見られる岩石は地下深くにおいて十分な続成作用（地圧や地熱などによる堆積物の諸変化の総称）を受けたため、よく固結していても硬い。また、地下深くにおいて強い圧力を受けたことにより、砂岩や泥岩の破片が混ざりあった「混在岩」も見られる。さらに、明治から昭和にかけて、地下資源として金・銀・銅・鉄・鉛・マンガンの採掘が行われていたことも添えておきたい。

室山の地質

東小倉区と南小倉区の境界に位置する室山は、約一億五〇〇〇万年前の中古生層の砂岩や泥岩、チャートからできている。二四頁の冒頭でも述べているとおり、断層運動や地殻変動の影響を受けて現在のような孤立した山塊となっ



三郷スカイラインの展望台をさらに奥に進むと、立派なチャートの露頭を見ることができる。中には写真のように大きく褶曲しているものもある
しゅうきよく

た。具体的には西山から伸びていた尾根が東峠断層などの断層運動によって切り離されて、土地の隆起などが起こり、さらに黒沢川の運搬した土砂が堆積することでの姿になったのである。

東側急斜面のすべり台沿いに歩道を進むと、チャートや



室山の露頭でもチャートの褶曲を見ることができる。写真では矢印の方向に沿って地層が曲がりくねっている

砂岩、泥岩からなる地層を見ることができる。また、『三郷村誌Ⅱ 自然編』によると三郷スカイラインと室山でクリスタルアッシュ（古期ローム）を見ることができるという。
(高山裕司)

2 黒沢上流の生きものたち

水辺に棲む両生類

初夏に黒沢川に近づく、川の中から「フイフイフイ…」という笛のような音が聴こえてくることがある。鹿の鳴き声に似ていることからその名が付けられたカジカガエルの声である。美しい鳴き声は古くから人々に親しまれ、現存する最古の和歌集である万葉集でも「河鹿」、



カジカガエル

「蛙^{かはづ}」として多くの歌に詠まれている。江戸時代には「河鹿籠」に入れて盛んに飼われ、声を楽しんだという。飼育はなかなか難しいが、溪流の流れとカジカガエルの織り成すアンサンブルを聴くために山に入るのも粋な遊びである。

沢沿いを歩くと、石



石の上に佇む



蛙合戦。繁殖期のオスは黄色味を帯びる

のように動かない大きなカエルに出会うことがある。ガマガエルとも呼ばれるアズマヒキガエルである。あまり跳ねることはなくゆったりと動き、雨の日には道路を悠々と歩く姿が見られることもある。毒液を出して外敵を追い払うことができるため、慌てて逃げる必要がないのだろう。学名は「ハンサムな日本のヒキガエル」を意味し、その名のとおり凛々しい顔つきをした堂々たる「山の主^{ぬし}」である。普段は落ち着いた姿を見せる山の主だが、春になると池や湿地に集まり、オスがメスを奪い合って激しく争う「蛙

合戦」が繰り広げられる。時には勢い余ってオス同士が折り重なったり、たまたま居合わせたウシガエルを絞め殺したりすることもある。自らの子孫を残そうと山の主も必死なのである。

アズマヒキガエルが「山の主」なら、サンショウウオは「森の妖精」とでも言うべきか。サンショウウオの幼生は水中で生活しているので、溪流を静かにのぞき込むと、運が良ければ羽根飾りのようなエラを持つ妖精たちの姿を見つけることができる。

市内に生息するヒダサンショウウオとハコネサンショウオは、どちらも国内に広く分布するとされてきたが、近年DNA解析技術の進歩などにより種の細分化が進んでいる。ヒダサンショウウオは平成三〇年（二〇一八）に愛知県より東に分布しているものは別種（新種）であることが明らかに、ハコネサンショウウオは平成二四年（二〇一二）から令和四年（二〇二二）にかけて七種の新種に分類されるなど、地域固有の種が次々と明らかになっていく。市内に生息するサンショウウオたちも、実はとても希少な地域固有の種かもしれない。近年サンショウウオの間は乱獲や森林開発などの影響で急速に数を減らしている。地域の小さな森の妖精たちを大切にしたいものである。



ハコネサンショウウオ（上：幼生・下：成体）



ヒダサンショウウオ（上：幼生・下：成体）

豊かな昆虫相

昭和八年（一九三三）、北黒沢上流で長野県初となるムカシトンボが発見された（その後二番目の記録と判明）。ここではムカシヤンマも見ることが出来る。

両種とも古い形態を残し「生きた化石」とも呼ばれる。ムカシトンボは一億五〇〇〇万年前の化石からも見つっている。ムカシトンボのヤゴ（幼虫）は、七年ほどをかけて成虫になる。トンボ類の多くは水辺で羽化するが、ムカシトンボは羽化する前にひと月ほど陸で過ごす習性があり、水辺から離れた場所で羽化するため発見が難しい。一方ムカシヤンマのヤゴは水しぶきの掛かる苔むした岩の垂直面で暮らし、完全な水中生活を行わないという珍しい生態を持つ。苔に泥の付いた穴



黒沢の滝近くの建屋で羽化していたムカシトンボ



ムカシヤンマ成虫（上）と、コケの中に潜むヤゴ（下）

が発見できれば、その中に幼虫が潜んでいることだろう。

かつて北黒沢上流部はチョウの豊産地であった。三郷地域では一二〇種のチョウ類が記録されているが、北黒沢上・中流部だけでその内の九〇種以上が見つかった（『三郷村誌Ⅰ』）。特筆すべきは高山蝶コヒオドシの安定した発生地があったことである。幼虫の食草となるエゾイラクサが豊富で、毎年五月ともなれば葉上に黒い幼虫の集団が見られた。コヒオドシは北黒沢の下流、洞合地区でも発生していた。ところが二〇〇〇年代に入ると発生は断続的になり、近年ではまったく見られなくなってしまった。背景には黒沢流域の森林化が進み、暗い環境が広がっている



キベリタテハ（上）とヒメシジミ（下）



エゾイラクサに産卵するコヒオドシ雌。円内は産み付けられた卵の塊

ことがある。人が森林に関わらなくなり、砂防事業で氾濫が減ったことが森林化に拍車をかけている。それでも滝やダム湖周辺には空間が確保され、生き物たちが活動できる場所になっている。黄色い縁取りが特徴的なキベリタテハもこう

した場所に姿を見せる。深山や亜高山帯に生息する希少種である。

ヒメシジミは小さく可憐なシジミチョウで、雄は鮮やかなブルーの翅が特徴である。かつては北黒沢上流に多産し、ダム湖周辺や切り開かれた林地などに群れ飛んでいたが、著しく数を減らしている。

令和三年（二〇二二）夜の調査でノウサギの親子に出会った。かつては有害鳥獣として駆除されていたが、その後激減していた。林縁の草地の減少など生息環境の悪化が原因と思われるが、そんな中でも逞しく生きる姿を見ることができた。その一方でニホンジカの声が黒沢の谷に響き、今後の動向が気になった。

北黒沢の自然環境はここ半世紀で大きく変化してきている。以前のような多様性が失われているのである。

（斉藤雄太、那須野雅好）



ノウサギの子ども

3 黒沢洞合自然公園

多様な生き物を育む里山



手前が黒沢洞合自然公園。後方に黒沢山を望む

黒沢山（二〇五一^ド）から流れ下る北黒沢と南黒沢の合流点が「洞合^{どあ}」である。黒沢洞合自然公園（以下「洞合公園」）を含む洞合周辺は、安曇野市内でも数少ない里山環境を残す場所のひとつである。

もともと水田であった公園と耕地がひらけた空間をつくり、周囲をコナラやクヌギなどの雑木が囲む。この環境を多くの生きものたちが利用しているのである。その生態系の



洞合にいたハイタカ雌



冬鳥の常連、ルリビタキ（上）とヌルデに
来たジョウビタキ（下）



オオルリ雄。鳴き声も美しい「日本三鳴鳥」
のひとつ



ノコギリクワガタ雄同士の戦い

洞合周辺は小鳥たちの観察にも適した場所である。五月になると夏鳥の中でも特に美しいオオルリが姿を見せる。透き通る鳴き声はウグイス、コマドリと共に「日本三鳴鳥」のひとつに数えられる。冬はルリビタキやジョウビタキがヌルデの実をついばむ姿を見ることが出来る。洞合公園のクルミをお目当てにリスもやってくる。

頂点に立つ代表格が猛禽類で、オオタカやハイタカ、ノスリなどの狩場となっている。もしハイタカの狩りが目撃できれば幸運である。他の猛禽と一線を画し、獲物を追って樹間を縫うように人の視線ほどの高さを高速で飛ぶ。



公園で活動する冬毛のリス



チャイロスズメバチ



夜の樹液に集まるベニシタバ

冬場も目にすることから、木の洞や地面などあちこちに「貯食」をしていると考えられる。また、洞合公園はカブトムシ、クワガタムシのメッカとして知られている。公園に植えられたクヌギやハルニレが樹液を出し、それを好む昆虫たちが集まってくる。しかし、ここにはカブトムシだけでなくオオスズメバチやチャイロスズメバチなども集まるので注意が必要だ。「樹液酒場」は昼と夜とで訪問客の顔ぶれが大きく変わる。昼間はチョウやスズメバチ、カナブンなどが集まるが、夜は蛾類が目立つ。ベニシタバは夜の樹液に集まる蛾の代表格で、妖艶な紅色の衣装をまとっている。洞合公園には二つのビオトープ池がある。水生生物のた



ビオトープ池とオオシオカラトンボ



公園内をパトロールするオニヤンマ



公園内で稀に見かけるヒバカリ

めの人工池で、フトイなどの植物を植えて水質の浄化も図ってきた。その結果、トンボを中心に多くの水辺の生きものが集まりにぎやかである。ヤンマ類ではクロスジギンヤンマ、ギンヤンマ、ルリボシヤンマなどが生息し、近年は希少種のサラサヤンマも確認された。ヤンマの雄同士の間縄張り争いは熾烈で、池の上で空中戦が繰り広げられ、翅がぶつかって絡み合うときの乾いた音が辺りに響く。オニヤンマは国内最大のトンボで公園内に多い。悠然と飛ぶ姿には風格さえ漂う。

アカトンボの仲間も多く、アキアカネ、ナツアカネ、リスアカネ、ネキトンボなど九種が確認されている。

両生類ではアカハライモリやトノサマガエルが目立つ。時折、池の周辺にシマヘビやヒバカリなどが顔を出す。ヒバカリの名は「噛まれると命がその日ばかり」と信じられていたことに由来するが、無毒のヘビである。



ビオトープ池で産卵するネキトンボ

三郷中学校の黒沢洞合自然公園づくり

この公園は、三郷村合併五〇周年記念事業として三郷中学校の生徒たちが考えた黒沢川自然公園プランをもとに計画された。設計や工事にも生徒たちが協力して、平成一六（一八年度）の三年間で造りあげた。平成一九年（二〇〇七）三月八日の竣工式での三人の生徒代表挨拶の一部を紹介する。

◆一年次代表挨拶より

村の人の役に立ちたい。今のままの自然を残したい。そんな思いを胸に、当時の一年三組は黒沢川の清掃活動を行っていました。清掃活動が一段落し三郷の豊かな自然とふれあいたいと思った僕らは、三郷村教育委員会の那須野雅好さんのお力を借りて黒沢川の上流へ生物調査に行きまし



アレチウリ駆除に奮闘

た。その時に「黒沢に公園を造ってみたいか。」と、那須野さんに誘っていたいたのをきっかけにこの公園の計画を僕らが立てることになりました。

ひと言に計画を立てると言っても三六人の意見をまとめあげるというのは容易ではありませんでした。激しい討論も行われ、時にはケンカごしになることもありましたが、このままでは活動が進展しないと思った僕らは話し合いを一旦やめ、公園づくりの参考にするために烏川溪谷緑地や国営アルプスあづみの公園に行きました。自然の中なら遊具

楽しめることを体験することができました。このフィールドワークが皆の心を動かし一つにまとめたのでしよう。皆の意見が妙に噛み合い一つの公園プランができあがりました。



黒沢川自然公園プランを西山稜司村長に提出

◆二年次代表挨拶より

二年生になってクラス替えがあり、それまで一年三組が行ってきた活動を二年五組が引き継ぐことになりました。

私たちは、一年三組が立てた公園プランを見たり、実際に現地へ向かい那須野さんのお話を聞いたりする中で、植物・昆虫・鳥・魚・公園の五つのグループに分かれてより深くそれぞれのテーマを追究し、公園プランを更に発展させようと考えました。

公園グループは、設計士の方をお呼びして具体的な公園のモデルを描いて

いただき、それを

粘土などで模型に

しました。植物グ

ループは、公園建

設予定地である洞

合に生息する植物

を調査し、在来種

と外来種とに分

け、公園を造って

いく上で、これか

らどの植物を保護

していくべきなの

かを考えました。



植物グループの調査のまとめ



各グループの考えを学級全体で検討し合う

てくるようにビオトープをつくる」また、「ここは誰でも歩きながら自然を体験できる歩道をつくる」など、自然をメインにした、誰にでも優しい公園プランが完成しました。

また時には、公園プランのヒントを得るため、クラス全員で、野外調査にも出かけました。そして、それぞれの意見を持ち寄って、「ここには鳥のための木を植える」や「ここには虫が集まっ

◆三次生徒代表挨拶より

三年生では、学年全体でいくつかのグループを設け、生徒それぞれが興味を持ったグループに所属し、活動を展開してきました。そしてその中に、自然公園グループもあり、以前活動に関わった人から、初めての人まで様々な人が集まりました。

我々の初めの活動は、公園に集まる昆虫や植物を知ることでした。講師の那須野さんから指導をして頂き、今後いかに公園の生物達を守っていけば良いのかを学びました。

その後は、何度も公園予定地に出向き、工事の用具の使い方を教わったり、その様子を見たり、更には、植樹や池

の防水シート張り等、

実際に手伝うということもやらせて頂きました。ただ見ていただけと実際に行うのでは大きく違い、その想像以上に大変な仕事を終えると、みんな心身共に疲れきった様子でした。

週に一回の三郷SEL F（総合的な学習の



ビオトープ池のシート張り

時間）で予定地に向く度に、景色が大きく変化していて、驚きや感動を覚えました。この三年間、我々は共に汗を流すことで協力することの大切さを学び、公園建設に協力できる喜びを感じてきました。完成した「黒沢洞合自然公園」は形だけではなく、三年間の

活動の証として我々の心に残り続けると思います。

公園づくりのために大変な仕事をして下さった関係者の方々、それから沢山のことを教えて下さった那須野さんはじめ多くの講師の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。今後、我々は一社会人として、そして一地域住民として、この公園を未来へ残していけるように関わっていききたいと願っております。

この生徒たちの想いは、新たな公園整備事業と共に現在そして未来に繋がっていくことだろう。

（那須野雅好、窪田尚幸）



黒沢洞合自然公園の竣工式

住吉神社は黒沢川の末端に位置する歴史のある神社である。「住吉神社の社叢」^{しゃそう}「住吉神社御神木ヒノキ」は安曇野市の天然記念物に指定されている。「住吉神社の社叢」は、神社の境内に二〇〇種を超える植物が自生していることによる。チゴユリの群落やミヤマイラクサなど山地性の植物までが顔をそろえ、隣の集落にある神社の境内と比べてみても植物種の多さは一目瞭然である。



黒沢川末端の先に住吉神社の森が広がる

その理由を探っていくと黒沢川と住吉神社の位置関係に辿り着く。神社の北隣に商業施設が建設される際に六ヶの竖穴が掘られた。そこには過去の黒沢川の氾濫層が幾重にも重なっていた。住吉神社は末無川（地元では「尻無川」と呼ぶ）である黒沢川末端の先



境内に自生するミヤマイラクサ



住吉神社の参道

に位置し、集落との間を遮るように鎮守の森が形成されている。氾濫や土砂災害を防ぐための砂防林を兼ねた鎮守の森を育て、神々を祀って安全を祈願した先人たちの思いが感じられる。社叢の豊かさは過去の氾濫で植物の種子が上流から持ち込まれたことによるものと考えられる。

また住吉神社には多くの動物が集まってくる。オオタカやノスリが毎年のように境内で営巣し、夜になるとフクロウの鳴き声も聞こえることがある。住吉神社周辺の畑作地ではネズミの被害も少ないに違いない。境内に入れば野鳥のさえずりが心地よい。常連のカワラヒワ、シジユウカラ

の他、ゴジュウカラやアオゲラなどが顔を出すこともある。

平成二十三年（二〇一一）二月、降り積もった雪が神楽殿の周りだけ円く踏み固められた「ミステリーサークル」が出現した。周囲に多数の動物の足跡があったため、発見者の飯田素史氏や丸山隆氏らによる調査チームが解明に当たった。調査用に仕掛けたビデオカメラに写っていたのはテンであった。佐渡で飼育下のトキを襲ったこともある黄色い毛並みの獣である。このテンはきまって日没後に姿を現し、神楽殿を時計回りにぐるぐると走るとあるという謎の行動を繰り返した。その数はなんと一晩に六〇〇周にも及んだ。調査チームはこのテンを「韋駄^{いだ}テン」と名付け、行動



境内で巣立ちしたノスリの若鳥

を追った。韋駄^{いだ}テンは約半年間も住吉神社に留まって、夜な夜な神楽殿の周囲を走り回った。どこからか林檎を失敬してくるなど、したたかな一面も観察された。なぜ韋駄^{いだ}テンがこうした行動をとったのかは定かでないが、山地性の動物のテンが住吉神社に現れたことについては黒沢川との位置関係を考えれば合点がいく。西の山地と住吉神社は黒沢川で繋がっていて、野鳥や獣たちがそれを利用して行き来しているのだ。

住吉神社は地史を含めた三郷の自然の縮図なのである。

（那須野雅好）



住吉神社境内を走る「韋駄テン」（丸山隆氏提供）

室山 絵図にみるかつての自然と暮らし

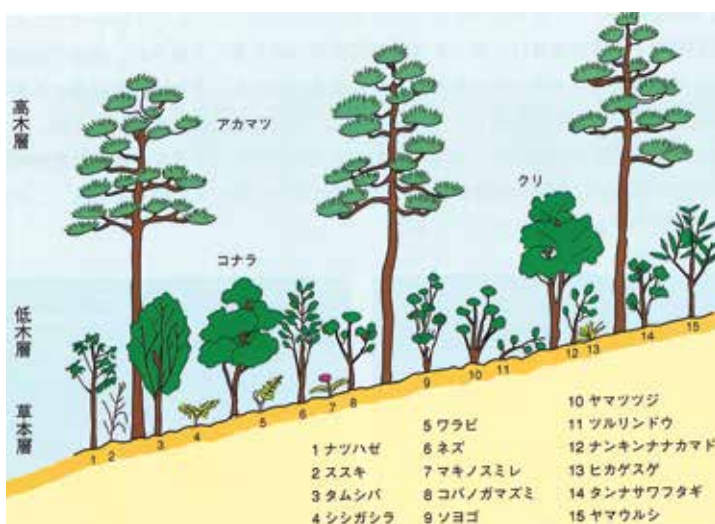
室山のなりたちと現在の利用

室山は西の北アルプスとの間におよそ六〇〇㊦の平地を挟んで、扇状地の中に島状に孤立している山塊である。もともとは北アルプスから伸びた尾根の一部であったが、東峠断層や地殻変動、そして黒沢川の影響を受けて、現在のような地形になったと考えられている。南北に長くて約一㊦、周囲が約二・七㊦、標高は約七九三㊦の山である。

現在は、室山アグリパークと名付けられた公園が平成四年（一九九二）に整備され、頂上には平成一〇年（一九九八）に温泉宿泊施設「ファインビュー室山」も建設された。比較的アクセスがよいため、憩いの場所として市内外から人々が訪れている。また室山の西の麓に位置する室山池は、もともと利用されていない湿地であったが、戦後ため池として整備され、その後はスケート場としても利用があった。現在はスイレンの花を楽しめるスポットとして知られる。

現在の植生

人工的に造成された土地を除くと、現在の室山の植生はアカマツの二次林がもっとも広く分布しており、山麓部にはスギやヒノキの植林地（人工林）がみられる。また東側斜面には面積は少ないがコナラ林が分布する。



アカマツ林の断面模式図（三郷村誌Ⅱ）

もあるが、日当たりのよい乾燥した立地に広がるアカマツ林は以前の森林が伐採された跡に芽生えてできた二次林である。植生の構成は、断面模式図に示したように、アカマツが高木層を形成し、下層には多様な広葉樹が自生している。

このようなアカマツ林は市内では普通にみられる里山の植生である。しかし、室山にとってアカマツ林はほかの場所とは異なる特別な歴史をもっている。

小倉御巢鷹山

江戸時代の室山がどのような山だったのかを教えてください。貴重な絵図が残されている。次ページに示す絵図は江戸前期に描かれた信州安曇筑摩郡画図（松本市博物館所蔵）である。室山は「小倉御巢鷹山」と名付けられている。巢鷹とは鷹狩りに使う鷹の雛のこと。室山は松本藩の藩主が鷹の幼鳥を確保する山として利用されていたのである。全国各地にこうした巢鷹山や巢山と呼ばれる場所が存在するが、一般的には一定のエリアを設定して藩が管理し、一般の住民の立ち入りは禁止される。

鷹狩りは飼いならした鷹を山野に放って行う狩猟の一種で、当時、武家の間で軍事訓練と娯楽を兼ねて盛んに行われていた。鷹狩りに使う鷹は主にオオタカやハイタカであ

る。オオタカは小鳥類やキジ、カモ類などの野鳥類、ときにはノウサギまで獲物とする。当時、オオタカの幼鳥は幕府への献上品としても価値の高いものであった。

小倉御巢鷹山と書かれた室山には樹木と思われる線がいくつも描き込んであり、山全体が樹林であったことがうか



アカマツに営巣するオオタカ

がわれる。この樹木がまさにアカマツであったと推定される。オオタカはアカマツの高木に営巢することが多く、アカマツの太い枝が分かれたところに、小枝を集めて大きな巢を作る。また森林内を俊敏に飛翔して獲物を捕らえるため、林内の植生が混み合っておらず空間があるような里山のアカマツ林に好んで営巢する傾向がある。室山はオオタカにとって住みやすいアカマツ林として手入れされていたのではないだろうか。

周辺の山々の景観

この室山の周辺の山の描かれ方に注目すると、樹林がある山とない山を描き分けていることがわかる。室山周辺の山は「柴山」「芝山」が分布し、樹林にはなっていない。

近世の全国、特に信州伊那郡の植生を詳細に検討した研究（水野二〇〇三）によると、こうした樹林でない植生は、草山、芝山、柴山、茅山^{かやま}などと記述されており、草はススキ、チガヤ、ササなど、芝はシバ、柴はハギ、アセビ、ヤマツツジ、ネジキ、クロモジなどの低木類を指すという。ただし、全国統一された分類ではない。この絵図に草山や茅山が見当たらないことから、芝山に草や茅も含まれる可能性があるだろう。

いずれにしても、近世の人里からみえる安曇野の山々



信州安曇筑摩郡画図（松本市立博物館蔵）



善光寺道名所図会（安曇郡保高村）

刈敷、飼料としての利用

は、現代とはまったく違う景観であったことが浮かび上がってくる。今、樹林に覆われている山々は、かつては草や低木が広がる植生だったのである。

近世の安曇野（保高村）の農村・里山風景を描いた絵図がある。天保一四年（一八四三）に描かれた「善光寺道名所図会」である。ここでは近くの山中で木の枝を刈り取

り、それを田に運んで、人や馬が踏み込んでいるようすが描かれている。これらの草木は「刈敷」と呼ばれ、肥料として田に敷き込む木々の若芽や草を指す。化学肥料が登場する前まで、刈敷は日本の伝統的な農法であり、全国的に広く行われていた。こうした草木は厩肥（家畜の糞尿と草木を混合し腐熟させた有機質肥料）にも利用されたり、また低木の枝は日常的な燃料にも使われた。

さらに草は牛馬の飼料としての利用も大きい。機械が普及する以前の農業では、農家にとって牛や馬は重要な労働力を担っていた。安曇野においても、牛馬の飼育が行われていた昭和三〇年代くらいまで、冬の間の飼料を確保するために夏は何度も草刈り場へ通い、草を刈ったという。飼料になるのはススキを主体とした草本類である。つまり、里山に広がる草山、芝山は、かつての人々の暮らしになくしてはならない重要な植生であった。

その後、人々の暮らしも農業も大きく変化し、芝山も柴山も必要とされなくなり、激減した。その代わりに戦後の高度経済成長期を迎えた日本の木材需要を支えるために植林地が広がっていった。

古い絵図と現代の室山のアカマツ林を手がかりにみえてくる、里山の植生。近世の人々の営みに思いを馳せて、その景観を想像してみてはどうだろう。

（松田貴子）

6 山地帯上部の動植物

スカイライン沿いにみられる樹林

北小倉の八幡宮を過ぎて三郷スカイラインを上っていく



展望台からの眺望

と、入り口では七六〇㍎ほどであった標高が次第に上がり、一四〇㍎付近の展望台へ続いている。この展望台からは三郷の平野部を一望することができる。

三郷の山地は植林地が広くみられ、スカイライン道

路沿いには下

方にスギ・ヒ

ノキ植林が続

き次第にカラ

マツ植林へと

移る。安曇野

ではおなじみ

のカラマツは

日本に分布す

る唯一の落葉

針葉樹であ

り、もともと

は本州中央部

の山地帯上部

から亜高山帯

の限られた地域に分布する樹木である。県内には自生地も

あるが、寒冷な地域における適性が高いため、安曇野市内

では亜高山帯まで植林地が広がっている。カラマツは本来

分布していない北海道でも植林されているが、その苗は主

に長野県産である。



展望台周辺のカラマツ植林

一方で、面積は広くないが落葉広葉樹林もみられる。樹林を構成する高木の樹種はミズナラが多いが、これはかつて薪炭林として利用されていた植生であると思われる。そこにシラカンバがみられるということは、かつては今よりもっと明るい環境が広がっていたことを示している。このような植生は、三郷スカイラインに限らず西側の山地帯上部（標高およそ一〇〇〇〜一五〇〇メートル付近）の植林されていない場所に広く分布している。

展望台や林道、鉄塔の周辺では草刈りが行われ、明るい草地環境が一部に残っている。そこでは里地ではみられない高原の花々を楽しむことができる。展望台まで足を伸ばす機会があれば、周辺を歩いて花を探してみてもいいだろう。

その先の林道を進むと（途中でゲートがあり一般車は通行不可）、冷沢から鍋冠山（二二九四メートル）を通り、北アルプスの大滝山（二六一四メートル）へと続く登山道となる。

ササ原とそこに息づく生命

そのような木々が茂る林床に目をやると、そこには広大なササ原が広がっている。全国的に林野部ではよく見られるササだが、スカイラインから

大滝登山道にかけての一带は、市内でも特にまとまった広さのクマイザサ（シナノザサ）群落となっている。

一般的には、繁殖力が旺盛である、林床の光を遮るため他の植物が育ちににくくなる、等の理由から厄介者とされることが多いササだ



タマガワホトトギス



ヨツバヒヨドリ



オカトラノオ

が、目を凝らせばその周辺には独特の生態系が構成されていることがわかる。

日陰に舞うチョウたち

薄暗い林床に時折黒っぽい地味な色をしたチョウが素早く飛び回る。止まった姿をよく見ると、翅に浮かぶ蛇の目模様がくっきりと美しい。これらヒカゲチョウのなかまは、その名の通り薄暗い環境でみられることが多いチョウである。

特によく似たヒカゲチョウとクロヒカゲや、ヤマキマダラヒカゲとサトキマダラヒカゲなどは、幼虫の食草であるササ類がある環境であれば、様々な環境で幅広く見ることができる。



ヒカゲチョウ（上）とヤマキマダラヒカゲ（下）

これらの種は、花の蜜だけでなく樹液や腐った果実、動物の糞尿、死体等にも群がり吸汁する。時には人間の手に



汗を吸おうと手に止まったクロヒカゲ

止まり、体表の汗を吸おうと口吻を伸ばしてつついてくることもある。チョウにとっては生きるための行動なのだろうが、その様子はなんとも可愛らしい。

ササの上の小さな「軍拡競走」

ササ原の中の登山道を歩いていると、光が点滅するように白と黒を交互に瞬かせて、小型のチョウが飛んでいるのを見かける。翅の両面が白と黒に塗り分けられたゴイシシジミだ。市内でも特に三郷の里山でよくみられるチョウである。葉の上に止まった姿は、ハイヒールを履いた貴婦人のように凛々しく映る。

このゴイシシジミは、その食性で有名である。日本産のチョウでは唯一、幼虫時代から成虫まで完全に肉食性なのだ。その凜とした見た目からはおよそ連想しづらい。

初夏の頃、ゴイシシジミのメスは、産卵場所を探してササ原を飛び回る。ゴイシシジミが卵を産むのは、ササに寄

この兵隊は通常の個体に比べて前肢と頭にあるツノが太く長く発達しており、この前肢で敵に組み付くとツノを突き刺して攻撃する。兵隊は子を産むことはないため、他の個体を守るためだけの存在であるといえる。兵隊に攻撃された捕食者の幼虫は、時には葉の上から落とさ



ゴイシシジミ

生するササコナフキツノアブラムシの集団の中だ。やがて産み付けられた卵から孵った幼虫は、糸を吐いて自分の周りに巣をつくる。この巣の中から時折顔を出しては、周囲にい



ササの葉裏のササコナフキツノアブラムシ集団の中に産卵するゴイシシジミのメス

るアブラムシを捕食するのである。一方、そんな身近に天敵がやってきたササコナフキツノアブラムシも黙ってやられているわけではない。このアブラムシは、子どもを産んで繁殖する通常の個体の他に、敵を攻撃することに特化した「兵隊」を産出するのだ。この兵隊は通常の個体に比べて前肢と頭にあるツノが太



ササコナフキツノアブラムシの兵隊（右中央）



通常個体（左）と比較すると、兵隊（右）では前肢や角が発達しているのがわかる

れてしまうこともある。食うものと食われるものの、互に命がけなのだ。ササコナフキツノアブラムシは、この特異的な天敵に対抗するために、「軍勢力」を進化させてきたのかもしれない。一見すると画一的で、多様性に乏しく見えるササ原。しかしよく見てみると、そこでは、他とはまた一味違った生物たちの生存競争が繰り広げられている。

（松田貴子、幅拓哉）

7 屋敷林をつくるケヤキの巨木

ケヤキの分布と材の利用

三郷にも多くの屋敷林がみられる。安曇野の屋敷林にどんな樹種が植栽されているかについては『豊科の宝』で述べたが、ここでは特にケヤキをクローズアップしてみよう。

ケヤキは本州、四国、九州に自生する樹木で、自然分布の他に、明科の廃線敷周辺のように（『明科の宝』参照）人為的にも植栽されるため、最も身近な広葉樹のひとつといえる。材は耐久性や耐湿性に優れる一方、非常に硬く摩耗に強いという特徴がある。建築材としては特に社寺建築にさかんに使われてきたが、他にも家具・建具から仏像などの木彫まで用途は多彩である。

屋敷林の樹木としてもケヤキはよく植栽されている。防火や防風の目的だけではなく、小枝は燃料に、落ち葉は堆肥にと、日常的な実用性も持ち合わせる。こうしてみると人間にとってはかなり有用な樹種であったことがわかる。

三郷下長尾にある民家の門にあるケヤキの直径を測ったところ、幹周り五・五呎にも及ぶ巨木であった。屋敷林と



ケヤキの巨木のある屋敷林（下長尾）

してずっと人々の生活を支えてきたことが見てとれる。

生きものを育むケヤキ

ケヤキは巨木になると樹洞ができやすい。ある屋敷林のケヤキの樹洞にはムクドリが営巣していた。他にもフクロウやムササビなどケヤキの樹洞を利用して営巣する生き物が多い。またケヤキの枝には半寄生植物のヤドリギ類が取り付いていることが多く、冬場になるとオレンジや黄色の甘い実を野鳥に提供する。こうしてケヤキは里の生態系の重要な構成要素にもなっている。



ホザキヤドリギの実を食べるヒレンジャク（上）と巣に餌を運ぶムクドリ（下）

有用な巨木は供出へ

戦時中、有用なケヤキの巨木は貴重な資源として管理の対象となった。昭和一四年（一九三九）、戦時体制下で「用材生産統制規則」が發布された。これには、ケヤキの大径木の用途は軍需、内地使用の船舶及び車両用であると書かれている。

安曇野のケヤキの巨木も供出された。左の写真は明盛で昭和一八年（一九四三）三月にケヤキを伐り出し供出した



昭和18年のケヤキ供出の際の記念写真

記念に撮影されたものである。人々の誇らしい表情がみてとれる。

現在残っている巨木のケヤキには樹齢数百年のものもあるだろう。長い間人々の役に立ち、生き物を育んできた樹木である。

（松田貴子）

先進地ドイツで林学を学ぶ

白澤保美^{ほみ}は明治元年（一八六八）、南安曇郡明盛村に生まれた。一七歳で故郷を離れ大阪のミッシヨンスクールへ進学、その後一九歳で東京農林学校へ入学した。保美が在籍していた東京農林学校は明治二年（一八九〇）に東京帝国大学農科大学として統合されたが、大学入学の資格を得るために一年間基礎学を学ぶ必要があった。この時、保美は特にドイツ語を勉強強^きめたという。時は明治二〇年代、日本は先進地ドイツの林学を手本として、林業の近代化を目指していた。そのため林学を学ぶ者にとってドイツ語は必須であった。当時、農科大学ではドイツ人技師、そしてドイツ留学から帰国した先人たちが教鞭を執っていた。保美はそのひとり、造林学を教える本多静六^{せいろく}の門弟として学んだのである。

本多静六は日本初の洋式公園である日比谷公園をはじめ、須坂市の臥竜公園など全国の公園を設計し、明治神宮の森づくりや国立公園の設置に関わるなど、大きな業績を残した人物である。保美との間には、本多が設計した公園

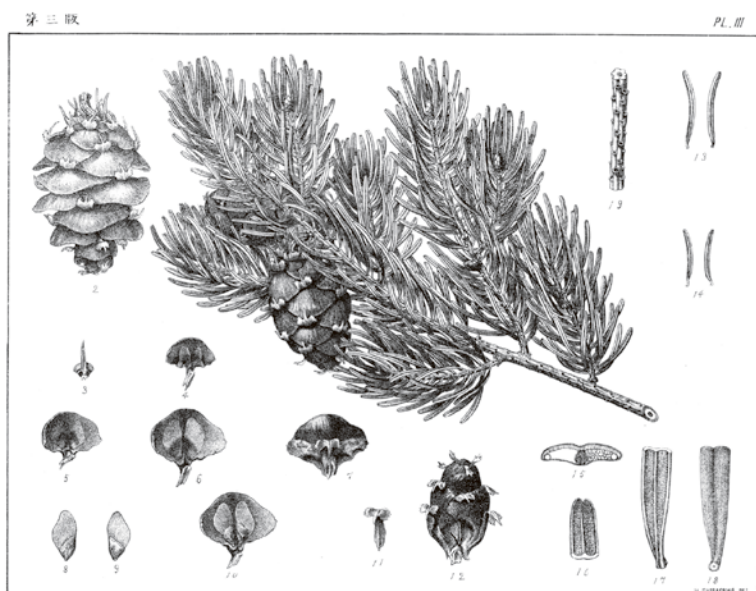


『日本森林樹木図譜』明治44年（1911）発行の普及版

に植樹する樹木を保美が提供するなど、協力的な関わりがあった。

日本森林樹木図譜の製作

明治二七年（一八九四）、農科大学林学科を卒業した保



明治 28 年（1895）に保美が発表したトガサワラの新種記載論文より
（植物学雑誌 9 巻 96 号、1895 年）

美は大学院に入学し研究を深めながら、農林省山林局（現在の林野庁の前身）に勤めた。

ここで保美は、山林局において中断されていた樹木図鑑制作の事業を引き継ぐことを決意する。そこから五年後の明治三二年（一八九九）に第一巻が、さらに明治四二年（一九〇九）に第二巻が出版されて完成となる。その図譜には、約三二〇種の樹木について、葉、花（解剖図とともに）、実、樹皮、そして木目まで詳細な画が付されている。海外の図鑑を参考に制作されたであろうが、非常に完成度の高いものであった。協力者がいたとはいえ、全国各地に分布する樹木について花や実の適期に採集し観察するという労力は計り知れない。

このなかには、保美が発見に関わり学名を記載した樹木トガサワラ（マツ科）、ヤツガタケトウヒ（マツ科）、オオバボダイジュ（アオイ科）なども含まれる。トガサワラの記載論文はドイツ語で書かれたものである。この時代に論文を書いて新種を命名記載できる日本人は非常に限られていた。

その後昭和五八年（一九八三）に、現代の知見を反映させて内容が加筆修正され、図をすべてカラーで彩色した『原色精密日本森林樹木図譜』が出版された。本書は安曇野市内の図書館で閲覧することができる。



旧温明小学校跡地のヒマラヤスギとユリノキ（市天然記念物）

ユリノキとヒマラヤスギ

明治四一年（一九〇八）、保美が四〇歳の時、山林局の林業試験所長となる。現在の国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所である。この年、保美は故郷三郷の温明小学校の開校記念として、ユリノキとヒマラヤスギを寄贈した。これらが現在、市の天然記念物として受け継がれるユリノキとヒマラヤスギ（二本）である。樹齡は一〇〇年をゆうに超えていることになり、

ヒマラヤスギの並木で有名な松本市のあがたの森公園にあるものよりも古い。
ユリノキ（モクレン科）は北米原産、ヒマラヤスギ（マツ科）はヒマラヤ・アフガニスタン原産で、どちらも明治の初期の頃に日本に持



ユリノキの花

ち込まれ、学校や公園によく植栽されてきた。両種とも巨木となる樹木である。子どもたちの学びの場にふさわしいと考えて選ばれたのではないだろうか。

要職を務めながらの研究

保美はこの所長職を六三歳まで長く勤めた。また日本林学会（現在の日本森林学会）会長を二三年間も引き受けている。所長退職時には門下生や同僚が「白澤保美博士記念会」を組織して記念金を募集したところ、当時で三〇〇〇円もの寄付が寄せられたという。これを渡された保美はすべて日本林学会に寄付した。確かな研究と実務の実績を積



白澤保美（大正9年（1920））

み重ね、誠実な人柄であった保美が多くの人から深い信頼を得ていたことがうかがわれる。

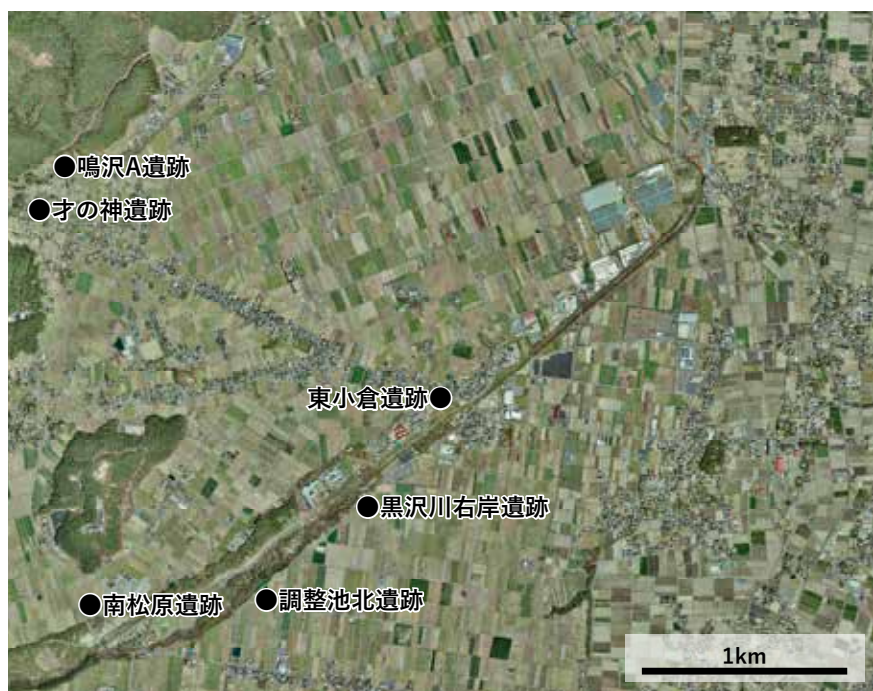
保美が書いた数々の研究論文は、現在インターネット上で読むことができる。研究テーマは、種子の保存方法や苗木の育成・移植方法、造林技術など、林業分野における実践に応用していく内容が多い。「基礎学の確固たらざる応用はあたかも活花の如きものである」という保美の言葉が残っている。科学的な研究と知識を基盤とし、深い観察眼をもって実践する。生涯を通じて、この姿勢が貫かれているように感じられる。彼は明治三四年（一九〇一）から三五年にかけて、ドイツ・スイスに留学しており、そういった科学的な態度をより深く学び、日本に根付かせる必要性を感じていたことだろう。

保美は昭和二年（一九四七）一二月に七五歳で亡くなった。数時間前まで農水省などを訪問し、戦争によって荒廃した山林や林業の立て直しについて話していたという。生涯をかけて日本林業の発展と樹木の研究に尽くした人であった。

三郷明盛の真光寺に保美の墓がある。そこには保美が中国の孔子廟から持ち帰ったという樹木カイノキが植えられており、今も彼を静かに見守っている。

（松田貴子）

縄文時代の三郷



縄文時代のおもな遺跡

三郷の歴史の幕開け

三郷で最も古い人類の痕跡は、北アルプス山麓から東流し住吉神社の西で忽然と姿を消す黒沢川の沿岸にある。それは、黒沢川左岸の東小倉遺跡から出土した、有舌尖頭器と考えられる石器である。有舌尖頭器は、旧石器時代最終から縄文時代への移行期（約一万五千年前）に流行した茎をもつ槍先形の石器で、狩猟に使われたと考えられている。

また、縄文時代早期末（約七〇〇〇年前）、室町の調整池北遺跡では块状耳飾の製作が行われていたこともわかってきた。

南松原遺跡——縄文土器の一括投棄

南松原遺跡は、黒沢川にかかる赤沢橋と室山の間に広がる縄文時代中期の集落跡である。現在は、大部分が果樹園となっており、遺跡内の農道を注意深く歩くと、周辺に縄文土器の破片や石器を見つけることもある。

昭和四五年（一九七〇）一二月九日、長野県教育委員会

にかかってきた一本の電話から、この遺跡に注目が注がれることとなった。農道の工事中に縄文時代の竪穴住居跡が見つかったのだ。早くも一三日には、樋口昇一氏を団長とし、大学生や県ヶ丘高校の生徒を主力とした調査団の発掘が始まった。師走の小雪が混じる強風で凍える中、二〇日まで断続的に行われた六日間の発掘で、竪穴住居跡一三軒からなる縄文時代中期の集落の様子が明らかになった。

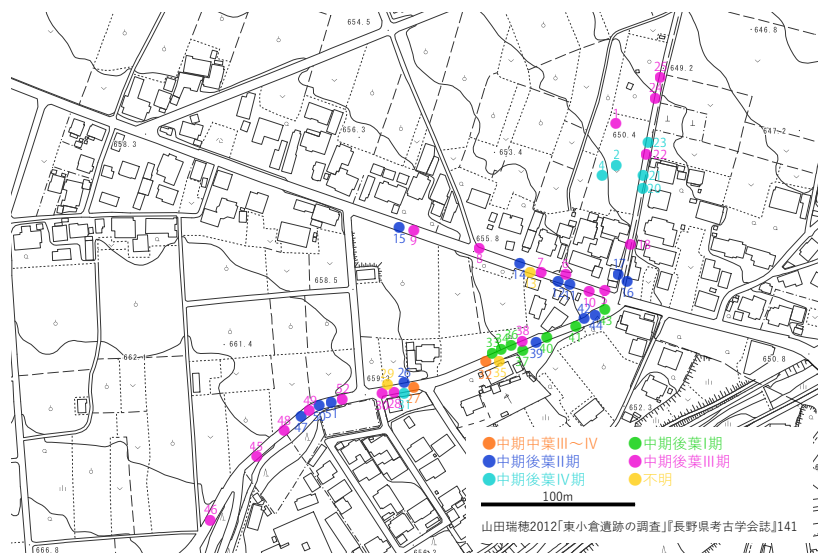
出土遺物で特筆すべきは、第五号住居址の土器群である。ここでは竪穴住居廃絶後に、ほぼ完全な形のままで土器一個体がまとめて投棄されていた。安曇野では珍しい立体装飾をもつ躍動感あふれる土器群は八ヶ岳山麓の影響が強く、複雑な曲線文様が胴体を埋め尽くす土器群（焼町式土器）は浅間山周辺の影響が濃い。しかし、いずれも本場の



南松原遺跡の遺構配置



焼町式土器（南松原遺跡）



東小倉遺跡の竪穴住居跡の配置

東小倉遺跡——とりわけ多くの土偶を持つ大集落

土器よりも小ぶりに作られている。その様は、あたかも南松原の縄文人の奥ゆかしさが表れているかのようである。

東小倉遺跡は、黒沢川橋の西側一帯に広がる縄文時代中期の大集落である。これまでに、三郷村教育委員会による下水道敷設などの狭い範囲での六次にわたる発掘調査から、竪穴住居跡が五三軒も見つかっており、遺跡全体では一〇〇軒以上になると考えられている。

東小倉遺跡は、正式な発掘調査以前から縄文時代の遺物が出土することでも有名であった。採集された遺物は、土器や石器だけでなく、土偶、ヒスイ製の有孔大珠、三角埴形土製品といった特別なものもある。

ヒスイは新潟県糸魚川市が国内最大の産地とされ、縄文時代には糸魚川産のヒスイ装飾品が広く流通している。その中でも大珠は、威信財として相当の価値があったと推定されており、各地域の拠点的な集落が所有している。

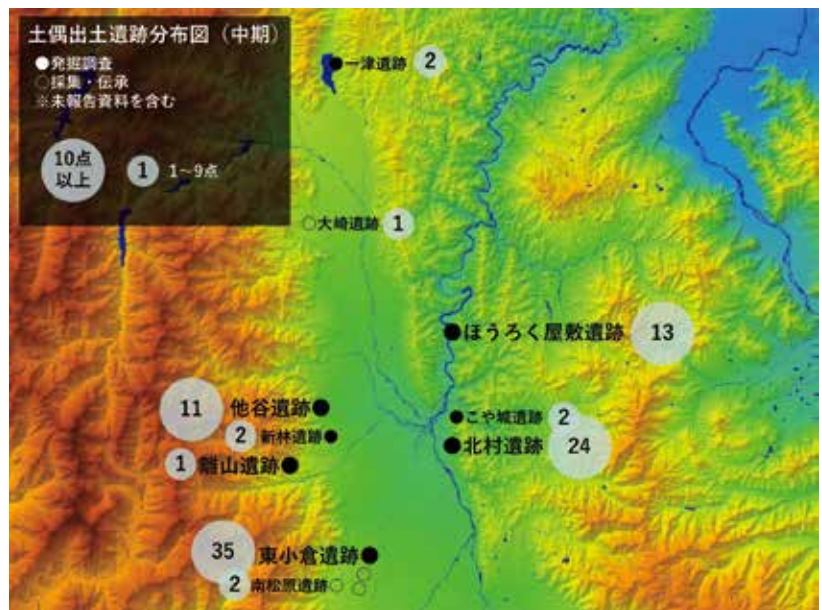
三角埴形土製品は、片手にのる大きさの三角柱形の土製品で、用途はわかっていない。安曇野市では、現在四点左右しか見つからない貴重な遺物である。



やさしい表情の土偶（東小倉遺跡、個人蔵）

土偶は、縄文文化に特有の土製人形である。筆者は、以前から漠然と東小倉遺跡では土偶破片が多いと感じていたが、近年、安曇野市内の土偶を遺跡ごと

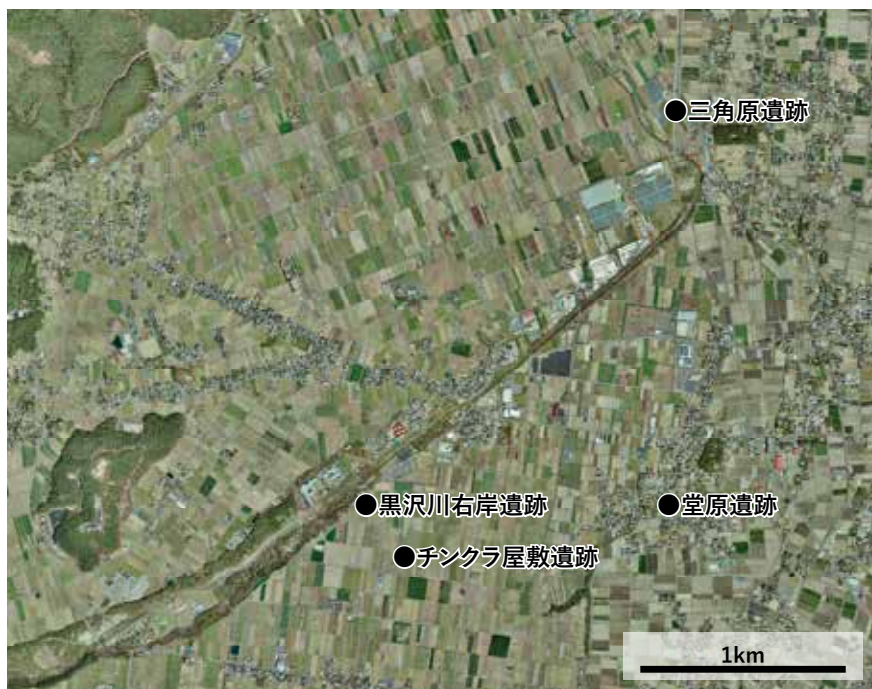
に集計したところ、縄文時代中期の土偶としては東小倉遺跡出土例が三五点以上で安曇野市内最多となった。土偶の保有数は、集落によって多寡があり、東小倉遺跡はとりわけ多くの土偶を持つ集落である。東小倉遺跡が地域の拠点的な集落として存続した理由の一端は、今後の土偶研究から垣間見えるのではないかと期待している。（土屋和章）



松本盆地北半の土偶出土数（縄文時代中期）

2

弥生時代の三郷



弥生時代のおもな遺跡



文様がある弥生土器の壺
(黒沢川右岸遺跡)

黒沢川右岸遺跡——貴重な弥生時代中期の竪穴住居跡

黒沢川右岸遺跡は、室町橋下流の黒沢川右岸に広がる縄文・弥生時代の集落跡である。この一帯は果樹園となっており、黒沢川沿いには松林が伸びる。発掘は昭和五八年（一九八三）に、三郷村教育委員会が実施した。

発掘では、弥生時代中期の竪穴住居跡が二軒見つかった。松本盆地の弥生時代前・中期の遺跡では、土器や石器はある程度見つかるが、集落跡は見つけるのが大変難しく、この時期の集落跡の発掘事例はわずかである。安曇野市内では、現在のところ明確な炉を持つ弥生時代中期の住居跡は、黒沢川右岸遺跡と町田遺跡（豊科田沢）にしかない。

発掘での出土遺物からは、安曇野の弥生文化に関する多様な知見が得られた。土器には太めの線で平行線や波線、菱形など



糸を撚るための紡錘車
(黒沢川右岸遺跡、直径 6.8cm)

れるようになった。黒沢川右岸遺跡では、糸を撚るための紡錘車と呼ばれる道具も出土している。

石器には、長野盆地で作られ広域に流通した大型蛤刃石斧がある。また、手斧として使われたであろう扁平片刃石斧も見られる。過去には、武器を模造した石戈と呼ばれる石製品も採集されている。この遺跡では、これらの弥生文化に特徴的な石器がセットとして揃っているものの、稲穂の収穫具とされる磨製石包丁は見つかっていない。

黒沢川右岸遺跡の調査成果は、弥生文化Ⅱ水稻栽培というシンプルな弥生時代観に疑問を投げかけ、水稻栽培以外に食糧生産の軸足を置く生き方もあるという、弥生文化の地域的な多様性を示しているように感じる。

チンクラ屋敷遺跡——謎の石器「四頭石斧」

黒沢川右岸遺跡の南約三五〇㍎に、チンクラ屋敷と呼ばれる場所がある。この変わった地名の由来は諸説あるようだが、よくわかっていない。ともあれ、この場所からは何とも奇妙な石器が見つかっている。四頭石斧と呼ばれる石斧である。

四頭石斧は、「+」字状に四方向に磨製石斧のような刃部をもち、中央には円い穴が開いている。これでは木材の伐採や加工用の斧としては使えないし、使った痕跡もない。中央の穴には柄を通すような気もするが、やはり確証がない。なんとも理解が難しい石器である。



長野盆地産の可能性のある四頭石斧
(チンクラ屋敷遺跡、直径約 20cm)

近年、この石斧の石材を再度検討したところ、粗粒玄武岩製であるという結論に至った。粗粒玄武岩は、大型蛤刃石斧の石材である輝緑岩と化学組成がほぼ同じで、長野盆地産の可能性が高い。チンクラ屋敷遺跡からは、弥生時代

中期の土器片も出土しており、これまで謎の石器だった四頭石斧は弥生文化の産物として長野盆地から三郷にもたらされたと考えられるようになってきた。

堂原遺跡——信州の弥生文化に特徴的な石器群

堂原遺跡は、上長尾集落にある。古利平福寺の南東一帯の住宅地が遺跡範囲とされているが、遺跡は地中深くに眠っており、広がりや遺構の様子はよくわかっていない。

弥生時代の遺物では、かつて個人宅の敷地でサイロを



弥生文化の特徴的な石器群（堂原遺跡）

掘った際に見つかった土器・石器が知られている。土器の文様からは、堂原遺跡が黒沢川右岸遺跡とほぼ同時期の遺跡ということがわかってい

かし、ここでも稲穂の収穫具である磨製石包丁は見つかっていない。

稲作を選ばなかった三郷の弥生文化

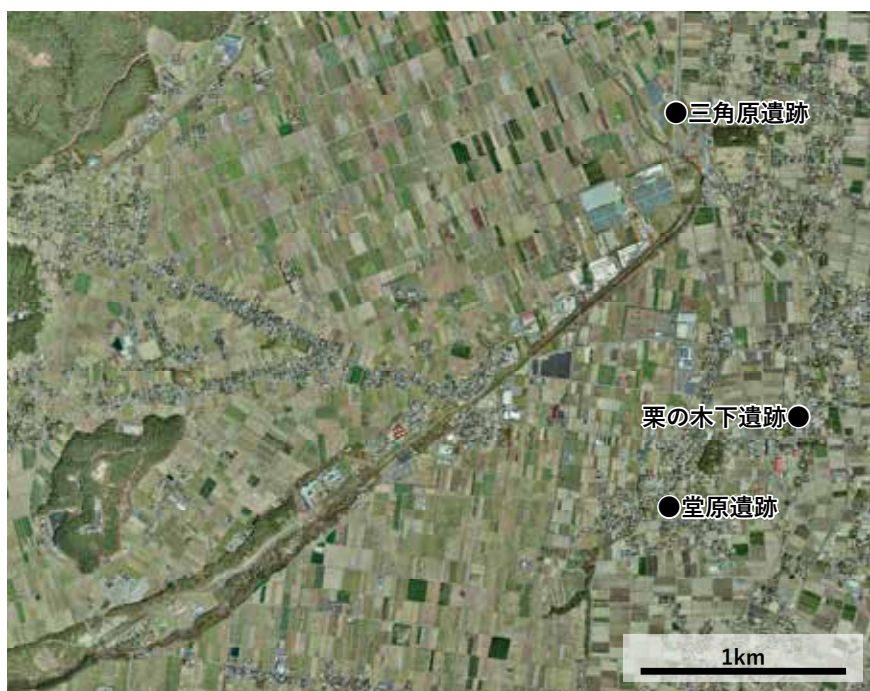
先述のとおり、太型蛤刃石斧は、長野盆地で製作され広域に流通したことがわかっている。いわば、北信の弥生文化の要素である。これに対し、打製の大型刃器や横長の刃器は、河岸段丘上で畑作を行っていた伊那谷に見られ、南信の弥生文化の要素といえる。

黒沢川右岸遺跡の土器では、器面に稲粳によると考えられる痕跡が見つかっているため、三郷の弥生時代の人々は稲作自体を知っていたようではある。しかし、遺跡の立地が水利に恵まれていないという地形的な制約と、磨製石包丁を持たないという石器群の特徴からすると、水稻栽培の導入は限定的だったのではないだろうか。食糧生産のための基盤は、畑作や縄文時代と変わらない狩猟・採集・漁労にもおいていたと考えるのが妥当であろう。

北信と南信の文化的境界域に点在する三郷の弥生時代中期の遺跡が双方の地域の文化要素を併せ持つ様子は、畑作の技術を南信から導入しつつ、威信財としての太型蛤刃石斧などは北信から獲得するといった弥生人の交流の証左であると考えられる。

（土屋和章）

3 平安時代の三郷



平安時代のおもな遺跡



多数の竖穴住居跡（三角原遺跡、上が西）

三角原遺跡——二〇〇年続いた大集落

一〇世紀前半に編纂された『和妙類聚抄』から、同時代には信濃の国府が筑摩郡（現在の松本市周辺）にあったことがわかる。この頃、梓川・犀川を挟んで対岸に位置する三郷には、三角原遺跡という大きな集落がつくられた。

三角原遺跡という名称は、日比野允夫氏が、昭和初年に命名し、その後『南安曇郡誌』『三郷村誌』で採用された。遺跡は、住吉神社の北西二五〇メートル付近に広がり、平成一五年（二〇〇三）に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている。この調査の結果、九世紀から一一世紀にわたる五六軒もの竖穴住居跡が見つかり、この場所が約二〇〇年間続いた集落であることが判明した。

栗の木下遺跡——平安時代の墓壙

栗の木下遺跡は、広域農道の上長尾交差点から北東約二〇〇メートル付近に広が

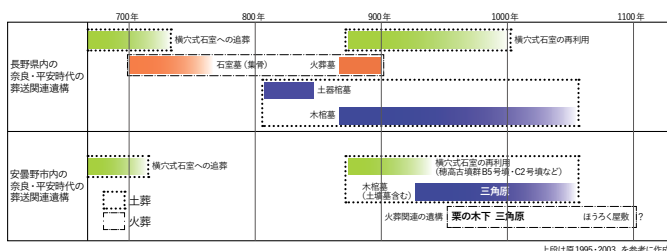
る平安時代の集落跡である。この遺跡は、以前から平安時代の須恵器・土師器や灰釉陶器が採集されており、平安時代の遺構の存在が推測されていたところ、昭和六二年（一九八七）のほ場整備事業に伴う試掘で三軒の竪穴住居跡が見つかり、当該期の集落跡であることがわかった。

平成一五年（二〇〇三）には、三郷村教育委員会が試掘を実施し、一〇世紀後半の墓墳四基を見つけている。

新しい勢力の台頭と古代の終焉

三郷では先述の二遺跡のほか、堂原遺跡や道下遺跡でも平安時代の遺物が採集されている。実は、三郷では弥生時代後期から奈良時代までの約八〇〇年間、大規模な集落や墓といった人の痕跡は見つかっていない。ところが、平安時代の中頃になると、三角原遺跡をはじめとして大小の集落が突然姿を現すのである。

この理由を、三角原遺跡の発掘調査報告書から紐解いてみたい。平安時代の社会は、それほど平安な社会状況ではなかったようで、松本盆地では前の時代から続いた集落が衰退し、同時にそれまで集落のなかった場所に新たな集落が出現してくる。報告書では、後者の原因を、奈良時代以降の重税や自然災害に起因する社会的閉塞感から律令的な体制が弱体化する中で、新興の有力者の一部が、それまで



奈良・平安時代の墓のうつりかわり

無人であった土地を開拓・経営したという解釈を提示している。

平安時代の墓は、被葬者についての情報を与えてくれる。三角原遺跡では、三基の墓墳と一基の火葬関連遺構が見つかった。火葬関連遺構とは、焼土や焼骨を含む墓を指し、安曇野では一〇世紀後半以降に見られる。栗の木下遺跡で見つかった墓墳のうちの一基にも焼土・焼石が含まれていた。新たな集落の出現と呼応するように、安曇野では都の影響を受けた木柩墓などの墓がつくられ、やがて火葬関連の墓も出現するという流れ

ができたようである。このように集落・墓のあり方から、新しい有力者が三郷の地を切り開いたことは明らかである。三郷の平安時代の集落は一〇・一一世紀には終わりを迎えるが、新しく開拓した水路や農地は次の時代の経済的基盤となったはずである。この画期こそ、三郷における古代の終焉であると同時に、中世的社会の始まりといえるのではないだろうか。

（土屋和章）

1 住吉庄をめぐる争いと西牧氏

往昔より度々川筋を変えて流れていた暴れ川・黒沢川は、一方で扇状地を流れ下る途中で地下に潜ってしまう^{すえ}末無川^{なしがわ}でもあった。その水流が地下に潜る位置に祭られ、暴れ川を鎮める役割を担ったのが、住吉神社であるという。ここを中心として、広大な^{しょうえん}荘園・住吉^{すみよし}庄が置かれたのは、平安時代後期と考えられている。

貴族の荘園として

荘園とは、主に貴族や寺社が支配する広大な私有地を指す。平安時代、天皇の予備的な住まいである後院の維持費用を捻出するため、各地に「後院領^{ごいんりょう}」と呼ばれる荘園が存在していた。のちにこの後院領は、上皇の荘園へと伝えられていくのだが、住吉庄の場合は、後白河法皇の後院領とされていた。

鎌倉時代初期の文治二年（一一八六）、「乃貢未済之庄々注文^{のうぐ}」つまり年貢を納めていない荘園のリストが、法皇から源頼朝に出されており、その中に住吉庄がみえる。

その後、住吉庄は法皇の持仏堂である長講堂に付属する

荘園となる。以後、何人もの貴族に伝えられていくが、多くの荘園とともに「長講堂領」と一括されていた。

建久三年（一一九二）に法皇が亡くなると、妃であつた高階^{たかしな}栄子^{えいし}（丹後局^{たんごのつぼね}）とその皇女^{きんし}観子^{かみ}内親王^{ないしんのう}（宣陽門院^{せんやうもんいん}）にこの長講堂領が受け継がれる。その際、朝廷などから課せられていた諸々の費用負担が免除された。例え



住吉神社

ば、大嘗会^{だいじょうえ}や宇佐八幡宮への勅使派遣、内裏^{だいり}の造営などである。その中に「住吉造営」すなわち現在の大阪府にある住吉大社の造営があった。あるいは、この「住吉造営」の費用負担が課せられていたという縁から「住吉庄」と命名されたのかもしれない。

争乱に巻き込まれた住吉庄

荘園の支配構造は複雑である。住吉庄の場合、皇族の宣陽門院^{せんやうもんゐん}が「本所^{ほんじょ}」と呼ばれる上位の領主であったが、高階栄子とその先夫であった平業房^{なりふさ}の子孫にあたる山科氏^{やましな}が「領家^{りやうけ}」として荘務を司っていた。以後、本所は領家から年貢の一部の上納を受ける形がとられていたようだ。

一方で、住吉庄を現地で支配していたのは、西牧氏であったと思われる。彼らは、旧梓川村域にあった郷村の在地領主だったが、その勢力は現在の住吉神社の位置する楡周辺まで及んでいたようだ。そして本所のような上位の領主の交替に伴い、住吉庄やその在地領主たちも、様々な対立と争乱に巻き込まれていくのである。

鎌倉時代後期、住吉庄を含む長講堂領の本所は、後深草上皇に受け継がれていた。このころ宮廷内では、皇位継承をめぐる対立が起きている。後深草上皇に始まる系統が「持明院統^{じみょういんとう}」と呼ばれ、長講堂領を財政基盤としていた。

一方、その弟の後龜山天皇から始まる「大覚寺統^{だいかくじとう}」からは、後醍醐天皇が立つことになる。この両派の対立が鎌倉幕府の滅亡と前後して、全国を巻き込んだ南北朝の争乱へと発展する。持明院統が北朝、大覚寺統が南朝である。

鎌倉幕府の勢力を

滅ぼした足利尊氏は、建武二年（一三三五）、配下にいた信濃守護の小笠原貞宗^{さだむね}に住吉庄などを与えた。西牧氏は鎌倉幕府方に属していたと思われる、その所領であった住吉庄を没収したもののだろう。

南北朝時代における西牧氏の動向は、史料上にみられないが、その影響下にあったと思われる上長尾の平福寺では、北朝の年号が使用されていたらしい（六四頁参照）。だが同じく北朝に属していた小笠原氏とは、住吉庄をめぐって対立しており、一線を画していたはずである。室町時代に西牧氏も加盟する大文字一揆の勢力は、「故敵当敵^{こてきとうてき}」



安土桃山時代に移転した現在の長講堂（京都市下京区）

(昔の敵は今も敵)のスローガンを掲げて信濃守護小笠原氏に対抗したが、その構図は当時から変わらなかったのだろう。

西牧氏の小笠原氏への抵抗は、戦国時代まで続く。後世の記録『笠系大成』^{りゅうけいたいせい}には、甲州の戦国大名武田氏が松本平に攻め寄せた際、西牧氏が「(小笠原)長時に叛き(武田)晴信に属」したと書かれている。だがこれは小笠原氏側の記録である。そもそも住吉庄をめぐる敵対関係にあった西牧氏からすれば、また違った主張になるのではなからうか。

西牧氏の砦か？

長尾城

平福寺の南西、赤坂段丘の突端に、長尾城が築かれていた。

かつて梓川が形成したこの河岸段丘は、旧梓川村の八景山^{やけやま}や立田^{りゅうだ}から野沢へと続き、上長尾の平福寺の西方で終わる。この段丘は途中、沢筋に



長尾城跡

より断絶している箇所がいくつかあり、長尾城の北西にも黒沢川の分流が流れ下って段丘を削り取ったとみられる窪地がある。長尾城は小城ながら、沢筋が削った窪地と河岸段丘を、堀または切岸(法面^{のりめん})として利用して築かれた要害であった。

長尾城の城主は、

「長尾監物」^{けんもつ}なる人物だという言い伝えもあるが、史料的な裏付けはない。ただ、一志茂樹氏によれば、西牧氏がこの段丘の縁に沿っていくつかの砦を築いており、その北方にある長尾城も、一連の関係的存在ではないかという。河岸段丘と、沢筋が削った谷を利用して小要害を築く手法も同じで、いずれも東方からの外敵に備えている。さらに、旧梓川村域の段丘に築かれた砦の下の平地には降籓田圃^{じょうしたんぼ}という古田が広がっているが、長尾城下に広がる「城下田圃」の様相もこれに似ている(五七頁参照)。



沢筋の跡を利用した長尾城北側の切岸

以上のことを総合すると、長尾城は西牧氏の支配下に置かれた城である可能性が高い。巨大な段丘の縁辺上や、その背後の山の上に大小の城砦を配置し、段丘の下で豊かな水田を営んでいた西牧氏が、三郷地域まで勢力を及ぼしたと考えると良いだろう。

長尾城があった段丘の斜面は、今でこそ樹木や藪に遮られて見通しが利かないが、かつてはここから住吉庄の郷村を見渡すことができたことだろう。

『三宮穂高社御造宮定日記』にみる「住吉十八郷」

穂高神社には、『三宮穂高社御造宮定日記』と題する巻物が伝わっている。戦国時代、数えの七年に一度行われた遷宮に関する古文書である。文明一五年（一四八三）から天正一三年（一五八五）までの一点が現存し、社殿や鳥居などの建て替えを請け負った郷村が記されている。

ここに「御門屋一字 二階 住吉庄所役」とあり、「飯田・熊倉両条」など一八の郷村の名前が続く。これらは住吉庄に属していたと考えられ、「住吉十八郷」と通称される。その範囲は、北は寺所から南は角陰・杏まで広域にわたる。

「住吉十八郷」は、戦国時代初期の文明八年（一四七六）と、後期の天正七年（一五七九）に、現在の諏訪大社下社



明応10年（1501）の『三宮穂高社御造宮定日記』（穂高神社蔵）（部分）

春宮の造営費用も負担しているが、郷村の内訳がそれぞれ少しずつ異なっている。時代の変遷につれて廃絶し、また新興・拡大を遂げた郷村もあったのだろう。

ところが『三宮穂高社御造宮定日記』では、作成年によって欠損があるものの、郷村の異動はみられないようだ。旧規や先例が特に重んじられていた前近代のことである。特に神事においては、現状が変化しようにとも、昔からの郷村のあり方を重んじる姿勢が貫かれていたようにも思われる。

「住吉十八郷」の土豪・地侍

西牧氏は、住吉庄の在地



二木土佐屋敷跡に立つ標柱（二木）

領主であったとはいえ、この一八郷のすべてに支配力を及ぼしていたとは考えにくい。一八の郷は、旧三郷・梓川村域はもとより、豊科地域にまで及ぶ。その中には、飯田氏、熊倉氏、成相氏、二木氏、及木氏、中萱氏など小規模な土豪・地侍層も勢力を張っていた。

及木氏は、松本市島内の犬甘氏の一族であったというし、二木氏は小笠原氏の出身という記録もあるが、西牧氏との結びつきも強かったらしく、確かなことはわからない。

二木氏の場合、戦国時代には、一日市場公民館の北隣に二木豊後守重高の屋敷があり、その弟の二木土佐は二木公民館西隣に屋敷を構えていた。一日市場の集落の西方「いすすの目」（六〇頁参照）附近には、草間肥前の屋敷が



（逸見大悟）

あった。これは二木土佐の次男・源五郎が草間氏の養子に入って住したものと考えられる。二木氏は、二木郷や、当時その郷内に含まれていた一日市場集落に一族を配して、西牧氏に比べれば小規模ながらも、独立した勢力として所領を守っていたのである。

住吉庄は、成立した時点ではそれほど広域には及んでいなかったはずである。のちに、これらの郷村に住む人々が中世という時代を生き抜いていく中で、領主の枠組みを超えて、一八の郷村が、「住吉庄」の名のもとに緩やかながらも結びつきを持ってきたということではなからうか。

2 二木氏と小笠原氏

小笠原氏と苦楽を共にした二木氏

東京大学史料編纂所に、『笠系大成』^{りやうけいたいせい}という書物が収蔵されている。江戸時代に松本から明石を経て、九州の小倉城に移った小笠原氏が、先祖の歴史をまとめた系図である。

南北朝時代に信濃守護を務めた小笠原貞宗の四男・政経の項には「二木氏之祖也」^{ふたつきしのそなり}とあり、その子貞明の項には「二木小七郎と号す」と書かれている。二木郷の地侍・二木氏の先祖であるという。

貞宗は足利尊氏からその戦功を賞せられ、住吉庄を与えられた。その住吉庄が政経を祖とする二木氏に相続されたと仮定すれば、荘園の管理者として二木氏が力をつけてきたとも考えられる。

だが後にも触れる『二木家記』には、「西牧衆二木一門」という表現もみられ、本当に小笠原氏の一族なのか、真偽のほどはわからない。あるいは、元来西牧氏の一族か郎党であった二木氏が、小笠原氏に従うようになってから、同氏との関係を強調する系図をつくったのかもしれない。

ともあれ、『笠系大成』では、二木氏は小笠原氏の一門

二木の三柱神社の境内には、端座する二人の武士と思しき石像がある。ひとりには平安時代後期の武将・新羅三郎義光^{しんらさぶろうよしみつ}、もうひとりには武士ではなく、朝廷の楽人・豊原時秋^{とよはらのときあき}である。義光は雅楽器の笙^{しょう}の名手であったが、東北地方で戦う兄の八幡太郎義家^{はちまんたうじけい}を援護するため、朝廷の官職をなげうって出陣した。これ聞いた時秋は、義光が戦死してしまつては、彼の習得した楽曲が失われると憂え、足柄山まで追いつがる。戦場へ同行することは許されなかったが、かわりに笙の秘曲を伝授されたという逸話が知られている。

それにしてもこの石像、なぜ二木の神社に置かれていたのだろうか。



三柱神社の石像（左が新羅三郎義光）

に連なるとされている。その小笠原氏は、甲斐源氏の一流であり、武田氏や南部氏などと同様、前述の源義光（新羅三郎）を祖と仰ぐ。三柱神社に奉納された石像は、二木氏も流れを汲むという甲斐源氏の先祖を讃えるために造られたのであろう。新羅三郎は、祭神の一柱としても祭られている。

『笠系大成』によれば、二木小七郎貞明は、信濃守護の小笠原政康に随い、「鎌倉及び結城合戦」で先鋒を務めたとある。この合戦は、室町幕府の足利將軍家と、関東を治めた鎌倉公方足利氏との対立から生じた、永享の乱（永享一〇年―一一年（一四三八―三九）と、結城合戦（永

政経

貞宗之四男也 母同政長
小笠原七郎 治部少輔 修理亮
彈正少弼 祿永用 二木氏之祖也
或時中御所^{未考}入洛政経供奉兵時
自江州^山驛政経與武田薩摩守勤
先津^{自關東至山河}河越^{其高坂}
貞和元年乙酉八月九日天童寺供
養將軍尊氏卿詣兵時政経供奉勤御

『笠系大成 四』小笠原政経の項
（東京大学史料編纂所蔵）

梶鎗進先登奮勇長時自當敵屢上拔
太刀破堅甲十八也^{或書曰長時遇敵十}
數多也^{太刀鎗十代鶴長二尺三寸許也}
自是名曰甲破太刀傳^{于今爲重代在于}
右近將監小笠原清藏貞種^{被氏長時之}
忠^{龍之象}其輪兄弟小笠原式部少輔賴
洞^{雪齋}貞入道簡齋^{或曰長等}振勇相戰想軍頻
進追擊馬場飯富西牧等直切前暗信之
旗本追而到西牧城下西牧敗走退上野
原^{在う西牧}暗信亦敗得首三百餘級長
時唱凱歌於奴留水河邊^{或作奴實}擣斬

野々宮の戦いで的小笠原長時の奮戦が記された『笠系大成 六』（部分）（東京大学史料編纂所蔵）

享一二年―嘉吉元年（一四四〇―四一）のことである。

時は流れて戦国時代、小笠原長時は、甲州の戦国大名・武田晴信（のちの信玄）に敗れ、本拠地の林城（現在の松本市里山辺）からの脱出を余儀なくされた。追い詰められた小笠原方は、野々宮で敵勢を迎え撃つ。ここで長時は自ら決死の突撃を敢行し、総軍「勇を振るって」、武田方の諸將を撃退。三百余りの首級をあげて勝利したという。

長時は、「奴留水」（温堰のこと）の河辺で勝鬨を挙げたが、すでに多くの者が敵に寝返り進退きわまつたとして、「義を重んじて自殺」しようとした。ここに二木豊後守重高が進み出て「軍將なんぞ徒に死地に就かんや」と諫め

て、中洞（中塔）城への退去を勧めたとある。

それから約三〇年後の天正一〇年（一五八二）三月、武田氏が滅亡すると、長時の子貞慶は、旧領の信州府中を回復するために金松寺に着陣した。二木重高の跡を継いでいた豊後守重吉も一族を率いて馳せ参じている。

三ヶ月後、武田氏を倒した織田信長も京の本能寺で横死する。強力な支配者をたて続けに失った甲信地方には、周辺の戦国大名たちが侵入を開始し、「天正壬午の乱」と呼ばれる争乱が始まった。

その混乱の中にあつて、貞慶は深志城への入城を果たし、さらに周辺へと勢力を伸ばし始めた。二木氏は、溝口・犬甘ら諸氏とともに貞慶に仕え、『笠系大成』にも数多くの活躍が書き留められている。

慶長二〇年（一六一五）の大坂夏の陣では、小笠原氏は



野々宮神社（松本市梓川倭）

幕府方として参陣する。貞慶の跡を継いだ秀政も、このころにはすでに嫡子の忠脩に家督を譲っていたが、ともに出陣、二木氏も従軍した。大坂城南方の天王寺口での戦闘は熾烈を極め、小笠原勢でも秀政・忠脩父子をはじめ、多くの戦死者を出した。

その後小笠原家は、忠脩の弟の忠貞に相続が認められ、また大坂での戦功によって加増された上で、明石、次いで小倉へと移封される。二木氏の一部の人々も付き随い、小倉藩小笠原氏の重臣として仕え、幕末に至っている。

二木氏、小笠原氏の「歴史をつくる」

さてこの『笠系大成』は、江戸時代中期の元禄十一年（二六九八）に小笠原家重臣の溝口政則と二木貞持によって編纂が始まり、宝永二年（一七〇五）に完成した。

だが小笠原氏の先祖の歴史を記録に残す動きは、秀政の代から始まっており、のちに『笠系大成附録』としてまとめられる。このうちの『溝口家記』は、貞慶の側近であった溝口秀康によって慶長一三年（一六〇八）に書かれたものである。また慶長一六年（一六一一）には「二木豊後入道寿最」が『二木家記』を書き留めている。

この二木寿斎こそ、貞慶のもとで奔走した二木重吉であった。彼は『二木家記』の文末で、「兵部大夫様（大輔）お望み

につき」、小笠原秀政の所望により、書き記して差し上げた¹と結んでいる。戦乱の時代を駆け抜けた生き証人として、長時の受けた苦難と、復活を果たして近世大名への礎を築いた貞慶の事蹟を後世に残すことが期待されたのである。

『溝口家記』には、小笠原氏初代の長清から当代の忠脩までの歴史が簡潔な文体で書かれている。一方の『二木家記』は、小笠原長時と武田氏との戦いから、貞慶の松本への復歸までのあらましが続られている。前述の野々宮合戦での長時と重高のやり取りや、貞慶が金松寺にやってきたときの重吉の反応など、登場人物の言動までが詳しく書き留められており、筆者の感情が伝わってくる箇所が多い。二木重高・重吉父子の回想録とも言えるだろう。『溝口家記』とは対照的である。

だが『笠系大成』や『二木家記』などは、後世になって一部の家臣の手でまとめられたものだ。他の古文書と『笠系大成』とを比べてみると、年代の誤りと思われる箇所や、小笠原氏の歴史の中で記録に留めておかなければならなかったはずの大きな出来事が記されていないことに気づく。また『笠系大成』の編纂を担当したのは、二木・溝口両氏の子孫であり、彼らに寄せた記述もあるだろう。その点で、現代の私たちは、これらの書物の内容を吟味しつつ、地域の歴史を学んでいく姿勢が求められる。

小倉城は小笠原氏の山城か？

実際のところ、小笠原氏は、三郷地域とどれほど関係があったのだろうか。

北小倉には、小笠原氏の一族が城主を務めたと伝わる小倉城跡がある。

松本藩が編纂した『信府統記』に「小倉山古城地」として、記されている。それによれば、城主は不明だが、この辺の「地頭」に小笠原^{たじまのかみ}但馬守貞政、また「三郎次郎」という人物がいた、とある。三郎次郎については、貞政本人のことか、その子のことかわからないが、天正一三年（一五八五）に亡くなっており、位牌が供養され



小倉城遠景（中央奥の山）

ている牌所は淨心寺である、と書かれている。そのため小倉城も「彼の人（三郎次郎）の要害なるべし」と推測している。

前述の小笠原秀政も、若いころ貞政と名乗っていたが、天正一三年に没しているわけではない。また『笠系大成』にみえる小笠原遠江守貞政は、天正元年（一五七三）に弓馬の術を伝授されたと書かれているが、親子関係から考えると、もっと早い時代の人物のようにも思われる。同時代の史料には、小笠原忠次郎貞正という人物もみえるが、確かなところはわからない。

小倉城は、南に向かって突出した尾根に築かれた。この西側の麓から尾根の周囲を巻くように鳴沢川が流れている。特に山の南側は、尾根道に上がるまでが急峻で攻めにくい。

主郭の周囲には、複数の腰曲輪こしぐるわがめぐらされている。西側



小倉城の背後から主郭部を眺める

に二本の空堀が設けられており、築城時は西側を大手として想定していたのかもしれない。

主郭の背後の北側には、尾根伝いに高所からの逆落としに遭うのを防ぐため、幅の広い堀が掘られていた。主郭背後の大堀切は、堀金の岩原城や明科の塔原城とうのはら、豊科の田沢城や光城などにもみられる。これらはみな一〇畝内外の深さがあるが、小倉城ではすでに埋まってしまったものか、さほどの深さは感じられない。

また曲輪くわや空堀などの遺構が認められる範囲は六〇七〇畝四方のようだ。小笠原氏の山城であったとすれば、安曇郡南部を支配する拠点になりえたはずだが、あまり大規模な城ではない。

小倉城は、地形を活かした山城だったが、その規模や防御施設の状況からして、小笠原氏とどのようなかわりを持っているのか、はつきりしない。「小笠原貞政」なる人物の言い伝えが残るだけに、さらに謎は深まっている。

（逸見大悟）

3 複雑に移り変わる堰

長尾堰・温堰・庄野堰

三郷地域の主な堰といえば、ぬるせき温堰やしょうのせき庄野堰が挙げられるだろう。しかし長い歴史の中で、水源の変更や堰のつけ替えが幾度も行われており、複雑な経緯をたどる。

平安時代の集落跡が発掘された三角原遺跡（四四頁参照）では、黒沢川のような自然流を利用した穀物栽培が行われていたと考えられている。だがここにあった集落は、一一世紀中ごろには廃絶していた。同地に再び生活の痕跡がみられるようになったのは、一二世紀中ごろ（鎌倉時代）であるという。

古代・中世において、集落を安定的に存続させるのは、至難の業であった。飢饉や疫病のみならず、災害や戦争も度々起きていた。そして沢水を利用した不安定な用水供給も大きく影響したことだろう。

そのような水量の供給をより安定的なものにしたのが、堰の開削であった。用水獲得の努力は、もちろん現代まで続けられているが、自然流に依存しない堰を造ることは、農作物の増産を図り、安定した収入を確保する第一歩だったと思われる。

梓川河岸段丘と長尾堰

野沢村の庄屋であった務む臺景邦の『年譜ねんぶき雑記』には、たいかげくに「長尾と言われハ、是より西ノ巾ハ、焼山より始りて此所に留まりし故に長尾と名付しとなり」とある。松本市梓川の八景山から立田、野沢を経て長尾で終わる長大な「巾」（段丘）は、梓川が形成した河岸段丘である。

この直下を流れる長尾堰が、三郷地域で最も古い堰であるという。安曇野を中心に長野県内各地の堰を詳細に調査した小穴喜一氏の説で、『三郷村誌』もこれを支持している。



河岸段丘の直下から流れる長尾堰（上長尾）

確かに長尾堰は、段丘の直下では最も高い場所を流れ、長尾一带の緩傾斜地に水を送ることができている。それまで水源として使用してきた黒沢川の自然流に水量を補強するため、開削されたと考えられているのである。

長尾城の直下には、水田耕作に適した耕土が深く堆積する「城下田圃」という古田地帯が広がっていた。沢水に加えて長尾堰の水利を得て、城下田圃を中心に中世の長尾郷の開発が進んだとしても想像に難くない。

そのような重要な堰のまわりには、長尾城のほか上総屋敷、平福寺や諏訪神社といった城館や寺社が点在しているが、これも偶然ではないのだろう。

長尾堰は、平福寺の少し南で上沢と下沢に分かれ、いくつかの堰を分派させている。上沢は楡集落の中央を流れる



上沢（写真右）と下沢（手前）の分岐（上長尾）

かど川の水量を補強し、下沢は下長尾へと流れ下って二木沢に及んだ。かつて黒沢川の自然流のみに頼っていた長尾・二木・楡へと豊富な用水を送ることが長尾堰の役割とされていたのである。

三郷地域最長の温堰

三郷地域最長の堰は温堰である。

野沢、下長尾、二木、楡といった三郷地域中央部を貫流するが、その上流、松本市梓川倭の杏集落センターの裏で長尾堰と分岐している。

現在、温堰へは豊富な水が流れ込むのに比べ、長尾堰は少ない。

だが長尾堰開削当初、状況は逆で



温堰（写真左）から分かれる長尾堰（松本市梓川倭・杏）

あったようだ。当時、温堰の流路は排水のための除沢よけざわとして使われていたという。

温堰や長尾堰のもとになったのは、上大妻や南大妻、岩岡を灌漑する男女沢おめざわであった。現在、男女沢は温堰から分かれて上大妻の集落へと流れている。「沢」と名がつくこの古い堰は、もともと自然流だったものが、さらに上流の降簾田圃ふるはたんぼや尾入沢などの残水を集めて縦堰化したと考えられている。

また、かつては大荒田堰という堰が存在し、穴沢川が梓川へと落ち込む辺りから取水していた。ここは温堰の取入口があった立田地籍に近い。

戦国時代の天正元年（一五七三）には、「大荒田口」か



温堰（写真左）から分かれる男女沢（松本市梓川倭・上大妻）

ら杏の長尾堰との分岐までを改修したと伝えられている。これらのことから、長尾堰（温堰）は、男女沢や大荒田堰といった古い堰の流路の一部を利用・改修して造り上げられてきたと推測されている。

さて、杏で長尾堰と分かれた温堰は、野沢で小田多井堰を分派させている。これも大きな堰だが、江戸時代前期の延宝六年（一六七八）に開削されたものである。これより下流の温堰は、「荒堰あらせき」の別名を持つ。「あら」は「新しい」の意味である。長尾堰よりも後代にはなるが、中世のいずれかの時点で開削されたものと思われる。

荒堰は、野沢から二木まで、ほぼ直線的に流れ下る。それも地形に沿った流路ではないことから、この間の地域の灌漑を意図したものではなかったらしい。

その後、二木地藏堂地籍に至って、中沢と住吉堰に分岐する。中沢は楡



荒堰（写真奥）から分かれる中沢（左）と住吉堰（右）（二木）

へ、住吉堰は楡集落の西側を迂回して住吉でいくつかの堰に分かれる。したがって荒堰開削の目的は、楡と住吉への灌漑であったと考えられている。

先に触れた楡のかど川も、現在は中沢から分岐している。もともとは黒沢川の末流のひとつであったが、長尾堰によって水量が補強され、さらに温堰へ接続されたという経緯をたどったようである。

一方の住吉堰は、東大堰と西大堰に分かれ、さらに東西の大境堰・大堰・呑堰へと六本に分派して、住吉集落を北流する。

さらに、荒堰の末流の堰のうちいくつかは、小住吉を灌漑する角木堰へと流れ込んでいる。これは、角木堰の水量補強のために、荒堰の末流を延長させたものという。

中世以来、堰の延長や改修、分岐を繰り返し、温堰は三郷地域最大の堰へと成長した。大正一〇年（一九二一）の調べでは、梓川村域から中堀まで八・九段に及んでいる。

一日市場を灌漑する庄野堰

もうひとつ、三郷地域で大きな堰として庄野堰がある。

かつては梓川から直接取水しており、取水口は旧梓川村の下立田の一本松地籍と、岩岡の火打岩地籍との間にあった。そこから七日市場、一日市場、二木を流れ、流末は及

木まで達している。

特に、七日市場や二木には五〇センチもの厚さの耕土が堆積していた。また庄野堰開削以前、七日市場には横沢堰の枝堰が流れていた。庄野堰は、黒沢川の自然流が届かない地域の灌漑とともに、横沢堰の水量を補強する意図をもって開発されたと考えられている。

庄野堰は、七日市場集落の西を大きく湾曲して流れ、一日市場の南の二ツ又で堂川を分岐させる。そしてすぐ下流の三ツ又で原田堰・中堰・西川の三本に分かれている。

堂川は古くは横

沢堰の末流であったらしい。そこから一日市場の郷蔵や観音堂へ向けて流れていたという。観音堂を擁する長徳寺のはじまりは明らかではないが、寺の用水として利用されていたことは想像に難くない。

また西北へ流れ



二ツ又で堂川を分岐させた庄野堰（写真手前）に流れ込む藤ノ木堰（一日市場）

た堂川は、権十堰や花園堰、二木堰に分派している。この二木との境付近に「いそすの目」という地名が残る。堂川からいくつもの堰が整然と分かれているようすが石臼の目に似ていることが地名の由来ともいわれる。

この場所は現在の三郷小学校の南東にあたり、以前は水神として社宮司が祭られていた。しかし圃場整備によって、枝分かれする堰は見られなくなり、整然とした水田の目が広がっている。社宮司の祠は、一日市場公園の一角に移されている。

庄野堰と及木堰

一方、庄野堰の三ツ又で分派した三本の堰のうち、原田堰は一日市場東村集落を流れ、中沢は一日市場の町の東を流れて及木堰に落ちている。

西川も一日市場では生活用水として集落の西側を流れているが、及木に入ると農業用水



「いそすの目」にあった社宮司の祠（一日市場）

に利用されている。西川からは東堰・東大堰・大荒神堰などが分かれ、東及木を灌漑する。またこの地点で及木堰からの水量補強を受けて西及木へ流れ、角川などを分派させている。及木は、

古くは庄野堰末の西川から灌漑されていた。だが戦国時代後期または遅くとも江戸時代前期の延宝四年（一六七六）までに及木堰が開削され、より安定的な水量が供給されるようになったと考えられている。

及木堰は岩岡で庄野堰と分かれ、一日市場駅の東を中萱堰と並行したのち、及木へと流れ込んでいた。しかし現在は一日市場の東で中萱堰と合流してしまっている。今及木集落の南を流れる及木堰はほとんどが西川からの水であると言ってよい。その点では、庄野堰に頼っていた戦国時代より前と同じ状況に戻ったと言えるかもしれない。



三ツ又で庄野堰から分派する西川（写真左）、中沢（中央）と、原田堰の水門（右）

なぞの郷村「久木」

ところで四九頁では、「住吉十八郷」に触れた。戦国時代、住吉庄に属した一八の郷村があったという。このうち三郷地域では、中萱・及木・二木・長尾・楡・「久木」の郷がみられる。現在まで続く郷村が多い中、「久木」は、場所はもちろん、「ひさき」なのか「くき」なのか、読み方さえわからなくなっている。穂高神社所蔵の『三宮穂高社御造宮定日記』以外の古文書にはみられず、江戸時代以前に廃絶したらしい。そこに「楡村・久木両条」と書かれていることから、楡に隣接する住吉集落であったのかもしれない。

だが『三郷村誌』では、このほかに、小住吉であるという小穴喜一氏の説と、楡に吸収され没入したという小穴芳実氏の説も紹介している。いずれにせよ「久木」の廃絶後、後世に再び開発の手が入ったようだ。

かつて楡と及木の間に「蛇ノ宮」の祠があった。これは開拓の神で、神社ができる前の自然神であるという。楡没入説では、ここが「久木」の宮ではなかったかと推考している。確かに蛇が水神として祭られる事例は多く、地域の開発にも大きく絡んでくる。「蛇ノ宮」の由緒がわかれば、「久木」の解明も前進すると思うのだが、いかがなものだろうか。

一方、自然流の黒沢川が住吉神社の南から小住吉まで達し、いつもここで終息していたという言い伝えもある。また小住吉を灌漑する角木堰が古堰であるとみられることも小住吉説の根拠である。先にも触れたが、荒堰（温堰）の末流が角木堰へと流れ込んでいることについて、小穴喜一氏は、

小住吉Ⅱ久木への水量を補強するためだと述べている。

三郷地域では中世以来、堰筋や水源が様々に移り変わっていった。かつて小穴喜一氏は、堰の形態や地名、耕土の深さなどから、堰が造られた前後関係を研究した。圃場整備が進んだ現在、現地での調査は困難になっているが、この研究成果は、これからも三郷地域をはじめとする安曇野の開発の歴史を説明する上での重要な手がかりとなるだろう。

（逸見大悟）



「蛇ノ宮」があったと伝わる道下遺跡付近

4 中世から続いた観音信仰の面影

平福寺・泉光寺・神宮寺・長徳寺

中世以来、多くの人々の信仰を集めた観音信仰。三十三の形に姿を変えて衆生を救うと説かれる観世音菩薩にあやかって、各地で観音を供養する三十三の寺や堂が選ばれ、庶民の間ではそれら観音霊場への巡礼が流行した。

安曇野市と旧梓川村一帯でも、宝暦一〇年（一七六〇）までに川西三十四ヶ所が成立していた。その第一番は穂高牧の栗尾山満願寺、最後の三十四番が、長尾山平福寺である。川西が三十四ヶ所あるのは、松本三十三所、仁科三十三ヶ所とあわせて百番にするためだ。

川西三十四ヶ所のうち、三郷地域では六ヶ所の寺堂が選ばれている。長尾山平福寺（上長尾）、金峯山泉光寺（南小倉）、佛花山法国寺（中萱）、満珠山龍峰寺（楡）、二木山長徳寺（一日市場）、荻野堂（及木）である。

ともに中世以来の古い集落に立地しているが、いずれも明治初年の廃仏毀釈による迫害や、火災、盗難などの被害に遭っており、その歴史はほとんどわからない。ここでは中世の観音信仰の面影を残す平福寺と泉光寺、また荻野堂の前身であった神宮寺と一日市場の長徳寺を紹介したい。

苦難を乗り越えた古刹・平福寺

長尾山平福寺は上長尾の集落の只中にある。

だが江戸時代には、平福寺観音堂の西に「鷺ノ森」と呼ばれる森林が広がっていた。この境内地の広さは、一五町（約一五畝）とも二〇町とも伝えられており、マツ・スギ・ヒノキなどの古木が鬱蒼としていた。ここからさらに西に



平福寺観音堂（上長尾）

「小倉御林」^{（おはやし）}という松本藩の藩有林が続く。

ながを山^{（長尾）}

まいりむかへば^{（鐘）} ありがたや

かねのひびきは^{（響き）} 松風の音

寺の西方には八景山^{（やけやま）}や立田^{（りゅうだ）}から続く巨大な段丘の末端が来ている。梓川が形成した河岸段丘である。現在、リング畑が広がるこの一帯に、かつてはこの御詠歌に詠まれた風景が広がっていた。広大な里山を擁した寺であった。

平福寺観音堂には、鎌倉時代初期の制作とされる木造聖観音立像^{（しょうかんのりゅうざう）}（長野県宝）が安置されている。観音霊場としての信仰は中世に始まったものであろう。



木造聖観音立像（平福寺蔵）

平福寺が観音堂の境内に移ったのは明治時代、廃仏毀釈からの復興を遂げて以降のことである。近世以前の平福寺は、現在地より南にあった。穂高牧の満願寺も元来は観音堂を管理する別当寺^{（べつどうでら）}であったらしい。平福寺の場合も同様で、長尾の観音堂を管理・護持していた別の寺という位置づけであったのだろう。

松本藩が編纂した地理書『信府統記』には、平安時代の長徳年間（九九五～九九九）に信濃国の国司・藤原惟正の建立とあるが、この人物が国司になった記録はない。

また戦国時代の兵乱で堂宇が焼失したが、焼け残った記録の中に断片的に過去の住持の名前が残っていたようだ。そこに、住持就任の年か、亡くなった年かは不明だが、延

慶元年^{（きやうげん）}（一三〇八）に貞玄^{（けんげん）}、文保元年

（一二二七）に頼賢^{（けんけん）}、元亨二年^{（げんこう）}（一二三二）

に俊慶、至徳三年（一三八六）に弘順とある。さらに観音堂に掲げられた鰐口には、

「永享三年三月大旦那讚岐守憲兼寄進」^{（さねまさのかみのかね）}と記されていたという。

別の記録では、平安時代末期の承安四年（一二七四）に乾察和尚という人物が創立したとある。観音堂の聖観世音菩薩立像の造立とほぼ同時期である。

その後、暦応元年^{（りやくおう）}（一二三八）に焼

失、宝徳元年（一四四九）に再建するも、また衰退の道をたどったという。中興は、戦国時代の永禄元年（一五五八）のこと。諏訪の仏法寺から弘誓上人が来住して再建した。その後も火災に見舞われたが、檀家や地元の人々の力により、江戸時代初期の元和九年（一六二三）に復興したとされる。いずれも後世の記録で、確かなことはわからない。

暦応・至徳の二つの年号は、南北朝時代に北朝側が使用したものだ。信濃守護の小笠原氏は北朝方に属していた。室町時代の永享三年（一四三一）に鰐口を寄進した「讃岐守憲兼」は、諱に「兼」を通字とする西牧氏の一族と思われる。彼らも小笠原氏と敵対していたとはいえ、北朝に属していたと考えられる。そして平福寺は、近隣の長尾城同様、西牧氏の勢力下にあった可能性が高い。平福寺が所在した住吉庄が、北朝の財政基盤であった長講堂領に属していた証左であろう（四七頁参照）。

真言宗寺院の平福寺は、江戸時代に松本城主の祈禱寺となった。下鳥羽の日光寺など五ヶ寺を末寺に抱え、また川西三十四ヶ所最後の観音札所として庶民からも厚い信仰を集めた。

中近世の火災や衰退、近代の廃仏毀釈などに遭いながらも復興する、多くの苦難を乗り越えてきた古刹である。

泉光寺——往時を偲ぶ石造物と仏像

市の天然記念物「南小倉の古原のカスミザクラ」の南の山中に、泉光寺跡がある。かつて堂宇があった場所も繁茂する草や木に埋もれて全貌がわからないばかりか、沢水が漬いて歩きにくい。今は掘り出された僧侶の墓などが辛うじてその位置を示している。

西山山麓にあり、「金峰山」の山号を冠していたことから、修験道に関係した寺ではなかったかとも推測されている。平福寺とともに、背後に里山を擁した寺院である。

『信府統記』には、戦国時代の天文年間（一五三二―一五五）に旧記が焼失したため、建立などはわからないが、鎌倉時代初期の文治二年（一一八六）に観音堂を再興した際の棟札が伝わっていたとある。



旧泉光寺の木造聖観世音菩薩立像
（浄心寺蔵）



ありし日の泉光寺の境内（昭和初期と思われる）

本尊として供養された聖観世音菩薩立像は、戦国時代の永祿六年（一五六四）の作である。泉光寺は、中世から観音信仰の霊場として信仰を集めた古刹であった。

また『信府統記』の記述のように、天文年間の焼失から間もない永祿のころに、新たな観音像が制作されたとすれ

ば、武田

氏か、こ

れに属し

た西牧氏

によって

再興され

たと考

えられ

る。

江戸時

代には平

福寺の末

寺とな

り、川西

三十四ヶ

所の二十

九番に数

えられ

た。明治初年の廃仏毀釈で廃寺となり、現在、聖観世音菩薩立像などの仏像は、北小倉の淨心寺の観音堂に安置されている。

往時を偲ぶものは、

やはり石造物であろ

う。南小倉地区公民館

より少し南の山麓線沿

いに、寺の大門跡と伝

わる場所があり、現

在、数基の石塔が立

つ。これも淨心寺によ

つて整備された。かつては、ここ

から西の泉光寺に向か

って参道が伸びていた

が、圃場整備に

よりその跡も消えてし

まった。

安永六年（一七七七）

に入寂した僧侶・弘

壽は三郷地域

としては早い時期に寺子屋を開き、師匠としても慕われた

という。弘壽の名が入った仁王經千部塔や光明真言碑が

大門跡に、泉光寺境内の跡には「権大僧都法印弘壽」の

墓が立てられている。泉光寺は、観音信仰に基づく祈祷の

場として人々を精神面から支え、また学びの場としての役

割も果たして、地域の人々を教導した寺院であった。



泉光寺大門跡（南小倉）

荻野堂の前身・神宮寺

及木集落の北の端、中萱との境に荻野堂（及木堂）という小堂がある。

江戸時代初期までは、ここに中萱熊野神社の神宮寺があった。松本城主・石川康長の命により城郭整備の資材徴発のため取壊されてしまったと伝えられているが、その真偽は定かではない。

観音堂はその跡地に建てられたようで、慶安五年（一六五二）の古文書に「観音堂」の記述がみえる。

神宮寺は、室町時代の応永一八年（一四一一）に、熊野から来た由良寛心という僧侶が建立したと伝わる。

熊野、特に熊野那智大社では、観音菩薩が祭神の本地仏と考えら



荻野堂（及木）



旧神宮寺の木造十一面千手観世音菩薩立像（中萱熊野神社蔵）

れていたし、那智山は観音浄土に聳える補陀落山に擬せられ、熊野信仰と観音信仰は習合して表裏一体をなしていた。だから中萱でも熊野神社に付属する神宮寺で観世音菩薩が供養されるのは自然なことである。

中世の神宮寺の存在を裏づけるかのように、熊野神社には天正元年（一五七三）の銘が入った木造鬼子母神立像と、天正一四年（一五八六）銘の木造十一面千手観世音菩薩立像が納められている。

神宮寺の後身として建てられた観音堂は荻野堂と称され、川西三十四ヶ所の十九番に数えられた。本尊として別の聖観世音菩薩立像が安置されたが、残念ながら昭和一〇年（一九三五）ころに盗難に遭ってしまい、今は拝することができない。

現在残る荻野堂や熊野神社の観音像は、中世以来の観音信仰の面影を伝える遺産と言っても良いだろう。

一日市場の集落のはじまりか？長徳寺観音堂

川西三十四ヶ所、及木の荻野堂の次に巡拝する二十番は、一日市場の長徳寺の観音堂である。現在は一日市場の南北の通りに面して建てられ、隣接する一日市場公民館や三郷神社の敷地に長徳寺があった。

長徳寺は、江戸時代末期の安政三年（一八五六）一月に起きた一日市場の大火で焼失する。安政五年には再建されたが、明治初年に本堂は取り壊され、庫裡は学校に転用された。

観音堂は当時、

長徳寺境内の南方、現在の消防団の詰所附近にあった。安政の大火も辛うじて免れたが、建物の傷みが進み、明治三十九年（二九〇六）に現在地に再建された。

長徳寺は、平安時代の長徳年間



長徳寺観音堂（一日市場）



長徳寺観音堂の木造聖観世音菩薩立像

（九九五〜九九九）に創建されたと伝えられる。この言い伝えには疑問が残るものの、長徳寺のすぐ北隣には、戦国時代の武将・二木豊後守の館があった。一日市場が二木郷から独立したのは、江戸時代の寛文三年（一六六三）のことだが、集落そのものは中世のうちから長徳寺の門前市場として発生し、発展したと考えられている。

長徳寺観音堂の本尊は、木造聖観世音菩薩立像である。古風な見た目だが、平安時代中期の様式を模して、鎌倉から南北朝時代に制作されたものとみられている。模造された経緯は不明だが、地域の歴史を伝える貴重な観音像である。

（逸見大悟）

5 海へと続く飛州新道

飛州新道は江戸時代後期の「新道」。今となっては耳慣れない道名だ。「飛州」は岐阜県飛騨地方の古い呼び名であり、安曇平では身近に感じている人は少ない。現在、安曇平から飛騨方面に向かうには乗鞍岳の北を通過する国道一五八号線を利用することが多い。上高地に向かう釜トンネルを右手に、中の湯・安房トンネル（一三三三㍔、平成九年（一九九七）開通）・平湯・高山を使うのが一般的なルートだ。安房トンネルが開通する以前はヘアピンカーブの連



飛騨街道安房峠

続する難路を使い安房峠（一七九〇㍔）を越えていたが、このルートは冬季通行止めになる。また、乗鞍岳南を通り、野麦峠（二六七二㍔）を越え、岐阜県高山市高根へ抜ける「野麦街道」もある。この道路は道マニアや峠マニアが遠路や狭路を楽しむに覚悟して通るほどの山岳道路だ。更に、乗鞍岳山頂近くの畳平（二七一六㍔）を通る乗鞍エコーライン（マイカー規制）から、岐阜県側の乗鞍スカイラインへ抜ける山岳観光道路もある。いずれにしても高山市まで一〇〇㍔以上、車で二・三時間道のりだ。

飛州新道は今から二〇〇年ほど前に「海と安曇平を結ぶ夢のスーパー輸送路」として信州・飛州両地元民



上高地から焼岳 中尾峠を望む

の夢を乗せ開削が始まった。海から遠く離れた松本藩では、塩をはじめとする海産物は生活必需品だった。松本藩からは大豆やタバコ、麻などが僅かばかり運ばれていた記録はあるが、当初飛騨地方の人々は松本藩の物資にはそれほど魅力を感じていなかったことが当時の記録から推察できる。

飛騨地方で新道開削の機運が高まったのは、松本領内で増産され続けてきた米のためだった。松本藩の領民たちは、水に乏しい原野や畑に水を送る努力を長年続け、江戸時代には大規模な横堰の開削をしてきた。承応三年（一六五四）の矢原堰に始まり、文化一三年（一八一六）の拾ヶ堰開削に至るまで新田開発が続けられてきたのである。拾ヶ堰により八〇〇町歩（約八〇〇㊧）の開田がされ、米の増産が進んだ。松本領内の新田開発により、海産物と米の交易路として飛州・信州双方の願いが一致したことで、飛州新道開削が進みはじめたのである。

開削の歴史と苦難

『信府統記』によると、元々飛騨と松本をつなぐ道は本道（野麦峠越え）と山道（安房峠越え）があった。本道は松本から木曾谷を下り、藪原・寄合渡・野麦峠を越え高山へ至る二六里半（約一四〇㊧）。山道は松本から橋場（島々）を経て梓川谷を遡上し奈川・大野川を経て安房峠

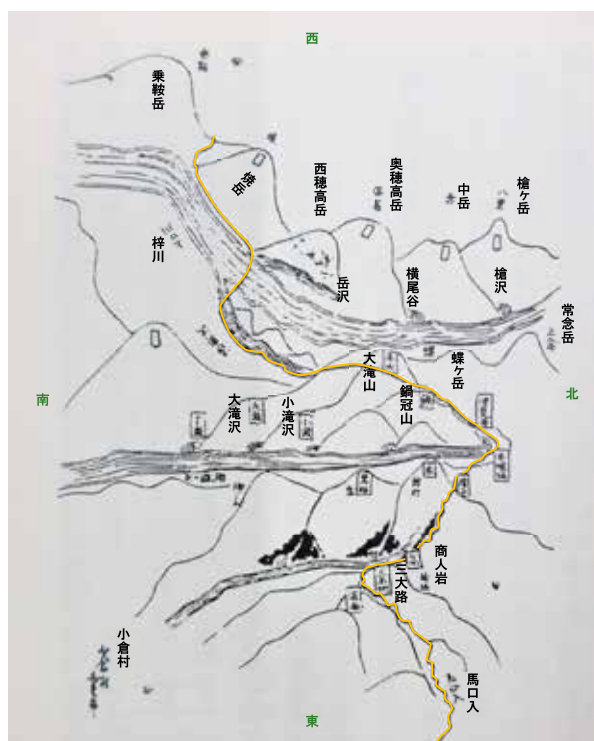
を越し高山へ至る二五里半（約一〇二㊧）。安房峠越えの山道は戦国時代、上杉謙信と戦うため、武田軍が進軍した記録も残されている。飛州新道は上記二道より更に短く、高山と松本をほぼ直線で結んでいた。

寛政二年（一七九〇）、幕府の街道政策として、行き先が同じ道を一本化し、不要となる番所を減らすことが行われた。松本―高山間の野麦街道と飛州街道もその政策の対象となった。それにより飛州街道飛騨側の平湯番所が閉鎖され、野麦街道が唯一の道となった。正月の年越し魚としての「飛騨ブリ」唯一の道として、野麦街道が「鰯街道」の名で呼ばれるのはこのためである。

上野組岩岡村庄屋の初代伴次郎（英信）^{てゐのぶ}が海へとつながる飛州新道を構想して以来、新道開削が現実味を帯びてきたのは寛政年間、二代目伴次郎（英総）^{てゐとし}の時だ。開削の動き



林道黒沢線沿いに立つ「羽子沢番所跡」の標柱



文政3年(1820)、松本藩に提出された、新道の道筋の原図とされる「又重絵図」(三郷村誌Ⅱより、加筆)

きた。松本藩への申請後、十五年の歳月を経て、多くの
人々の願いが叶った瞬間だった。

信州側の工事は又重らによって進められていたが、伴次郎と小倉村との間で、小倉村内の山道筋(羽子沢・曲沢・馬口入)に争いが起こった。伴次郎は羽子沢、小倉村は曲沢・馬口入を主張した。一旦は曲沢になったがその後争いは続き、結局「新道御用向きのこと(道の修繕など)に小倉村は関わらなくてよい」という条件で羽子沢に決定した。

天保七年(一八三六)、松本藩は上高地に番所を設置し

たが、翌年には廃止し、北黒沢支流羽子沢原に新番所を設置した。天保一二年(一八四一)島々谷から徳本峠を越え明神にいたる冬道を開削し、通年利用が可能になった。

しかし長年の苦勞の末に開かれた飛州新道であったが、その利用期間は非常に短いものであった。万延元年(一八六〇)降雨による崩落個所が多数発生。復旧の見通しが立たずに、翌年廃止に至ったのである。

廃止されてからは、飛州新道は再開されることなく現在に至っている。短距離ではあるが、利用者が少なかったことや天候に大きく左右されることなどが要因であろう。それでも上高地から安曇平を直接つなぐというこのルートは、その後も何度も形を変えて検討されることとなる。

現在でも北アルプスを越える山岳道路は、度々災害にあったり、積雪により冬期間の通行ができなかったりという道である。季節や天候に左右される「山越え」はどの道を通っても同じ苦勞に耐えない。「海と安曇平を結ぶ夢のスーパー輸送路」飛州新道は熱意によって築かれた道であった。

松本糸魚川連絡道路、糸魚川街道の改良、中部縦貫道の整備等、内陸安曇野市と海をつなぐ夢の道は現在でもその歩みを留めない。環境に優しく地球と共に生きる「海と山をつなぐ道」は今も私たちの課題だ。

(千村裕一)

6 槍ヶ岳開山 播隆上人



播隆上人像 JR 松本駅前広場

小倉から「槍ヶ岳」を開山した播隆上人

富山県に生まれ各地で修行を積み重ねた僧播隆ばんりゅうはなぜ小倉から槍ヶ岳を目指したか。不思議な話ではある。現在の登山道は燕岳、大天井岳、東鎌尾根、槍ヶ岳を目指すか、上高地、槍沢、槍ヶ岳が一般的な登山道とされている。播隆はより高い場所に身を置き阿弥陀如来を拜することにより仏に近づこうとした修行僧だ。「開山」とは、山頂に拜む仏を安置することと考えればどうだろう。播隆がこの松本平に至るまでの記録を辿ってみたい。

播隆が生まれたのは天明六年（一七八六）、天明の飢饉（一七八二～一七八八）に見舞われ、日本中が飢えと貧しさと闘っている最中のことである。越中上新川郡河内村（現富山県上新川郡大山町河内）で代々浄土真宗の道場を勤める中村順信の二男一女の次男であった。そこは山深い山村の集落で、現在は廃村になっている。

幼少期には炭焼きの手伝いに行き、灰を広げて字の練習をしていたり、川遊びに行くと砂に字を書いていたり、また暇さえあれば本を読んでいたりと学問が好きな少年だった。

た逸話が残っている。小さいころから出家して学問をしたという願いを持ち、父に願ひ出ていたが、なかなか許しもらえず、修行に出たのは一〇代後半になってからだ。天明の飢饉や寛政の改革など、天災や情勢不安の中でわが子を旅に出すのは忍びなかったのではないだろうか。

文化元年（一八〇四）名古屋の浄土宗尋盛寺性譽上人に弟子入り。同年、大阪の宝泉寺、見仏上人のもとにあり出家し、仏号を「仏岩」と称した。その後江戸に赴き、文化十一年（一八一四）本所靈山寺で正式に浄土宗の僧侶となった。文政元年（一八一八）には京都一念寺にあつて修行をしたが、弟子たちの争いや宗派間の争いに嫌気がさし、人里離れた南宮山（岐阜県大垣市）山中にこもり、念仏一筋に生きる強い覚悟を持った。

播隆は山中の修行を終え、山を下りてからも掛斐の城跡に小さな庵を建て修行を続けた。播隆を崇敬していた大垣藩家老柴山長兵衛は、小さなみすばらしい庵では申し訳ないと播隆のために本堂を建てて贈った。この「城台山播隆院阿弥陀堂」は播隆が開いた生涯唯一の寺となった。

その後、修行の旅で訪れた飛騨高原郷（岐阜県上宝村）から観る「笠ヶ岳」の端正な姿に魅かれ、当地の本覚寺の椿宗和尚を訪ねた。播隆は笠ヶ岳で修行することで阿弥陀仏に近づきたいと願った。播隆が杓子の岩屋（高山市上宝町岩井戸）で修行をはじめると宗派にとらわれず多くの

人々が集まり、念仏修行が繰り返された。目指す笠ヶ岳は天和三年（一六八三）さすらいの僧円空により開山され、その後天明二年（一七八二）高山宗猷寺南裔が登拝した記録が残されていた。しかし播隆が登拝に挑んだ文政六年（二八二三）には道は荒れ果てており、やっとの思いで山頂にたどり着くことができたという。

播隆は下山直後、村役や信者に相談し、多くの信者が登拝できるように登山道を整備した。登山道に道標を置いたり崩れを止めたりして安全に登拝することができるようにしたのである。さらに文政七年（一八二四）には六名もの同行者と共に登山道に一里塚を設置し、山頂には銅の阿弥陀仏を安置した。

このとき播隆が笠ヶ岳から見た槍ヶ岳は、仏様の世界に通じる天空に突き刺さる俊峰だった。槍ヶ岳から仏の世界



播隆が登拝した笠ヶ岳参詣登山道に安置した一里塚（横平）。高山市（旧上宝村）指定文化財

に近づきたいと願った播隆は「槍ヶ岳開山」の強い願いにかられたと伝えられている。

槍ヶ岳へ

播隆が「槍ヶ岳開山」を目指し松本玄向寺立禅和尚りゅうぜんを訪ねたのは文政九年（一八二六）のことであった。笠ヶ岳再興で力となり協力した飛州本覚寺椿宗和尚は、時同じくして開削が進んでいた「飛州新道」の関係で知り合った信州の山男、長尾組小倉村の村役人「鷹打ち」中田又重が適任であると考え紹介を依頼する手紙を持たせていた。立禅の仲立ちで小倉村又重を訪ねると、又重は播隆の願いを快く聞き入れ、槍ヶ岳開山の準備が始まった。

小倉から槍ヶ岳を目指す播隆と又重らは「さんでし」から「商人岩」まで上り詰め、「なめしあたま」を越え、冷沢に至り、さらに鍋冠からなだらかな八丁だるみを進み大滝山（手水岳）を目指した。飛州新道（文政七年に小倉・上高地間開通）は大滝山を経て徳沢を下るが、播隆は大滝山頂を左に見て蝶ヶ岳へと向かう。蝶ヶ岳をやや北進し、熊倉沢を下り、梓川と出会う。槍見河原を通り、一ノ俣、二ノ俣と沢を渡り、ようやく槍沢にたどり着くことができた。整備された飛州新道とは違い、わずかにある仙道・獺師道を遡っての登山であった。

岩陰に一泊し、早朝に出かけたが、藪をかきわけ遅々として進まない。赤沢山を過ぎ大曲を通り過ぎると氷食谷の気配が漂う。樹木は低く、遠くに槍ヶ岳を見通すことができた。この年は雪が多く、雪渓が例年より多く残っていた。槍沢に残った雪渓を登り、岩小屋へ着くことができた。

翌日、ついに槍の肩へたどり着く。北には槍の穂、南には穂高連峰、西には笠ヶ岳、東には常念山脈を見渡すことができた。播隆は岩にへばりつき登攀を試みたがとても登りきることができない。やむなく一度退却し、前日宿泊した岩屋へ戻った。その後も天候に恵まれずなかなか登るチャンスがない。好天を待ったが風雨は収まらず、結局この時は断念せざるを得なかった。

再挑戦の準備が整ったのは文政十一年（一八二八）七月（新暦では八月末）のこと。信者に資金や労力の援助をし



槍ヶ岳周辺図（「善の綱」より）

てもらい、改めて「開山」に挑むこととなった。鎖のない穂先への登攀は想像を絶する大変さがある。それでも播隆たちはやっとの思いで頂上に登り詰めることに成功した。この時をもって、槍ヶ岳が開山されたと記すことができるだろう。

その後も信者を安全に槍ヶ岳の山頂へといざなう努力がなされ、四回目の登拝時（天保五年（一八三四）六月）には長さ七〇間の綱が設置された。更に播隆は安全強固な鉄の鎖への架け替えのため淨財（資金）集めに奔走し続けた。ところが鉄鎖の淨財集めの最中の天保七年（一八三六）、

「大雨続きで凶作になったのは播隆が槍ヶ岳を開山したせいだ」という流言が交わされ、苦勞して鑄造した鉄鎖が松本藩に差し押さえられてしまった。

四年後、天保十一年（一八四〇）七月に誤解は解け再び許可が下される。鉄鎖を槍の穂に取り付けるため、小倉村の中田又重のもとには松本、安曇のみならず、美濃、尾張、三河、飛騨からも多くの信者が駆けつけた。そして山道を背負って運ばれた六本の鎖、三二間（約五八メートル）が設置され、ついに天界と地上が結ばれたのである。

槍ヶ岳開山を目指した偵察登山の時から鉄鎖の「善の綱」が架けられるまでの一五年間、播隆は人々を霊峰槍ヶ岳に導く努力を続けた。播隆の大願が実ったのは五五歳の時、自らを追い込む厳しい修行のため体調を崩し、玄向寺

において療養の最中だった。そして播隆は、「善の綱」が架けられた三ヶ月後、いとまをもらい掛斐への帰路において、美濃太田の林市左衛門宅で大往生を遂げた。天保十一年一月二一日明け方のことであった。

播隆の生き様は、志を貫く真の強さ、人を動かす誠実さそのものだ。安曇・松本では、二〇〇年前、長尾組の小倉村中田又重はじめ多くの人々が感化され生き方の指針としたように、現在の私たちにも播隆の「志を貫く」教えが息づいているように感じる。

（千村裕一）



雪の中にそびえる槍ヶ岳の山頂（4月中旬）

領民の生きる権利を求めてたたかった人たち

江戸時代、松本藩では石川、小笠原、戸田、松平、堀田と藩主（大名）が数年間ごとにめまぐるしく入れ替わった。六番目の水野氏（家康の母、於大の生家）は寛永一九年（一六四二）から享保一〇年（一七二五）までの八三年間と長期藩政が続いた。この水野時代の貞享三年（一六八六）、松本藩の増税から領民（百姓）の命と生活を守ろうと中萱村の多田加助を中心とする庄屋たちが立ち上がり、藩全域に広がる百姓一揆（貞享騒動）が起こった。



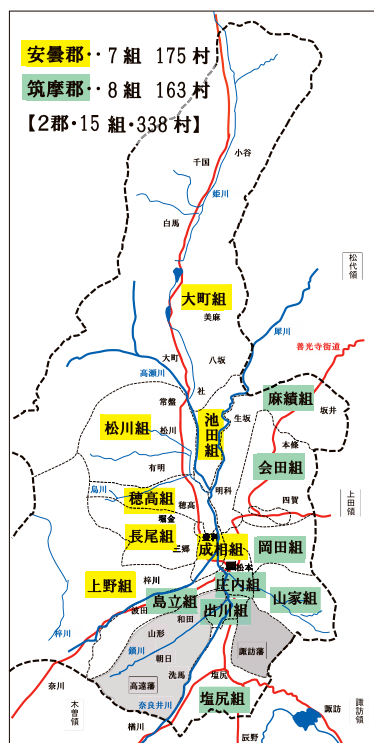
玄向寺（水野氏の菩提寺）

一六〇〇年代は幕府が全国的に新田開発を奨励し、耕地面積が約二倍になり、米の生産量も大幅に増加した。当時の長尾組（三郷・堀金）では、慶安四年（一六五一）野沢村が長尾村より、寛文三年（一六六三）一日市場村と七日市場村が二木村から分村。

慶安元年（一六四八）小田多井新田村が開発され、貞享四年（一六八七）中堀新田村の開拓入植が始まる等村や人口が増えていった。

また、慶安二年（一六四九）から領内すべての土地の検地（慶安検地）を行い、新たに開墾された耕地の所有者を確定させ、年貢の責務を負わせた。この検地により米の取れ高（石高）は七万石から十一万石へと大幅に増加した。

しかし、この検地では厳密な測量や従来の土地等級の引き上げなどが行われたことで、百姓（農民）にとっては増税となった。百姓の中には生活が成り立たなくなる者が続出。再検地を求める村々が領内で五七ヶ村に及んだ。二木村でも同様で、村を逃げ出して行方をくらます者や絶えた

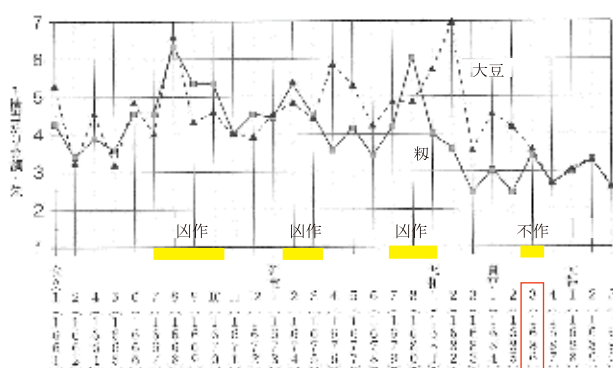


松本藩の行政区割り

家が多く出た。藩は再検地を余儀なくされ、田の畑地への転換と田畑の等級下げが図られた。

水野時代の財政難

石高増加の一方で、二代忠職ただもとから三代忠直ただなおの頃にかけて藩の財政は悪化していった。その原因は、幕府命令による三回もの大坂城代、高田藩改易による城地の管理などの勤めと出費、参勤交代と江戸屋敷経営費の増大、六、七年ごとの凶作と飢饉による減税と減収、天和三年（一六八三）



凶作と米・大豆値段（『貞享騒動をたずねて』より、一部加筆）

からの米値段の安値による減収などであった。これは年貢米を換金して政務や生活にあてる藩や武士たちにとっては大打撃であった。そのため藩は財政回復のために増税の必要に迫られ、その

矛先は人口の八割を占める百姓の年貢に向けられた。そもそも百姓の年貢は、収穫米の五割を藩に

10 斗	= 1 石
10 升	= 1 斗
10 合	= 1 升

納め、残り五割を百姓のものとする税率（五公五民）だった。年貢を納める時は、一俵には玄米にして二斗五升になるように粃のまま入れた（「二斗五升挽き」という）。しかし、堀田時代になると、俵数は変えずに、一俵の粃の量が三斗の玄米になるようにと増税され（三斗挽き）、水野氏に引き継がれた。百姓にとっては六割の年貢になり、幕府基準や他藩より高い税率となっていた。

厳しい年貢の取り立て

二代忠職は、凶作が続く困窮する百姓の生活を守るため、家来に年貢の収納は「百姓が苦しまないように申しつける」と百姓の救いを命じ、米などを援助（お救い米）した。

しかし、三代忠直の頃、延宝二年（一六七四）～三年の大凶作では、約八万人の百姓や町人が飢えに苦しみ、お救い米が行われたがそれでもなお四〇〇〇人以上が餓死・病死するという大惨事が起きた。

にもかかわらず忠直は年貢を確実に得るために、飢饉の度に芒取り（次貢）命令を出した。長尾組ではその度に廃止の訴えを行い免除されたが、延宝二年には加助を含む四人の庄屋が蔵込くらこめの刑になった。

さらに藩は、天和元年（一六八一）には前年の年貢未納



天保期の溢（貞享義民記念館蔵）

※芒とは、当時栽培されていた「溢」と呼ばれる赤米品種の籾についている長い針状の毛。

藩は籾を俵に多く入れさせようと、こき箸で脱穀後、芒を一本一本取るように命じた。百姓には手間ひまのかかる余計な重労働で、度々藩とトラブルになった。

の返済が遅れたとして加助の女房を人質にし、下堀金村の庄屋・組頭を蔵込にした。また、検見（役人による米の実り具合の視察）に遅れた小倉村の庄屋を蔵込にした。加えて同年、中萱村庄屋の加助と楡村庄屋の善兵衛を罷免した。

このように松本藩では、年貢税率が他藩より高いうえ、飢饉の時は百姓を救う手だてを施すものの、厳しい年貢の取り立てを実施し、それにはむかう者は女であっても処罰したり、庄屋を罷免したりしたのである。身分制度の元、武士らには百姓の命に対する意識がとても希薄だったことがうかがえる。

中世土豪の系譜を継ぐ庄屋多田家

貞享騒動の中心人物、多田加助は、祖父の代から中萱村の庄屋（肝煎）を務め、自らも寛文四年（一六六四）、二



多田加助宅跡付近の絵地図。『貞享騒動をたずねて』より

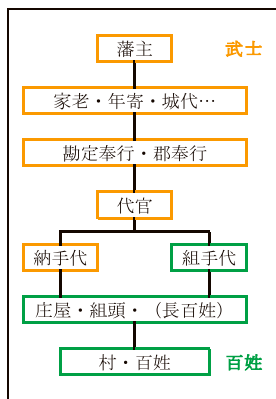
六歳で家督を相続し三代目の庄屋となった人物である。

加助の祖先は「天正一〇年（一五八二）、中萱の郷に移り土

着する」といわれているが定かではない。しかし、現在でも残る多田家屋敷には幅六呎ほどの堀と土居の一部が残る。江戸末期の絵地図にも描かれていることから、中世の土豪または地侍の系譜を引く有力農民であったと考えられる。江戸時代はじめの庄屋にはこのような流れをくむ者が多かったのではないかと考えられている。

庄屋は藩からの命令書や回覧文書類を帳面に書き写したうえで、原文を隣村へ回すという役目があった。また、年貢や諸役を村単位で庄屋が責任をもって納める（村請制度）ため、読み書き算盤（そろばん）の能力が必要であった。

加助は長尾組の代表として年貢金の払込み



水野時代の村支配のしくみ

や人足役の引率、検見時の藩役人の宿泊の世話、組手代（後の大庄屋）の代役などを行い、組の代表格として活躍していたことがうかがえる。

ところが凶作が続くなかで年貢を出せない村人の年貢の代納（藩から命令）や借金 of 肩代わり等をしたことにより、土地持ちの大百姓だったのが、「礼服の羽織を質入れる」ほどに借金で困窮していったようである。また、妻や同組の庄屋・組頭への処罰、加助自身の庄屋罷免などもあり、加助は藩への不満をつのらせていった。

貞享騒動起こる

加助が庄屋を罷免されてから五年後の貞享三年、この年も不作で、藩主忠直は参勤交代で江戸在勤であった。

九月末、この年の年貢を納めるための^{もみこしら}え（俵に年貢^{おさめてだい}を測って入れる作業）が村ごとが始まると、監視役の納手代（藩の年貢担当の下役人）から新たな命令が出された。

- ・ 粃^{のぎ}の芒を取ることに。
- ・ 例年の粃一俵玄米にして三斗挽きから三斗四・五升挽きになるようにすること。

という厳しい増税（増徴）命令だった。

中萱村の^{もみこしら}えの日、加助がその理由をただしたところ、納手代らが怒って杖で打ちかかり、刀を抜こうとした。これを見ていた村人たちと激しい争いとなり、納手代らは藩に報告するべく松本へ帰った。

最悪の事態となった加助は、榆村の元庄屋善兵衛ら同志の者たち十数人と中萱村の熊野神社で相談して一味同心（※）を決意し、お城に訴え出ることを決めた。そして、「五ヶ条の訴状」と車回状がつくられ、車回状は村々に回され、次のように動員をかけた。

※一揆の作法として、神前で団結を誓い合う儀式が多く行われたが、この騒動では史料は残っていない。

車回状の内容

近年このかた納^{おさめ}粃はとても厳しく、今年は特に厳しい。喰い物は乏しく生活は困窮し、命も危ない。それだから松本城へ惣（本）百姓らで訴え出る。もし御取り上げなければ、直ちに江戸表へ訴え出よう。

ついては皆々、握り飯を多くこしらえ、簀^み薦で身を包み、銘々^{えいもの}得物（鍬・鎌・棒など）を杖に、一〇月一四日早朝、松本へ男役にて出るように。もし出ない村には火をつけるぞ。

男役…一五歳以上六〇歳以下の男子

一〇月一四日夜明け、呼びかけに応じた一揆勢は簀薦で身を包むと松本城下四方の口々から入り込んだ。集まった百姓たちは西口は新橋の北まで、南口は出川の大橋まで、

やまべ
山家口は惣社の宮まで、北は刈谷原峠までと延々続いたという。城下だけでなく、周辺や勢高宮、筑摩川原（薄川）・女鳥羽川原などにも大勢が集まり、その数は数千から一万人にも及んだ。

加助ら首謀者（頭取）たちは上土の縄手通りに集結。多



五ヶ条の訴状（御訴訟口上之覚）

五ヶ条の内容

- ① 初（はつ）の芒踏み磨（めい）きは迷惑（めいわく）。
- ② 初一俵玄米にして三斗挽きから三斗四・五升挽きになるようにするのは迷惑。高遠・諏訪領並みの二斗五升挽きにしてもらいたい。
- ③ 大豆で納める金納分の値段は初値段並みにしてもらいたい。
- ④ 江戸廻米に損耗分一升の加算や、販売米の領外金沢（茅野市）・浦野宿（上田市）までの駄賃負担は迷惑。
- ⑤ 小人（奉公人）給金の余内金（村負担）は迷惑。

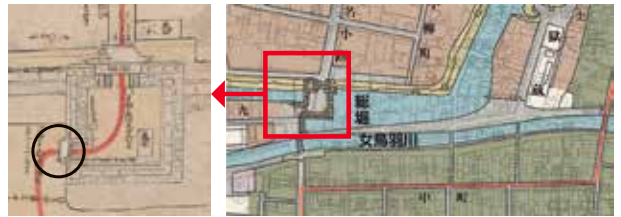


車回状（天保7年凶作時の米むしんの落し文写（丸山家文書、松本文書館蔵））

くの百姓に向かつて、「御門や木戸の番所へは手出しはならない」と厳しく暴力行為を規制した。そして、首謀者たちは大手門の張番所（薬医門



大手門（薬医門）上堀南原青柳家



大手門（○は薬医門）と縄手周辺

前）に郡奉行宛の「五ヶ条の訴状」を提出した。その主な内容は、芒取り（芒踏み磨き）の撤回や、三斗四・五升挽きの増税撤回と隣藩並みの二斗五升挽きにしてほしい、など五項目を求めたものだった。また、当時は古法を遵守する考え方から、新たな増税は新法であり、不当であるとしてその撤回を願うものもあった。しかし、解決が長引くにつれ、米屋や庄屋数軒の打ちこわしにかかる者も出てきた。

一六日、藩から回答書が示された。

増税は納手代らが勝手にしたもので、年寄（家老）役・殿様も知らなかった。

年貢は今まで通り玄米にして三斗になるように粃を俵に詰めることとし、粃（の芒）踏み磨きは無用とする。

郡奉行

訴訟内容の大半が認められたことで多くの百姓たちは納得し帰村した。

しかし、加助ら首謀者たちは「二斗五升挽きは認められていない。最高責任者の家老によって出されたものではない」として、一揆勢一四〇〇〜一五〇〇人程と共に馬町（馬喰町・博労町）に居残り、再び動員の呼びかけを始めた。一八日になると「江戸への直訴だ」と主張。その時、遅れた麻績・会田組の四〇五〇〇人が合流した。

この様子を見て、夕刻、藩は二度目の回答書を示した。

諏訪・高遠藩並みの一俵玄米にして二斗五升挽きを認める。

首謀者ら一揆勢はこれに納得してすべて帰村した。

ところが二〇日、藩役所にお礼に来た組手代や庄屋たちにむかって代官は、「二斗五升挽きの証文（回答書）は後に居残ったものに与えられたもの、持っている罪人になるぞ」と、圧力をかけ、組々から証文を取り上げ、そのうえ新たに「三斗挽き願い」の証文を提出させたのである。

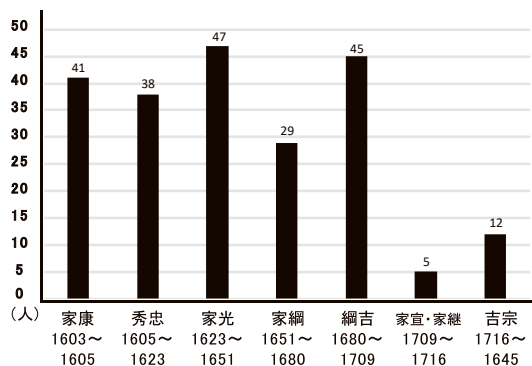
なぜ藩は二斗五升を認めると偽ってまで一揆を鎮めよ

うとしたのか。それは領内での一揆の発生は「統治の失敗」として幕府から責任を追及される恐れがあったためである。一揆が大規模化・長期化すると、最悪の場合、藩主は改易（大名を剥奪、城と領地を没収。家臣たちは浪人となる）にされた。このため藩は一揆を武力を使わず穏便に解散させる必要があった。特に五代將軍綱吉の時代は徳川一門・譜代大名の改易が多かった。

一方藩では、一八日に首謀者らが帰った後、直ちに江戸藩邸へ報告するため家老が松本を発った。

そして「前々より三斗挽きで納めてきたところ、二斗五升挽きにしてくれと強く願い上げ、大勢の百姓らが集まること仕方なく留守居の者どもが願い通り認めてしまった」などと百姓の訴えとその対応を藩主忠直に報告。忠直は直ちに幕府老中に報告した。

老中は「鎮めの致し方、もつともなことである。：訴訟に出ない者どもには褒美賜ることしかるべし、訴訟のうち頭領たる者については、仕



幕府による大名改易の数

置きしかるべし」と騒動の鎮め方を了解。直ちに忠直は書状で、松本留守居役らにその指示を命じた。

江戸からの報告を受けた藩は、二月三日、三斗挽き収納を開始するとともに、組手代に働きかけて、村々の騒動参加者を報告させると、一月一五日夜半から首謀者をはじめ四

○人近くの者を逮捕し、取り調べを行ったのである。

そして、一月二三日、加助たち首謀者一人と、その弟・男子ども一七人、合わせて二八人が処刑された。中心となった八名は磔に、他のは獄門に処されるという、重い処罰であった。安曇郡の者は勢高刑場で、筑摩郡の者は出川刑場で処刑され、また七人が追放刑となった。

処刑された首謀者は田畑・家財の没収と跡目相



出川の刑場跡



勢高の刑場の隣にある「義民塚」。
刑場跡は現在学校の敷地になっている

処刑された人々

郡	組	村	家名	磔	獄 門	合計
安曇郡 勢高刑場	長尾組	中萱村（三郷）	多田	加助	子 伝八 子 三蔵	4
		榎 村（三郷）	小穴	善兵衛	弟 彦之丞 子 しゅん(志ゆん・春吉) 子 惣助 子 長之助	6
	上野組	南大妻村(梓川)	小松	作兵衛	弟 松右衛門 弟 治兵衛	2
		氷室村（梓川）	川上	半之助	子 兼松 子 彦(彦松) 子 権之助	4
	(出川組)	笹部村（松本）	赤羽		弟 左五兵衛 弟 金兵衛	1
					(川上の弟、赤羽へ養子)	
筑摩郡 出川刑場	島立組	堀米村（松本）	丸山	吉兵衛	子 権太郎 子 与作	3
			堀米		弥三郎	1
	出川組	梶海渡村(松本)	塩原	惣左衛門	子 三之丞	2
	岡田組	浅間村（松本）	三浦	善七		1
		岡田村（松本）	橋爪	善七(嘉助)	弟 勘太郎	2
	会田組	秩多光村(四賀)	望月	与兵衛	子 藤兵衛	2
合計	6組	10ヵ村	11家	8人	20人	28人

『三郷村誌Ⅱ 第二巻歴史編上』を元に加筆修正

追放者

郡	組	村	氏名
安曇郡	穂高組	矢原村(穂高)	浅井弥助
	上野組	杓 村（梓川）	金井勘右衛門
	長尾組	下堀金村(堀金)	平林金助
	松川組	耳塚村(穂高)	草間三郎治
筑摩郡	岡田組	岡田村（松本市）	橋爪甚左衛門
	島立組	大庭村（松本市）	西方定兵衛
	出川組	水代村（松本市）	水代半之助

『松本市史 第二巻』より

続禁止。残された身体は試し切りにされた。当時の嚴罰は今では想像もつかない附加刑が科せられていたのである。なお処刑から一ヶ月半後の翌年一月、榎村善兵衛の女房が男子を出産。郡奉行に報告され、助命嘆願が為されたが、二週間後病気で亡くなった。生きていれば二九人目の処刑

者になるところだった。

処刑の翌日（二三日）、藩からすべての村々に通達があり、そこには罪状が書かれていた。

- ・身分を越えた訴え（越訴^{おっそ}）
- ・御法度の一味一同（徒党を組む・強訴^{ごうそ}）
- ・村々に付け火を触れ回る（おどし）
- ・城下町屋への狼藉^{ろうぜき}・盗み（打ちこわし）
- などの重罪、頭領の者のみ仕置き申しつけた。

その他の動員された百姓たちは無罪となった。

実際藩の意図は、首謀者（頭領）の処罰だけではなく、前記したように弟や男子どもにまで及ぶ処刑による一揆再発予防の「見せしめ」にあつたものと思われる。この残酷な処刑は、藩中の領民の心に深く刻まれていった。

騒動のあとの変化

この騒動のあと、藩によって参加者調べが実施された。それによると、金納（税金）のため参加しなかった村を除くと米年貢の村の八八割が騒動に参加していたことが判明している。これを契機として、松本領内の百姓や村々は団結するようになった。

一方で藩の百姓に対する姿勢も、

貞享騒動の参加村・不参加村集計

	組名	村数	不参加 村数	参加 村数	参加率 %	金納村	金納村を除く 参加率 %
筑摩郡	庄内組	15	2	13	87	1	93
	岡田組	13	0	13	100	0	100
	山家組	17	1	16	94	1	100
	出川組	13	0	13	100	0	100
	島立組	19	0	19	100	0	100
	塩尻組	28	6	22	79	6	100
	会田組	35	15	20	57	1	59
	麻績組	23	10	13	57	7	81
安曇郡	上野組	22	4	18	82	4	100
	長尾組	16	3	13	81	0	81
	成相組	24	7	17	71	0	71
	穂高組	14	1	13	93	0	93
	松川組	16	2	14	88	0	88
	池田組	29	9	20	69	9	100
	大町組	54	54	0	0	54	—
両郡	合計	338	114	224	66	83	88

『三郷村誌Ⅱ 第2巻 歴史編上』

- ・処刑者の後家の跡目相続を認め、田畑の没収中止。（附加刑免除）
- ・年貢未納の延長の緩和、労役の軽減、無利息で種籾借用、幕末まで年貢は三斗挽きを継続
- ・横井浅之助（元長尾・上野組代官）の減刑を同組百姓らが嘆願し認められる
- ・飢饉の穀物支援（幕末まで死者は出ない）
- などのように軟化していった。

この一揆は藩の今までの強行的な政治から、百姓がちゃんと生活できるような政治への移行や、村の自治を認めていく方向に変わっていく契機となったと言えるだろう。
（寺島俊郎）

2 貞享騒動にまつわる供養と伝承

加助たち犠牲者への供養と感謝の思い

貞享騒動の首謀者たちは極刑である磔刑^{たづけ}となり、後継ぎとなるすべての弟や男子どもまでが獄門に処せられた。藩にとつては重罪人であるため、財産没収のうえ、葬式や墓をつくることも許されず刑場に葬られた。

言い伝えでは処刑後、加助の親戚の島田家と野本家が加助と弟の彦之丞、加助の子どもの伝八、三蔵の四名の首を貰い受けて島田・野本家の砂原墓地に埋めた。そこに目印として柏樹(びやくしん)を植えたと伝えられ「首塚」と呼ばれている(現在は白木が立てられている)。実際に首謀者らの墓が建てられ、供養が行われるようになったのは、松本藩主が水野家から戸田家に替わってからである。



首塚



奉読誦大乘妙典二千部

貞享騒動犠牲者の50年忌供養塔
(楡、精進場墓地)

戸田家は貞享騒動について黙認したのか、記録には五〇年忌の供養が長尾・上野両組(三郷・堀金・梓川)の人々によつて行われ、供養塔が楡村に建立されたことが記されている。この供養塔は、平成一二年(二〇〇〇)に楡の共同の精進場墓地^{しょうじば}から発見された。建立は寛保元年(一七四一)となっており、五〇年忌の享保二〇年(一七三五)から大乘妙典(法華経)二〇〇〇部の読誦^{どくじゆ}に七年間も費やしたことになる。また、多田家ではこの機会に加助を多田家の斎神として祀る祠を屋敷の南東隅に建てたと伝えられ

ている（祠は七八頁の絵地図に描かれている）。

松本市堀米では首謀者の一人、堀米弥三郎の一〇〇年忌の供養墓碑が建てられた。天保六年（一八三五）には処刑者全員の一五〇年忌の追善供養を実施した記録が三郷に残っている。時期は不明であるが、この戸田時代に処刑者たちの墓も各家で建立されていたようである。

五〇・一〇〇・一五〇年忌が組を超えた広域の人々や各家によって営まれたことは、長い年月にわたって人々の一揆の犠牲者への供養と感謝の思いが根強く受け継がれていた証拠である。

騒動に参加しなかった松本市里山^{おおつき}辺大嵩崎では、江戸時代^{おつ}の頃の頃から参加しなかったことを悔いて、加助の絵姿の掛け軸をつくり、当屋では掛け軸を掲げ、朝晩膳を供えて念仏と鉦を打ち鳴らす供養が行われてきた。現在は、命日翌日の十一月二三日（祝日）に、林町会と一緒に林地区の公民館で廣澤寺の住職によって法要が執り行われている。絵姿は阿弥陀如来を模し、着物には南無阿弥陀仏



多田加助の墓

の名号がデザインされている。



松本市里山辺に伝わる「加助様絵姿」
（複製、貞享義民記念館蔵）

多田加助の崇り^{たた}

貞享騒動後、水野家では五代藩主が早逝し、さらに六代忠恒は江戸城内において刃傷沙汰に及び改易されるという大事件をおこし、川越藩にお預けとなった。水野家ではこれを加助の祟りであるとし、加助の木像座像をつくらせ邸内で供養するようになった。

水野家は忠恒の叔父が家名を継ぎ、その子が四〇数年後駿河沼津藩の大名として復活する。この加助座像は水野家に祀られていたが、明治三一年（一八九八）に加助神社に寄贈された。



水野家から寄贈された多田加助座像
(複製、貞享義民記念館蔵)

加助たちの「義民化」の背景

江戸時代前期の慶安四年（一六五二）、下総（千葉）佐倉の庄屋惣五郎が年貢の増徴撤回を求め江戸幕府に直訴し処刑された。一七〇〇年代末になると、この佐倉惣五郎一揆が物語として脚色され書物になって各地に広がっていった。

また文政八年（一八二五）、松本藩では二度目の大規模な百姓一揆（赤蓑騒動^{あかみのうどう}）が白馬から起こった。不作で米や主要な作物の麻が収穫できなかった百姓たちは、庄屋から米を分けてもらおうとするが拒否される。怒った百姓たち

は裕福な庄屋をはじめ大庄屋・酒造家・問屋・商店などを次々と襲撃しはじめたのである。この騒動は白馬から大町・池田・穂高・成相と約九〇軒を激しく打ちこわし、最後は松本藩の軍勢に鎮圧された。

これらの出来事が背景となって、貞享騒動の物語化がされるようになってゆく。

一八五〇年代になると「水野騒動記」「貞享騒動記全」「中萱村嘉助由来」などの、貞享騒動をテーマにした作品が続けて書かれた。その内容は皆同じで、騒動の始まりを赤蓑騒動の大町組佐野村（現白馬村）とし、加助は登場しないが内容はより激しくなり、訴訟の首謀者と一揆勢が松本城に訴えに行く物語となっていて、貞享騒動と赤蓑騒動の内容が混在して描かれている。当時は一六〇年前の貞享騒動の時とは異なり、貧しい百姓と庄屋（村役人）の間には大きな亀裂があった。ゆえに加助のように命をかけて村人を守ろうとする庄屋（指導者）が切望されたのだろう。

また同じ頃、江戸では前述の佐倉惣五郎一揆が歌舞伎『東山桜莊子』（「佐倉義民伝」）として江戸中村座で上演された。藩主の圧政に苦しむ人々のために命をかけて直訴した姿は、「義民」と呼ばれて好評を博し、講談や地芝居、書物にもなって地方に広がっていった。そして、この演目は明治二〇年代から大正にかけて人気のピークを迎える。戦後も折に触れて上演され、平成三二年（二〇一〇）には

平成中村座がまつもと大歌舞伎の二回目で上演している。この江戸末期から明治にかけての『佐倉義民伝』ブームにより、全国各地で一揆や義民伝承の掘り起こしが行われていった。そして貞享騒動と多田加助もまた、この流れの中で脚光を浴びることになる。

明治、松本で花咲く義民の物語

前記したように松本・安曇地域では、貞享騒動のあと、定期的に犠牲者の供養が行われ、幕末頃には百姓たちが指導者を望む気運が高まっていた。そして佐倉義民伝ブームに触発され、明治になると立て続けに貞享騒動の物語本が発表されるようになる。

明治一年（一八七八）には竹内泰信による「中萱嘉助略伝」が松本新聞に連載され、のちに『美簫苅信濃美談』として単行本が出版された。

また、翌一二年には自由民権運動の運動家松澤求策が『民権鑑みんけんかんがみ嘉助の面影』の戯曲を書き、演劇にすることで民権思想を広めていった。自由民権運動の広がりの中で、村人や百姓のために訴え出る加助ら指導者の姿は、地元から選出され国会で政治を行う代表者の姿と同一視され、百姓一揆こそが民権運動の源流であるとされた。この戯曲は松本常磐座を皮切りに塩尻や穂高などでも上演された。さら

に明治一三年（一八八〇）には、全国二府二七県の代表が集結し国会開設を目指して開かれた「愛国社」の大阪大会でも上演された。

これらの中で貞享騒動は、佐倉惣五郎伝から評判の場面を引用し脚色され、新たにいくつもの伝承が生まれた。例えば、惣五郎伝の「甚兵衛渡し場」からは「犀川の熊倉の渡し場で、役人から船を出すように命令された船頭が加助の姿を見ると船を出すのを拒んで逃げた」という『熊倉の渡し場』の話。また、「子別れの場」からは「連行される加助の後を慕って追いつがってきた妻が、代官の命令で同行を止められ涙にくれて見送った」という『平瀬泣き坂の別れ石』『加助夫婦惜別の岩』（様々な名前と呼ばれている）の話。さらには、上州（群馬）の『礫はりつけもざえもん茂左衛門伝承』を元に、「松本藩士の鈴木伊織が加助たちの助命に奔走し、水野忠直から赦免状をもらって江戸から駆け付けるが、処刑の時刻に間に合わず助命がかなわなかった話」等も作られている。

このような時世の中で訪れた明治一三年の二〇〇回忌に



熊倉の渡し場

おいては、加助を祀っていた祠を多田家屋敷東隣に移し、規模を拡張して加助たち首謀者一一柱を合祀して貞享義民社（加助神社）が造営された。さらに明治三二年（一八九八）の社殿の再建に際しては、前述の多田加助座像に加え



貞享義民社

て水野家から祭祀料が寄進され、水野忠直公も合祀された。大正五年（一九一六）になると、なからいとうすい半井桃水による「義民加（嘉）助」が東京朝日新聞に連載された。この中で創作された「加助が処刑される際に松本城を睨みつけ、悲願であった『二斗五升』を絶叫したところ、大地が震え城の天守が西に傾いた」という話は、今でも有名な物語として伝えられている。

昭和三年（一九二八）には、脚本『信州義民録』が歌舞伎として東京歌舞伎座で六代尾上菊五郎の主演により上演された。翌四年には信濃民報社長三澤禎一郎が自費を投じて「信州義民中萱加助」を映画化するなど、貞享騒動は全国的に広く知られていくことになる。その後もいくつかの物語本が出版された。

戦後の義民継承と教育利用

戦後、昭和二五年（一九五〇）、松本市宮渕に移転する松本市立丸の内中学校の造成工事現場から一八体の人骨が掘り出された。首のない骨もあったことから騒動の処刑者のものと推定され、勢高の臨時の刑場であることが判明した。そこで昭和二七年（一九五二）、松本史談会が中心となって「義民塚」が造営され（八二頁参照）、毎年四月二二日と十一月二二日に慰霊祭が行われるようになった。



加助のレリーフ（大川大系作）

児童文学の「おしゆん」や絵本なども制作され、教育現場でも教材として利用されるようになっていった。

昭和六一年（一九八六）貞享義民三〇〇年忌にあたり、日本司法博物館・貞享義民顕彰会・貞享義民社奉賛講の三者が「貞享義民を讃える会」を設立、三〇〇年祭が執り行われた。記念式典やイベントが開催され、記念碑や慰霊碑などが建立された。義民塚と中萱駅前に建立された記念碑には、穂高町出身の彫刻家小川大系作の多田加助のブロンズ製のレリーフがはめ込まれた。

旧三郷村ではこれを機に「ふるさと創生事業」の一環として「貞享義民記念館」の設立を決定し、平成四年（一九九二）一月二〇日に開館した。「生きる権利の主張」を館のテーマに掲げ、貞享騒動の資料展示や収集・研究ばかりでなく、義民や農民の思いや生き様など広く顕彰活動を行

行っている。

弱者の生きる権利を主張し、命をかけて権力に抵抗した加助たち義民の姿は、この先も民衆の英雄として語り継がれていくことだろう。（寺島俊郎、百瀬さくら）



現在の貞享義民記念館

1 子どもの歌 高らかにひびく祭り

安曇野には、子どもたちが中心になって行う祭りがある。小正月の火祭り、三九郎はその代表格だ。

三九郎のほかにも、三郷には子どもたちが担う祭りがある。楡・住吉や上長尾では、盆に道祖神祭りが行われ、子どもたちがブテンと呼ぶ屋台の飾り物を作ったり、それをお宮まで曳いたりする。一日市場上町では、正月の御柱を倒した後に、御柱に取り付けてあった福俵を神輿に載せて子どもたちが慶事のあった家まで担いでいたりする。

子どもの祭りには歌がつきものだ。歌でなくとも、囃子^{はやし}声や大声をあげて調子をとったりする。三九郎にも卑猥^{ひわい}な囃子^{はやし}唄がある。とにかく子どもたちは、普段なら怒られるような大声を、思い切りがなりたてる自由を楽しむことができた。

北小倉の御柱立てや上長尾の鳥追いも、子どもたちが歌いながら集落をまわる。どちらも正月や小正月の寒い時期のものだが、子どもたちの歌声に、集落の人々はやがて来る春の訪れを思い、その先にある豊かな実りを願った。



隣り合った下区と上区では、互いの歌声が聞こえると、子どもたちは負けないうようにいっそう声を張り上げる（北小倉上区 平成 25 年（2013））



手際よく飾りつけられていく御柱（北小倉下区 平成 25 年）

おんばしらたて きてくりやい 北小倉の御柱

安曇野市内には、正月の短い間だけ、道祖神の傍らに御柱を立ててまつる集落がある。諏訪の御柱と違い、安曇野の御柱には、紙垂や俵などで飾りがつけられる。飾りは集落によって特徴がある。三郷では、北小倉と一日市場で御柱が立てられる。

北小倉では上区・中区・下区のそれぞれの道祖神の横に御柱が立つ。御柱立ての行事は子どもたちが中心になって行う。ここでは、北小倉下区の御柱立てを中心に紹介する。

下区では、御柱立てに参加できたのは、かつては小学校四年から六年の男子、それも長男だけに限られていたが、平成元年（一九八九）には、子どもたちをまとめるタイショを女子がつとめたというから、そ

れ以前から子どもが少なくなってきたのだろう。例年、夏休みが終わった九月ころから御柱の準備が始まる。

子どもたちは、集落の各家をまわって御柱の資金を集める。集めた金は御柱の材料費にもなるし、子どもたちへ「キュウリヨウ」としても支払われる。

一月末、本格的なおんべ（紙垂）作りが始まる。おんべのほかに、大人の手で一抱えにもなる日天と、三々四々ほどになる月天という飾りを竹や和紙などを使って作る。昔は子どもだけで作っていたが、このごろは大人たちが作ることが多くなった。さらに巾着と呼ぶ飾りも作る。子どもたちは一緒に昼食を食べたり、おんべを作る合間に遊んだりしながら、仲間としての絆を深めていく。

おんばしらたて きてくりやい

元旦、朝五時から子どもたちは、集落のなかを回りながら歌い、大人たちに御柱立てへの参加を呼びかける。山つきの北小倉は寒さも厳しい。雪の多い年などは、固く踏みしめられた雪に滑って転びそうになることもある。未明の暗いなか、呼びかけに応じた大人たちが鉈などの道具を持って道祖神前の辻に集まる。子どもたちが作ったおんべや巾着を、大人たちが御柱に飾りつける。

飾りつけが終わった御柱は、木遣りの唄声に合わせて立



おんべ（紙垂）は、集落の戸数分作られる
（北小倉中区の御柱 平成 25 年）

てられる。ちょうど立て終わるころに初日上がり、日天月天が初日の光を受ける。御柱は松の内だけ立てられ、正月七日前後、学校が休みの日に倒される。御柱に取りつけられたおんべは各家に持ち帰られ、玄関などに飾られる。一年間、災厄疫病から家を守ってくれるという。日天月天は小正月の火祭り、三九郎で燃やされる。こうしてみると、御柱に宿るのは正月の神であると考えられる。しかし安曇野では、御柱が道祖神の傍らに立てられることが多いからか、御柱立ては道祖神の祭りであるとみなされているようだ。

実際、子どもたちに、御柱に何を願うか、と聞くと、「道祖神は北小倉の神様だから、自分や家族の健康かな」という答えが返ってきた。

近年、中区では御柱立ての主役となる小学生がいなくなったため、御柱を立てなくなつた。祭る神が正月の神であれ道祖神であれ、超少子高齢化の波は、御柱にも押し寄せている。

ホンガラホ 上長尾の鳥追い

小正月、温上長尾では、鳥や虫の害から農作物を守るための予祝行事、鳥追いが行われる。鳥追いは、かつては松本平一円で行われていた。子どもたちはきょうだいでそれぞれ、かまどの灰などを掻き出す十能や、ブリキのバケツ、板木などをたたいて大きな音を出しながら、鳥追いの歌を歌い、自分の家の田んぼや畑の周りを回って歩いた。やかましい音を出すことで、田畑を荒らす鳥や虫を追うのだ。

鳥追いは、ほとんどが家ごとに行う行事だが、上長尾では、北村・東村・西村の子どもたちが揃って行う。鳥追いの日は、各村の道祖神には幟が立てられ、五つ燈籠が飾られる。なぜ集落で行うのか、いつごろから行っているのか、道祖神とどういう関わりがあるかなどは、わからない。北小倉の御柱立てと同様、もともとは男の子だけの祭りだったが、今は女の子も参加している。

鳥追いの日、はじめに北村道祖神横にあるブテングラ前

に北村の子どもたちが集合する。大太鼓や小太鼓を叩く子
ら、笹に提灯をつけたササモチの子らが、北村道祖神を出
発して東村道祖神へと向かう。

鳥追いだ 鳥追いだ

きょうはだーれの鳥追いだ

太郎と次郎の鳥追いだ

おーれもひとつ追ってやれ

ほんがらほ ほんがらほ

東村道祖神の前には、東村の子らが待っていて、北村の
子らに合流する。子どもたちはよその村の子の歌声に負け
ないよう、大きな声を張りあげる。太鼓の音も合わせて大
きくなる。人数を増した一行は、西村道祖神のある平福寺
門前に到着、一休みする。この休憩の時、近くの食料品店
で好きな菓子を買って食べたりするのを楽しみにしていた
が、残念ながらその店は、平成二九年（二〇一七）ころ、
店じまいしてしまったという。

西村の子どもたちを加えた一行は、集落を一周し、ふた
たび北村道祖神前まで戻る。翌日も同じように集落をま
わって、鳥追いをおこなう。

上長尾の鳥追いは今や、安曇野市内で唯一の鳥追いに
なった。
(宮本尚子)



子どもも大人もそろってにぎやか。鳥も虫も逃げていくか（令和4年（2022））

2 古い集落を揺られゆく大きなお船

近年のコロナ禍で、地域の祭りも縮小を余儀なくされている。しかし地域の人々の絆を深め、郷土に伝わる歴史や文化を継承する上で、祭りは大切な機会のひとつであろう。

三郷地域で大きなお船が曳行されるのは、住吉神社と中萱熊野神社である。ともに中世以来の歴史を持つ神社だ。ここではコロナ禍以前の祭り船について紹介するが、将来にわたって祭りの伝統が伝えられることを願うばかりである。

住吉神社のお船

住吉庄の鎮守ともいわれ、古い歴史を持つ住吉神社。例大祭は四月の最後の土日に行われ、本祭りには二艘の大きなお船が奉納される。所謂「穂高型」のオフネの形をとるが、江戸時代後期の文政十一年（一八二八）のものがその原型とされる。

二艘のうち住吉区の御船には、御幣ごへいが立てられている。また、安曇野市内の多くのお船の船縁と同様に、常緑樹の松などが飾られる。御幣とともに、神様の乗物であるとい



楡区のお船



住吉区のお船

う意識から発した飾りつけなのだろう。

一方、楡区のお船には、木偶（人形）が飾られる。当地では、江戸末期の文久三年（一八六三）に等身大の人形が作られ始めた。人形はそれ以前から飾られていたが、小ぶりのものだったらしい。

本祭りの日、二艘は神社前の楡農村公園から境内へと曳行される。社殿前でお祓いを受けた後、お船を前後に激しく傾け、煽り立てる。これをオフリヨウと呼ぶが、大きなお船が激しく揺れる様は圧巻である。

中萱熊野神社のお船

下中萱の歓喜寺の東に、「乾原^{ばら}」と呼ばれる空き地がある。戦国時代に築かれた真々部氏の館の乾の方角（北西）にあるこ



熊野神社のお船

とからこの名がついたという。かつてこの一帯は、法国寺の境内でもあった。

八月の最終日曜日、中萱熊野神社の本祭りには、この乾原から神社に向けて、巨大なお船が曳行される。高さが八呎ほどもあるため、お船が通れるように、船道を横切る電線をわざわざ高くしてもらったそうだ。

お船が境内に入ると、神事や浦安の舞が奉納される。その後、神楽殿の周りを三周するが、熊野神社ではこれをオフリヨウと呼んでいる。

船幕に染め抜かれた「抱き茗荷^{みょうが}」の紋は、中萱に多い宮澤姓の家紋である。お船の組み立てや人形飾り物の制作は、保存団体の中萱紫石会^{しせきかい}が行い、お囃子の演奏は、紫石会と、その手ほどきを受けた小学生が担当する。地域の多くの人々に支えられて曳かれるお船である。（逸見大悟）

3 いうなり地蔵

下長尾の小原^{こばら}にいうなり地蔵と呼ばれるお地蔵さまがまつられている。人々のどんな願い事でもかなえてくれるという。失せものさがし、入学試験の合格、縁談成就など願い事はさまざま。

方法も色々で、願掛けをする人もいて、三日三夜の願をかける、お百度を踏む、呪文を唱えるなど。人にわからないように夜お参りすると効果があるともいわれている。「言うなりに願い事をかなえてくれる」というので、人気があり、かつては、近からの参詣人も多かったという。

願掛けが成就すればお礼に、腹掛けや帽子を贈る。

祭日は三月三、四日で、小原・大原・幅^{はば}下^{した}・花見^{けみ}の家々二四軒（後に二軒増加）がお地蔵様をまつっている。この二四軒は、隣組というわけではなく、いくつかの隣組が混ざり合っている。一七〇〇年代の文書に温堰・地蔵堂の存在が見えていることか



地蔵をまつる組員氏名



いうなり地蔵



七日市場 延命地蔵

ら、この地蔵堂の集まりは、ムラを開拓した家々の集まりであつたのではないか、と推測する人もいる。

かつてはお地蔵様の横にある集会所近くにお地蔵様の田と呼ばれる神田^{かんだ}があり、そこで收穫される米を売って祭費に充て^あてていた。その後、田は諸事情により売られて、現在は民家となつているので、祭費は毎年徴収している。一戸一〇〇〇円あて徴収し、桜餅一個・ちくわ一本と酒で直会^{なまわい}をする。二四軒の家々で祭るが、実際に祭に参加する家は年々減つており、一〇軒ほどで行う年もあるという。欠席した場合は、桜餅・ちくわ・酒が届けられる。

現在の集会所が立つ場所は、以前、広場となつていて、屋台なども出たというし、子どもたちは道祖神祭りの折のように太鼓を叩いてにぎやかしていたという。

三郷には、このほか二木の子育て地蔵、七日市場の延命地蔵などがあり、それぞれが人々の願いをかなえてくれている。

(倉石あつ子)



二木子育て地蔵



北小倉かやはらの願掛け地蔵

4 消えゆく庚申講

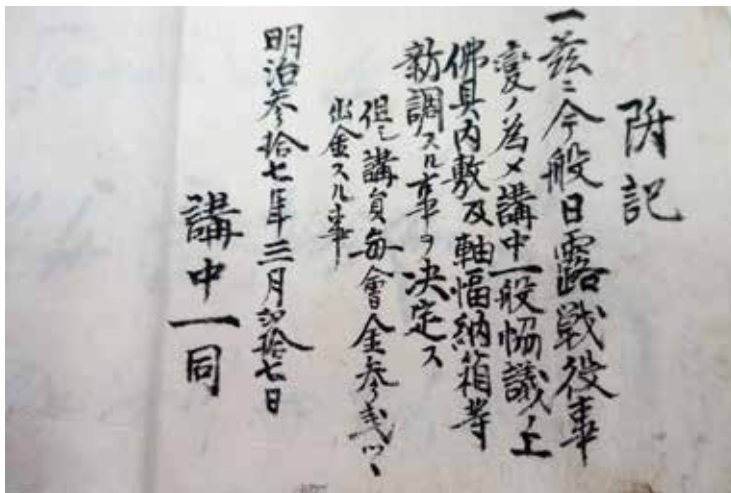
このところ、豊科郷土博物館に「もう講をしなくなったので道具をもらってもらえないか」という申し出が年に何回か寄せられる。そのすべてを受け入れるというわけにはいかないが、伝わっている道具の由緒が明確、講に付随した文書資料なども残っている、メンバーからの聞き取りが可能などの場合に限っていただくことにしている。

安曇野の講としては、戸隠・伊勢・御嶽・秋葉・三峰などとともに庚申講がほぼ全域で行われていた。

特に庚申講は葬式の折に、墓穴掘り・帳場やお勝手の手伝いなど、さまざまな役割を分担してもらった講であった。

講の方々の協力なくしては葬式も出せない。二ヶ月に一度ぐらい巡ってくる庚申の日には、メンバーが当番の家に集合して青面金剛の掛け軸をかけてお参りし、「話はオコシンの晩に」といわれるように、夜更けまで話し込んで解散した。当番の家では、酒・サバの切り身の煮つけ・煮イカ・生姜醤油和え・煮物・漬物などを準備してもてなした。小字ごとに行っていたので、三郷にはいくつかの講があったのだろうか。現在、かろうじて行っているところも、ハツド・シメドの二回だけとか、どちらか一回だけ行っている。

住吉のある講では、昭和五〇年代終わりごろから、葬式を斎場で行うようになって、男性の講を女性が引き継いだ形になった。時刻も夜から昼に移ったが、その女性たちの講もいよいよメンバーの減少や諸事情によって行えなくなり、講を解散することになった。講の道具を入れていた持ち手の付いた箱は、日露戦争戦勝記念に新調したものである。講の道具を購入するときなどは、こうして何かの記念になる年などに購入することが多かった。

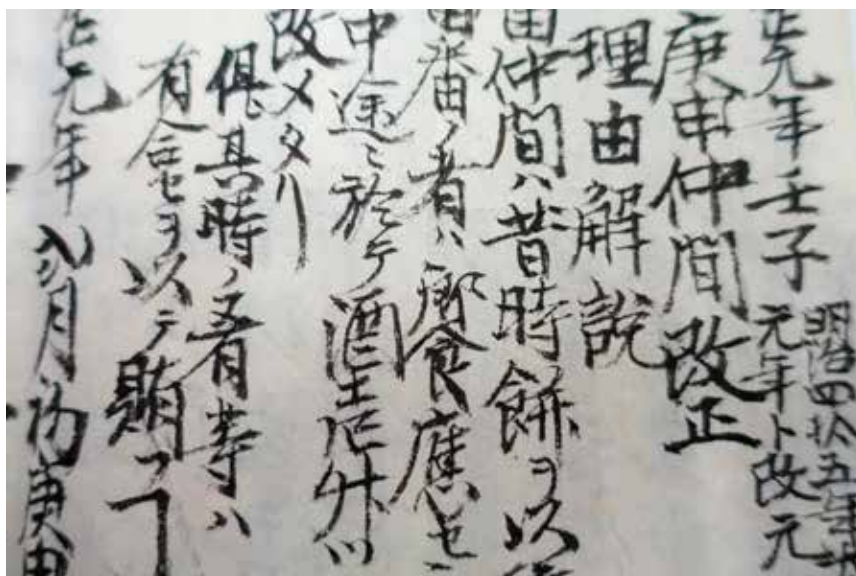


日露戦争戦勝記念に講道具箱新調の決定

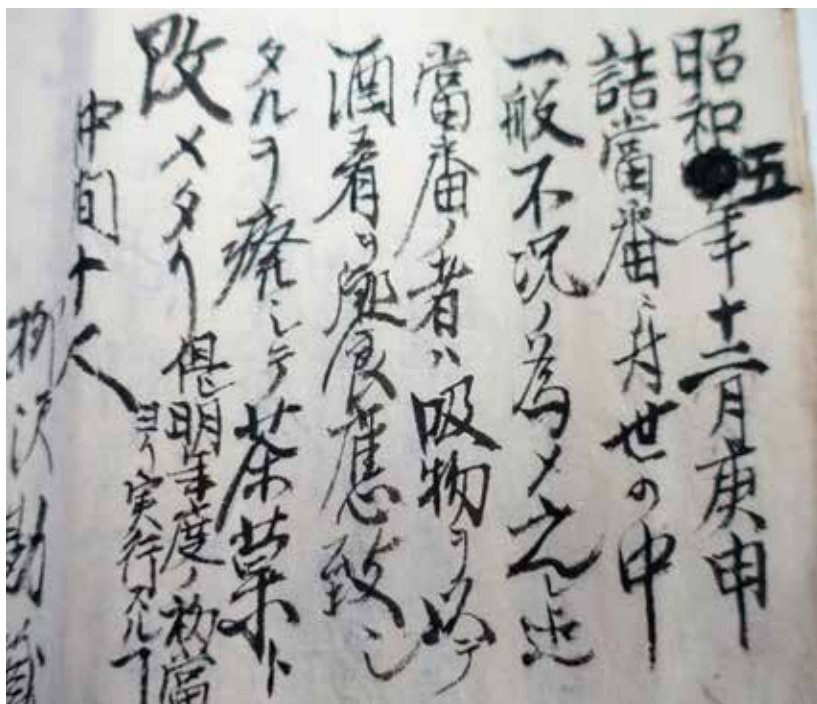
また、青面金

剛の掛け軸は梓川上野の真光寺に行つて請けてくることが多く、ほとんどが同じ絵柄である。真光寺の初庚申にお参りに行き、そろそろ古くなつてきたから新しい掛け軸を新調しよう、ということだったらしい。講員がそろつて参拝する、代表者が行くなどさまざまであつたようである。こ

うして時折新調するので二、三本の軸を持つのは普通で、住吉の箱には大小六本の掛け軸が入っていた。それを講のあるたびに全部出して掛けていたという。住吉の場合、残された記録から内容の変化を読み取ることがができる。講のご馳走も社会的不況の影響を受け、かつては吸い物・肴を



明治 45 年餅の饗応廃止する



昭和 5 年吸物・酒肴を廃止

ては吸い物・肴をだしていたが、茶菓子だけという簡単な対応をするように変わつていったようだ。

酒肴の飲食も講の楽しみの一つであつたが、当番の家の負担は大変で、そうした意識が次第に講の在り方を変えてきたともいえる。

(倉石あつ子)

5 墓地を見守る枝垂れ桜

春、安曇野を歩いていると、枝垂れ桜の大木を見かけることが多い。特に三郷から堀金にかけての山沿いに多いように思われるが、開花の盛りには太い幹いっぱい花をつけた長い枝をゆらゆらさせている。

この桜は「シダレザクラ（枝垂れ桜）」または「イトザクラ（糸桜）」と呼ばれ、人為的につくられた品種である。もとの野生種はエドヒガンだが、エドヒガンのなかで枝の生長が速く下向きに垂れる性質が選ばれ品種として生まれた。古くから各地で栽培されているため、ひとことで枝垂れ桜といっても、さまざまなクローンが存在し花の色や大きさには変化が多い。

枝垂れ桜に限らず、桜は昔から人々を魅了してきた。しかし奈良時代末期に編纂された和歌集、万葉集に詠まれた花について数えてみると、桜はそれほど多いわけではない。一位の萩の一四一首に続いて、二位の梅、三位の松、四位の橘、そして五位が桜で四四首とされている（首数の数え方には諸説ある）。現代まで続くほどの桜の人氣は、万葉の時代が過ぎてからだったのである。特にシダレザクラが栽培品種として全国各地に植栽されたのは、江戸時代に入ってからと言われている。



樹齢数百年ともいわれる北小倉の枝垂れ桜。安曇野を代表する桜のひとつ

枝垂れ桜のあるところを気を付けてみると、堂や墓の近くにあったり、寺の境内に植えられていることが多い。逆



南小倉の墓に咲く枝垂れ桜



りんご畑の中の見事な枝垂れ桜（室山西）

た人は地獄の責め苦を逃れられる、という語りも伝えられるようになった、と柳田は指摘している。あの世とこの世の往復などを考えるようになってからの思想であろう。

傘のように開いた枝の下で、満開の桜の花を見上げるのは、木の外側から花を楽しむのとはまた違った不思議な感覚である。枝の中におさまって、内側から花を楽しんでみるのも一興かもしれない。「願わくば 花の下にて 春死なむ その如月の望月のころ」（西行）^{さいぎょう}とはいかないだろうが。

（倉石あつ子、松田貴子）

に枝垂れ桜を目指してたどり着くと、そこにはたいいてい墓や堂があるといつてもよい。

枝垂れ桜が多いのは三郷や堀金に限らず安曇野、いやもっと広く信州全域に見られる風景のようだ。そしてこれを信濃桜と呼んでいた由が、柳田国男^{やなぎたにくにお}の「信州随筆」に書かれている。

枝垂れ桜はその枝が地に着くぐらいにしだれているのが特色であるという。最初は蹴鞠^{けまり}などに興ずる貴族の趣味として、しだれ柳や桜が植えられたもので、やがてその風習が人々の間にも普及していった。更には、桜の木の下を地を冥土の入り口とみる感覚ができあがり、桜の花を見てき



満開の桜の下から見あげて何を思う？（北小倉）

6 山と里の交流

里では、山からの恵みをさまざまに受けている。稲を刈って乾かすためのハゼ木も一日市場では小倉地区の木をもらってきたという。日常的に使用する焚き物はもちろん山からのものであるし、道祖神祭りの御柱も小倉方面の山から手に入れた。山の人々は山のモノを里に送る代わりに里で農作物が獲れると交換した。

山と里は常に交流していたが、里人にとって山はまた不思議なことがおこる場所でもあった。

山にまつわる言い伝え

山から里に酒を買いに下りてきた坊さん・山伏・山姥などが、小さな徳利を出して酒をくれという。とても言われただけの量が入ると思えない徳利にいざ酒を入れてみると、するすると入ってしまふ、といった話は各地に伝わっている。明盛・中萱・一日市場に現れたという黒沢小僧もそうした不思議な山人の一人である。一日市場には以下のような話が伝わっている。



黒沢小僧（村上紀子画）

一日市場で市が立つと、どこからともなく汚い身なりをした子どもが、酒屋の店先に立つ。子どもは汚い皮袋を一つ差し出して「この袋に三升の酒を入れてくれ」という。店の人は、小さな袋を見てとても三升の酒が入るはずがないので断ると、子ども「いいから入れてみて」という。店の人は仕方なしに入れてみると、三升の酒がみるみる入ってし



田んぼを見守る力カシ（村上紀子画）

まった。それから、たびたびこの子が酒を買いに来るので、この子を「黒沢小僧」と呼ぶようになった。

こうして不思議な山人に酒を買ってもらった店は、その後、客が頻繁に訪れるようになり、繁盛したという例が多い。

また、楡には山姥が産屋を借りてお産をしたといわれる場所がある。残念ながら子どもは死んでしまったので、そこに埋葬して山姥は山に戻った。子どもを埋葬した場所を姥塚うばづかと呼んでいる。

田んぼを見守ってくれる案山子かかしも、春になると田におりてきて田の神となり、秋になって田んぼの収穫が終わると山に帰っていつて山の神になるといわれていた。蛙に餅を背負しょわせて山に帰る案山子をまつるのが、旧暦一〇月一日とおかんやの十日夜で、一斗榼ますに餅と大根を添えてお供えした。

大田屋林のキツネ

下長尾から七日市場にかけて、昭和四〇年代ごろまで大田屋林たやばやしと呼ばれる大きな林が続いていて、キツネが住んでいた。夜、ここを通る人はよく化かされた。色よい女が出てきて「お風呂に入っていけ」と誘いかける。これはいいお風呂だ、と入っていてしばらくして気が付くと、ドツボだったとか、美味しいまんじゅうを食べると勧められて食べて気が付くと馬糞まぐそだった、などの話はよく聞いたものだという。

大田屋林は、昭和四〇年代後半から住宅地などへの開発が進み、狐に化かされる話も聞かなくなった。開発しているころ、林の中には大きな木が生えていたので、木を伐ったときなど、切り株を踏み石代わりにして川を渡ったり、株に腰かけて遊んだという。現在、六〇歳代初めの男性の子どもの頃のことである。

（倉石あつ子）

1 三郷村の誕生

合併以前の三郷地域

三郷村の前身となる温村・明盛村・小倉村は明治時代に誕生した。

温村は、野沢村・長尾村・楡村・住吉村の四ヶ村が合併し、明治七年（一八七四）九月一〇日に発足した。村名の由来は、村の中央を流れる「温堰」に因み、村の豊穡を願ったものであった。明盛村は、七日市場村・一日市場村・及木村・二木村・中萱村の五ヶ村が合併し、同年九月五日に発足した。そして小倉村は、田尻村・小田多井村・田多井村の三ヶ村と合併し同じく九月五日に「科布村」として発足したが、明治一三年（一八八〇）、科布村から分離した。その後、明治二二年（一八八九）の市制町村制の施行にあたり科布村に再び併合されたが、明治二六年（一八九三）に再度分離し小倉村となった。

以降、昭和の大合併により三郷村となるまで、三郷地域では温村・明盛村・小倉村の三村が存在することとなる。

温村役場（昭和 29 年頃）
のちの三郷民俗資料館



昭和 26 年に建設されたこの建物は現在も残っている
（三郷民俗資料館は平成 24 年に閉館）

合併までの道のり

三村合併の話が出だしたのは、昭和二六年（一九五二）に三ヶ村中学校組合が設立された頃からである。これに備え、昭和二七年（一九五二）からは毎年一回三ヶ村の議員が定期的に会合を行い、また昭和二八年（一九五三）からは消防団の出初式も合同で行われるようになった。

そして昭和二八年（一九五三）一〇月、町村合併促進法が施行されると、温村・明盛村・小倉村の三ヶ村は合意の上、いち早く昭和二九年（一九五四）一月五日に合併協議会を発足し、合併後の村政の在り方などについて話し合った。また、今後は合併促進協議会を設けて合併を促進すること、各村はそれぞれ住民への周知徹底と理解を図るべきことが決められた。

さらに、合併促進協議会が開催されるまでの二月から三月の間、各村は懇談会を開き、住民に合併について理解を求めた。また、各村独自に合併対策委員会等を設けるなどして合併に対処した。

四月になると合併促進協議会が三回行われ、合併に関する一切の事項が整えられた。また、新村名は一般公募とすることが決められ、応募総数一二〇件の中から合併促進協議会において討議の結果「三郷村」に決定した。名付けの理由としては「三郷村の三は、温・明盛・小倉の区域を

意味し、郷は村に通じる。この字句は平和で美しく温かみがあり発展性に富んでいる」と説明された。

三郷村の誕生

昭和二九年（一九五四）四月二四日、三ヶ村はいっせいに合併のための議案を審議し議決。翌二五日には合併調印式を行い、合併申請書を知事に提出した。

申請書には、新村名を「三郷村」とすることのほか、合併した理由として次のことが書かれている。「温村と明盛村と小倉村は歴史的に密接不離な関係に結ばれている。古くから北澤山林組合と黒澤山林組合の組合村であって三ヶ村の建築用材薪炭等総て小倉村地籍において之を求めている。又此の三ヶ村は明治二十七年から明治四十年に及んで小学校組合を設置した時代もあり其の後においては温、明盛両村の小学校組合に変更して現在に及んでいる。此の間においても十二年間に涉って小倉村の高等科の生徒は両村の組合校に委託生として通学した事実があり昭和二十六年此の三ヶ村にて中学校を設置した等人情、風俗、環境等全く同じであり今回三ヶ村の総意により極めて円満裡に合併できたことは以上の素因によるものである。」

また、申請書には新村建設計画書も添付され、新庁舎は瑞穂中学校（後に名称を三郷中学校に改める）付近に建て

ることや、小学校・中学校などの施設の統合整備、道路や橋梁の整備などについて書かれており、合併後この計画に基づき各事業が進められた。

そして、昭和二十九年（一九五四）六月一日に「三郷村」が誕生した。当初の予定では、五月三日を合併の目処としていたが、書類に一部不備があったため、再提出後の五月二四日に合併認可を告示し、六月一日に合併となったのである。世帯数は二〇〇〇戸、人口は一万人を越えた。昭和二八年の合併は、その多くが町が市制施行をめどとしたものや、市が周辺の村を吸収合併したものであったが、三郷村の誕生は三ヶ村が対等に合併したものであった。



合併調印式



合併祝賀会

節目ごとに行われた記念式典

合併後、節目の年ごとに様々な行事が行われた。それらは、村民の一体感を盛り上げるものであった。

昭和三十三年（一九五八）には三郷村誕生五周年を記念して、第一回三郷祭が開催された。芸能発表大会では「三郷音頭」が披露され、運動会ではこの年制定された「三郷村民体操」を参加者全員で行なった。

一〇周年記念の際には、記念行事として歌謡ショーなどがあり、記念木の梅が各戸に一本ずつ配られた。その後、村は一般から村章を募集し、昭和四十一年（一九六六）三月に村章を決めた。この村章は三郷村の「み」を図案化したもので、三つの円は小倉・温・明盛の三地区をあらわし、三つの和を象徴している。



三郷村 村章

また、昭和五九年（一九八四）の合併三〇周年の際には、数多くの記念行事が一年を通して行われた。まず、黒沢川の堤防沿いに一五〇本の桜の苗木が植樹され、現在も花見客が訪れる場所となった。九月二二日に行われた記念式典では、村民憲章、村花、村木の発表、埼玉県三郷市との友好都市提携の調印、村政功労者への感謝状の贈呈などがあった。村

花と村木は村民から募集し、投票により村花は「リンゴ」、村木は「アカマツ」に決定した。そのほか、特別文化記念村木に「ユリノキ」が選定された。さらに、十一月一日には、三郷小学校玄関脇の一角にトランク型のタイムカプセルが埋められた。

そして平成一六年（二〇〇四）、合併五〇周年式典が開催された。また、五〇周年記念として、平成八年（一九九六）に『三郷村誌Ⅱ』の編纂が企画され、平成一六年二月に『三郷村誌Ⅱ第一巻自然編』が刊行された。

三郷村政五一年四ヶ月

平成一七年（二〇〇五）一〇月一日、三郷村を含む五町村が合併し、安曇野市が誕生した。

三郷村では、同年九月二三日に閉村記念式典が行われた。式の最初に村長の西山馥司氏は、次のような式辞を述べた。「合併五〇年を振り返ってみると、その歩みのなかに数々の出来事があった。村が育ててきた文化には、誇るべきものがある。村としての三郷はなくなるが、地域としての三郷がなくなるわけではない。合併してもひとりひとりが、生まれ育った三郷を愛し誇りを持っていきたい。」

平成一七年九月三〇日、五一年四ヶ月続いた三郷村の歴史は幕を閉じたが、安曇野市となった今もなお、三郷地域

に住む人々は自身の地域を誇りに思い、愛し続けている。

（松澤果穂）

三郷村村民憲章

三郷村は、北アルプスの麓に広がる美しい安曇野の自然に抱かれ、古い歴史と文化に恵まれた伝統のある村です。

私たちは、この村を愛し、お互いのしあわせと郷土の発展に願いをこめて、ここに村民憲章を制定します。

- 一、自然を愛し 環境をととのえ 美しい村をつくりましょう。
- 一、教育を重んじ 文化を高め うるおいのある村をつくりましょう。
- 一、責任をはたし 力を合わせて 住みよい村をつくりましょう。
- 一、健康で 働くことに誇りを持ち 豊かな村をつくりましょう。
- 一、思いやりの心で 楽しく話し合える 明るい家庭をつくりましょう。

（昭和五九年九月二三日制定）

2 廃仏毀釈と立ち直る寺院

明治政府は神道を国教とする方針を打ち出し、神と仏を区別する神仏判然令（神仏分離令）を発した。そのころ、国学などの思想を背景として国民の間に起こった動きが、廃仏毀釈という仏教排斥の運動である。

松本藩では、これを藩の政策として断行した。『松本市史』によれば、明治四年（一八七二）までに領内一六四ヶ寺のうち、一二四ヶ寺、全体の七五割が帰農したという。この年の七月、廃藩置県により松本藩が廃止され、替わって松本県、次いで筑摩県が置かれた。その施政下においても、寺院廃止の動きは続いたようで、筑摩県管内の寺の庫裡や堂の多くが学校に転用された。



浄心寺・小倉学校跡（北小倉）

明治一〇年代以降、寺院復興の動きが始まる。今、市内に残る寺院は、寺に縁のある僧侶が再興したか、別の寺院を移転させて寺地を復興させたものがほとんどである。

浄心寺——信徒の願いで再興が実現

北小倉の浄土宗寺院・一佛山光明院浄心寺は、小倉城主の小笠原但馬守貞政が、戦国時代の天正六年（一五七八）に創建、開山は真々部専念寺の第五世・泉譽上人と伝わる。

鳴沢川上流の北沢の奥、丸山の東の山裾に寺域を構えて以来約二百年、天明年間（一七八一～八九）に山火事が起こり、全焼の憂き目を見た。だが復興は早く、天明六年（二七八六）に十三世明譽上人が、北小倉中村の鎮守山地籍に寺院を建築する。現在の北小倉公園の敷地である。

明治四年の廃仏毀釈以後、鎮守山の浄心寺は小倉学校として利用された。校舎は庫裡を転用したが、老朽化のため、明治三六年（一九〇三）から順次改築が進められた。大正一二年（一九二三）の東小倉へ校舎が移転し、鎮守山の浄心寺跡は学校用地としての使命を終える。

浄心寺再興への動きは南小倉の青木堂あおきのどうから始まった。廃仏毀釈以後、浄心寺住職の説教所になっていた堂である。明治一四年（一八八一）、堂の信徒たちは、「浄心寺」の寺号を公に称することができるよう、地方官（長野県）への申請を企図する。そこで浄土宗の総本山（知恩院）の住職を務めていた養鷗うがいてつじょう徹定上人の代理人に手紙を書き、添え状の作成を依頼した。これより二年前の明治一二年（一八七九）、徹定は信州を巡じゅんしやく錫し、各地の寺院の再興にも尽力していた。青木堂の信徒たちも、このような動きに望みをかけたのであろう。

現在地に浄心寺を建てたのは、二十世上嶋貞巖上人かみじまていがんである。明治一八年（一八八五）に庫裡を新築。明治二二年



現在の浄心寺本堂



青木堂（南小倉）

（二八八九）には氷室の福寿院から本堂が移築された。本尊の阿弥陀如来は、貞巖の出身地の下角影から入仏し、再興を果たした。

現在の本堂は、平成に入って建て替えられたもので、平成一二年（二〇〇〇）に完成している。

歓喜寺——ありし日の法国寺の面影を伝える

下中萱の佛花山法国寺は、真々部と縁が深かった。戦国時代から江戸初期にかけて、真々部を町場として整備した際、「七寺八小路」の七ヶ寺に数えられている。寛文五年（二六六五）以降、真々部にあった住吉山真光寺（現在は



法国寺・中萱学校跡（中萱）



法国寺観音堂（中萱）

興国山真光寺として一日市場に所在）の末寺となり、乾原に本堂や庫裡が建てられた。寺域の北には観音堂が建ち、本尊に十一面観世音菩薩立像が安置されて、川西三十四ヶ所観音霊場の十八番札所として信仰を集めた。

廃仏毀釈による廃絶後は、中萱学校の校舎に改修して利用された。明治四三年（一九一〇）に温明尋常高等小学校の校舎が完成して移転すると、区の集会所に転用された。昭和二四年（一九四九）の中萱分館設置によって、法国寺の建物はその役割を終えた。

寺の廃絶後、観音堂の本尊であった十一面観音像は、一時的に上伊那郡小野の寺に預けられた。だが明治一七年

（二八八四）、旧地に観音堂が建てられて、戻ることができた。現在は、敷地内の墓地の所有者らにより護持されているが、今、当地に建っている観音堂は、平成二四年（二〇一二）に建て替えられたものである。

一方、法国寺そのものの再興の努力も続けられたが、官許は得られな



歓喜寺（中萱）

かった。そこで明治三三年（一九〇〇）、上伊那郡七久保村（現飯島町）にあった臨済宗の歓喜寺を移転させる許可を取り付け、法国寺の十王堂跡に移された。これが現在の見石山歓喜寺である。中興開山となった胡到和尚は、これらの動きの中心となって活動した人物である。

歓喜寺境内には、「南無阿弥陀仏」の名号が刻まれた元禄四年（一六九一）の庚申供養塔や青面金剛像、安政三年（二八五六）の「大日如来」の文字碑などが立つ。また観音堂の敷地内にも如意輪観音や青面金剛、六地藏が並ぶ。時代が変わっても、法国寺の面影が残る一帯である。

瑠璃光寺——廃仏毀釈後に創建

廃仏毀釈による寺院の荒廃を憂えた僧侶は多い。先に触れた養鷗徹定上人もその一人である。明治一二年（一八七九）の信州巡錫の際、名義上ではあるが、野沢の瑠璃光寺の開山となっている。

瑠璃光寺は、明治以前からあった寺ではない。前身は、野沢の西村に建つ薬師堂で、江戸時代前期の慶安四年（一六五一）の古文書にも記されている。本尊の薬師如来坐像は、長尾城主長尾監物けんもつの守り本尊であったと伝えられる。

薬師堂は明治四年に廃されたが、庵主の璉堂和尚れんどうは村人の協力を得て再興へと動き始める。知恩院から「開山徹定

上人創立」として承認されて、明治一四年春、無量山安養院瑠璃光寺として寺院への昇格を果たす。「安養院」は、旧梓川村横沢にあった浄土宗寺院で、同じく廃寺になっていた。瑠璃光寺創立の際に、一部の檀家が移籍されたため、この院号を冠した。

令和二年に、「無量山二

尊院瑠璃光寺」と改称されたが、寺の本尊を薬師如来として安置し、浄土宗の本尊の阿弥陀如来を供養していることから名付けられたものである。

また瑠璃光寺の鐘楼門は、廃寺となった波田の若澤寺の門の一部を移築したものである。ただし屋根を支えていた組物は、同じく徹底が創建した旧梓川村の恭儉寺の鐘楼門に再利用されている。

龍峰寺——復活できなかった寺院

楡公民館は、江戸時代の郷蔵の跡に建っている。中村という地名の名のとおりに、当地が楡村の中心地であった。こ



瑠璃光寺鐘楼門（野沢）

こを中心に、北には小路、北村、丁田、南に上手という集落が展開し、それぞれには道祖神も祭られている。

その郷蔵の東隣には、満珠山龍峰寺があった。旧梓川村の曹洞宗寺院・萬年山金松寺の末寺で、江戸時代後期には川西三十四ヶ所観音霊場の三十三番に数えられている。

ところが、明治元年（一八六八）一〇月、大般若経転読大法会の中で、失火により本堂や山門、庫裡などが焼失してしまった。これらの建物は翌年に再建されるも、廃仏毀釈の中で、明治五年（一八七二）に廃寺となった。

寺の建物は、明治六年の学制発布に伴って参智学校の仮校舎に転用された。翌七年、隣の郷蔵跡に楡学校が建てられて移転する。伽藍は解体・売却され、学校の費用に充てられた。寺宝や什物なども散逸したが、一部は檀家の手で護られた。現在は区の財産として、公民館南方の経蔵倉に納められている。

（逸見大悟）



龍峰寺跡の墓地（楡）

3 学校教育 それは三郷の誇り

三郷小学校は、現在県下一の児童数九百人超を有する小学校である。昭和四五年（一九七〇）、温明・小倉の両小学校が統合した三郷小学校舎落成式が行われる。以降、学校の教育環境が、三郷村当局はもとより保護者や地域住民の総力によって整えられ、樹木三五〇本の移植、特別教室の増築、東校舎増築、第二体育館落成と整備されてきた。昭和六〇年（一九八五）には、児童数一三五五人を数えた。

昭和二九年（一九五四）、三郷村発足と合わせて開校した



（手前）三郷小、（奥）三郷中、（中央）文化公園

三郷中学校に対する地域の思いも小学校と同様であった。

温明学校

明治四四年（一九一一）、温村・明盛村二村による組合立温明尋常高等小学校が開校する。

大正一三年（一九二四）一月二六日、皇太子（後の昭和天皇）の結婚に際して各自自治体や団体で「御成婚記念事業」が計画される。温村、明盛村では、温明小学校の植樹・ピアノ購入・理科室への電動力引込が実施された。すべて学校設備の充実である。両村長と学校長は、関係各位に対してお礼文を出している。その文章は「尚将来も『教育第一』の実を挙ぐる様御尽力を願います」と締めくくられている。

昭和三二年（一九



大正 13 年御成婚記念事業綴込

五七）七月

『PTA会報

温明』が創刊

される。巻頭

で布山兵三郎

PTA会長は

「物質的な貧

富や社会的地

位の有無など

は何の関係ありません。総ての父母が一緒になって力を

合わせて皆の子供達を洩れる者のない様に一人残らず幸福

にしてやらねばならないのです。このところはよく考えて

行きたいと思っています。」と記している。会報は、閉校

の昭和四五年（一九七〇）三月の三七号まで続く。最終号

は四六頁を数えた。

地域や保護者の教育への熱意は、児童に伝わっている。

「集団疎開三郷村への思い出」（閉校記念誌）と題して、昭

和二〇年（一九四五）春に東京から疎開した経験を持つ当

時の児童が寄稿している。

・親元を離れ、東京の当時、国民学校から温明国民学校三

年口組の二木先生のクラスに入り、（略）教室の友達

は、初めての集団疎開の生徒たちに、東京で見たB29の

大きさと戦災の話をするのを聞いてくれたり、又おひる



『PTA会報』創刊号（昭和32年7月）

の時になれば、おかずをわけて貰ったりして、皆親切にしてくれましたので、学校にいる間は、東京の父母忘れることができ、おかげで泣き虫だった私が、一度も泣かなかったと思います。（略）

この文章を記した山口さんは、二〇年後に自身の子どもと三郷を訪れた時の様子も記している。一日市場駅での二木先生との再会、倉田校長や浅田教頭の校舎案内、神谷村長からの歓迎の言葉に「身も心も明るく感謝し、今尚、三郷村へ行って来てよかった」とある。あつてはならない戦争であるが、その時代を前向きに生きようとした温明の子どもたちやその子どもたちを育てた地域に学ぶところは大きい。

小倉学校

明治二六年（一八九三）、堀金尋常小学校小倉部校から小倉尋常小学校として開校する。旧浄心寺跡を校地として教育を進めてきた学校であるが、児童生徒数の増加とともに校舎新築の機運が高まってきた。大正一一年（一九二二）、新校舎（現小倉グラウンド）が完成する。

大正一二年度学事報告に「この心地よい綺麗な校舎に移って一ケ年になりました。而して安曇野の遠望、鉢伏山の英姿は皆さんと私共に、毎日のんびりしたすがすがしい

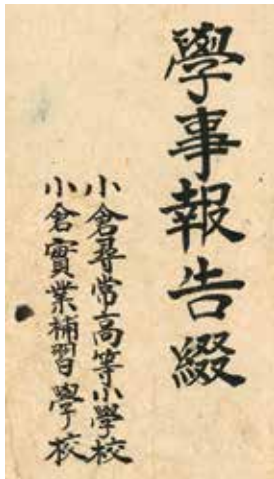
心持を送ってくれます。この気を吸いつつ運動し又勉強した生徒が、小学校に二四八名、補習科女子部七十名、補習科男子部二十名合計三三八名あります。」と新校舎設立の喜びを記している。

完全学校給食は、現在当たり前のことであるが、学校給食法が制定されたのは、昭和二十九年（一九五四）である。

小倉小学校の昭和二八年度学事報告では、完全学校給食について「十二月十五日から三月末まで五十五日間実施致しまして五百九十円一食十円強で六〇〇カロリーを摂取することが出来まして大変有難いことであります。農協加工部では、県から補助をいただいてパン窯の改造を行い、四月からはもつとおいしいパンをいただくことが出来る様になると思います」とある。児童生徒の心身の健全発達を目的とした学校給食を一年近く先取りしている。ちなみに温明小学校の完全給食は二九年一〇月の実施である。

三郷中学校

昭和三二年（一九四七）、新学制が布かれ小倉中学校、温村明盛村二村組合立温明中学



大正 4 ～昭和 26 学事報告綴



(上) 小倉学校旧校舎（大正 11 年）背景は市天然記念物マツとイチョウ（平成 20 年指定）

(下) 小倉学校新校舎（大正 12 年）

校が開校する。しかし、両校ともに発足は、国の教育改革に対応するものであったため、学校施設としては不十分で、小倉小学校、温明小学校との併設校としての開校であった。中学校としての独立した校舎は、昭和二十七年（一九五二）開校の三村組合立瑞穂中学校として確保された。当時のことを初代横澤正彦校長は「三郷中学校創設当時の思い出」と題して『三十年のあゆみ』に記している。

・校舎配置であるが、生徒中心に考えた。ホームルーム校舎を中心として管理棟、特別校舎、講堂、体育館等に最短距離で行けるように配慮した。講堂は地域社会の利用も考慮して道路側とし、体育館は運動場に面して位置づけた。（略）時の管理村長中村温村長が、私どもは教育

のことにについては素人だ。校長先生の案に賛成したいがどうかの一言で決定した。さすが、教育尊重の村であることを痛感し、今に忘れ得ない一事である。

瑞穂中学校は、昭和二年六月一日三郷村の誕生とともに、三郷村立三郷中学校と改称する。昭和二年四月二十五日に長野県知事林虎雄に提出した「合併申請書」に記されている理由書にはこのように書かれている。

「此の三ヶ村は明治二十七年から明治四十年に及んで小学校組合を設置した時代もあり其の後においては温・明盛両村の小学校組合に変更して現在に及んでいる。此の間においても十二年間に涉つて小倉村の高等科の生徒は両村の組合校に委託生として通学した事実があり昭和二十六年此の三ヶ村にて中学校組合を設置した等人情、風俗環境等（略）」



昭和 29 年合併申請書

合併の根拠として、学校教育の経過をあげているのである。三村が歩んできた共通した教育への熱意が伝わる。

校歌

三郷野沢に生まれた哲学者務台理作（詳細一二六頁）は、三村合併前の昭和二十七年（一九五二）から合併後の昭和三四年まで、ほぼ毎年講演会講師として来校する。その中で依頼されたのが三郷三校（小倉小、温明小、三郷中）の校歌であった。そして三校ともに作詞務台理作、作曲高木東六の同じ校歌が誕生した。

昭和三〇年三月一二日には三郷中学校講堂で校歌発表会が開かれた。ピアノ伴奏は、作曲家高木東六であった。

（平沢重人）

校歌

春はあけぬ北アルプスの
み山の雪は深けれど
星はまぐさや樹の花
人の希望も同様に
ふや三郷のこの学び舎に
しるは高くうたいふん

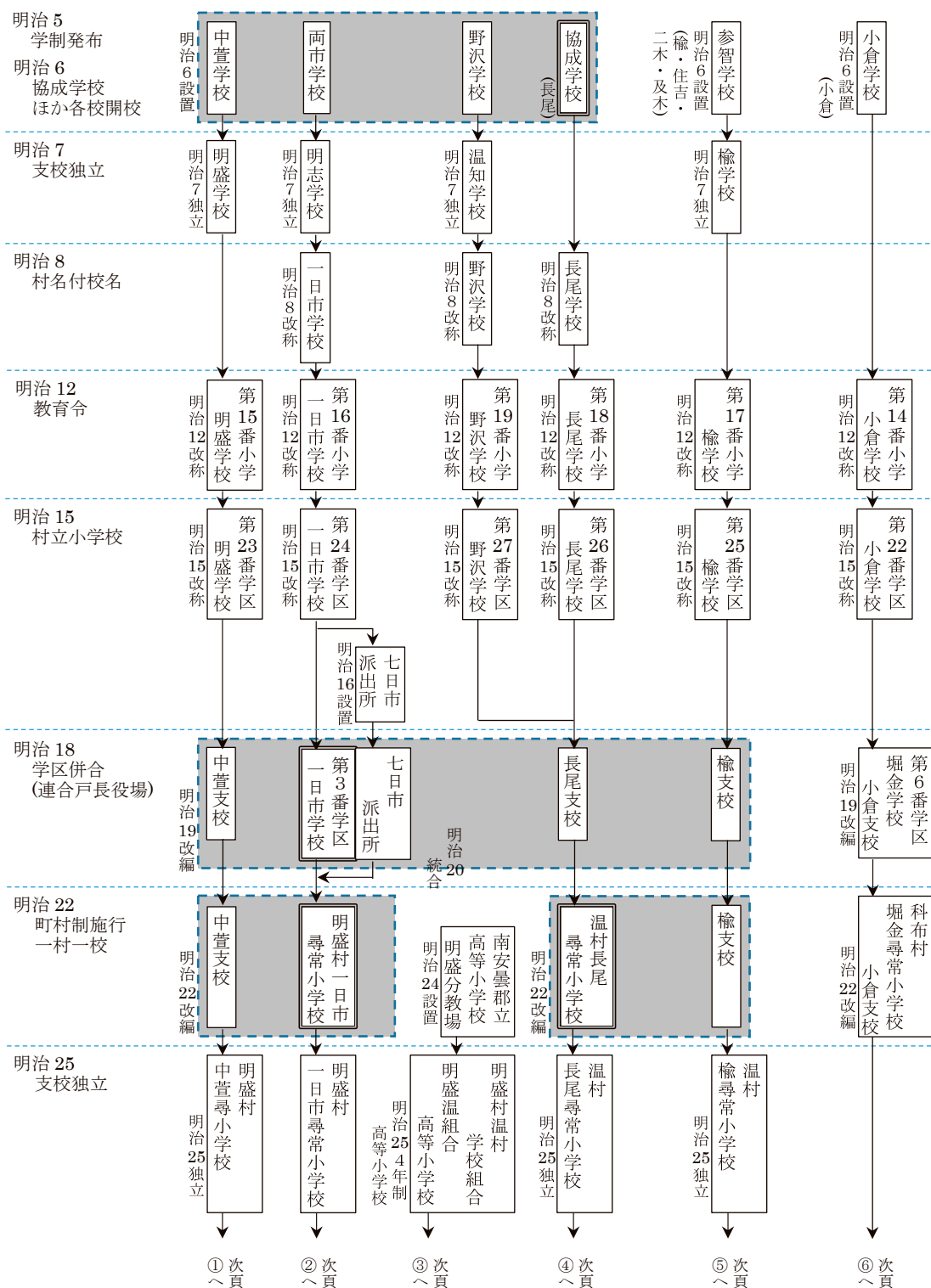
信濃の秋はおやぐれ早く
日に日に濃むや空の色
高根の白く雪ふれば
野へのみのりも身にしみぬ
ふや三郷のこの学び舎に
心こめて学びあふん

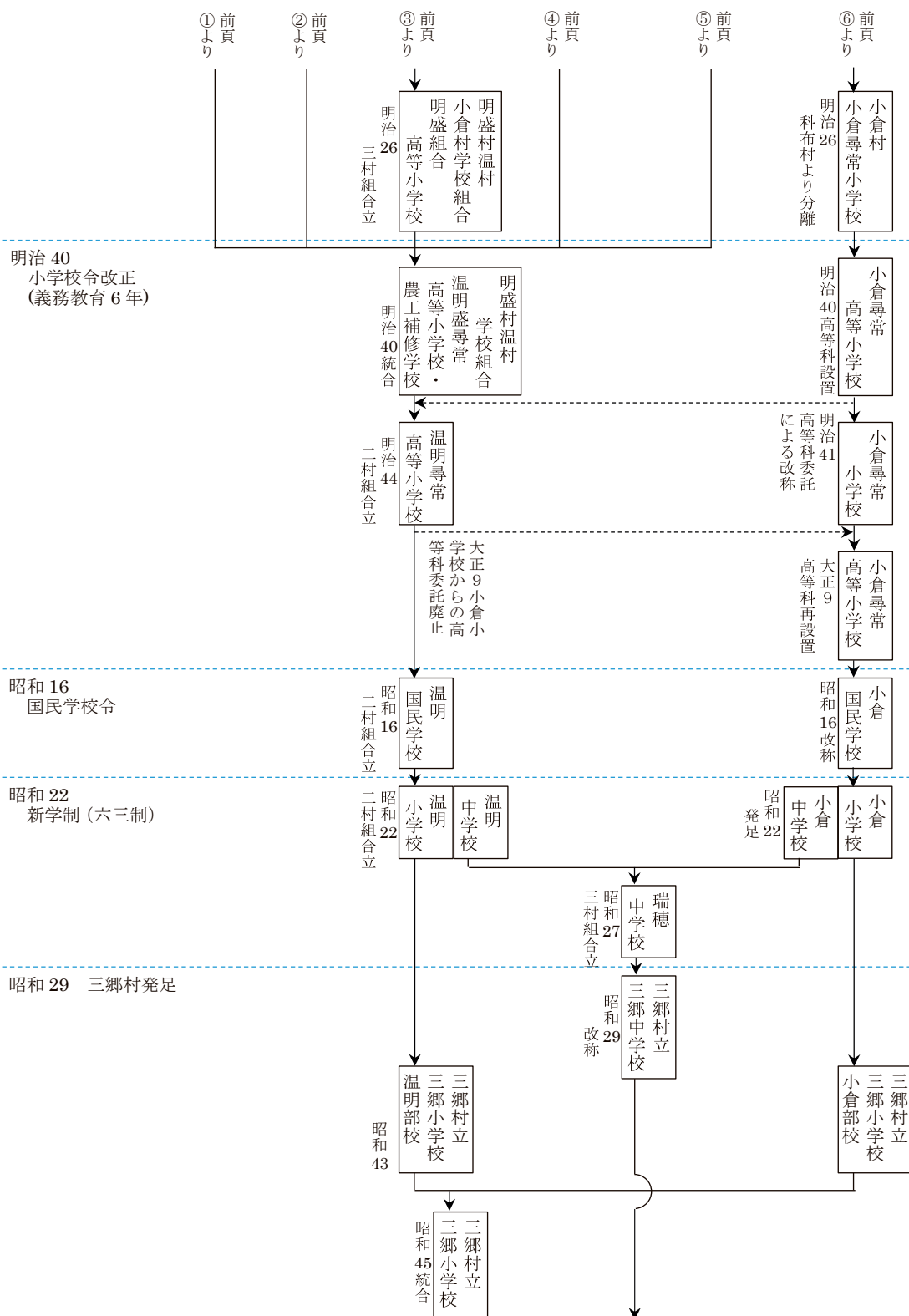
三郷の星は空雲のなみ野
自然の草のようぞこころ
西の香す嶺山河も
いのちやおりて澄み玉ぞ
ふやわれらもふや空雲野の
いのちをうけて共に立ちあふん

務台理作詞 高木東六曲

三郷小学校・三郷中学校 校歌

三郷地域の学校変遷図





4 松岡弘

正義と愛に生きた教育者

『安曇野文化』

の前身である『三

郷文化』（一九八

二年創刊、全一一

七号）の題字は松

岡弘（以下松岡）

の書である。松岡

は温村（現三郷温）下長尾に生まれる。哲学者務台理作と

同年であり、尋常高等小学校、梓農業補習学校と共に通つ

た仲である。松岡は昭和五八年（一九八三）三月八日急逝

する。日本退職公務員連盟会副会長を同年三月四日に退い

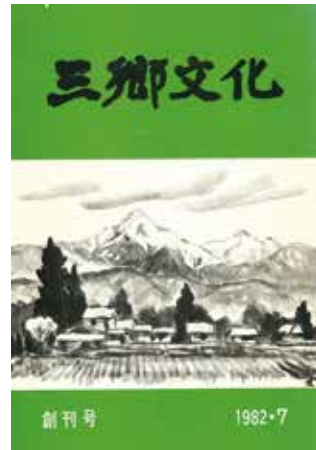
ているが、連盟会での退職のあいさつの直後、脳内出血で

倒れたのである。最後まで公務に携わり生命を燃え尽くし

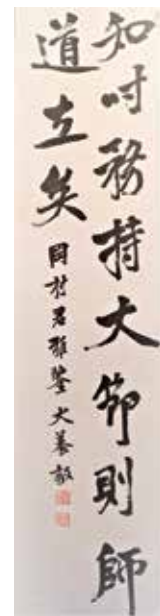
た人生であった。

運命的な出会い

松岡は、その後の教育者としての人生に大きく影響を得た人物と運命的な出会いをしている。犬養毅、岡村千馬^{ちまた}太（明治八年、三郷中萱に生まれる、校長・郡県視学歴任）、



『三郷文化』創刊号 1982年7月



犬養毅の揮毫
(郷土文化財センター)

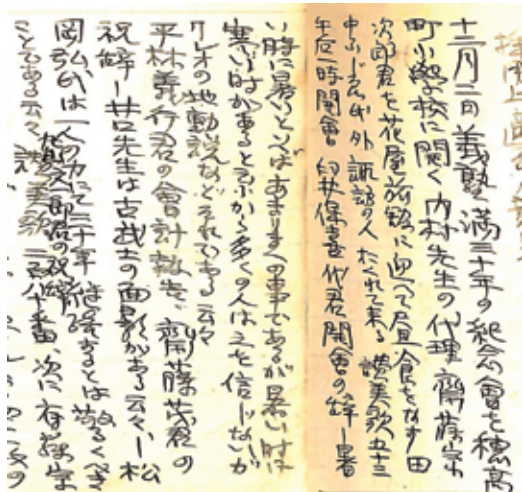
井口喜源治の三人を紹介する。

明治四五年（一九一二）、長野県師範学校を卒業した松岡は、自村の温明尋常高等小学校へ赴任する。その年、温明事件（校長伴野文太郎の排斥運動）と出会う。今後の処し方について山形小学校の岡村千馬太校長に相談する。岡村宅で出会った言葉が「知時務持大節則師道立矣」（時務ヲ知リ大節ヲ持スレバ則チ師道立ツ）という犬養毅の書であった。松岡は、判断を迫られた折には、常にこの言葉を覚えると語っている。昭和三四年（一九五九）『信濃教育』第八六九号で「師道」と題して、この言葉の解釈を「時務を知るとはその時々、の務を知ることであり、大節を持つとは節を曲げず、是と信ずることはどこまでも貫き通すことである」と述べている。この犬養毅の軸は岡村家から当時の南安曇教育会に寄贈され、現在郷土文化財センターに展示されている。

「君子交わりを絶てども悪声を放たず」は、温明小から

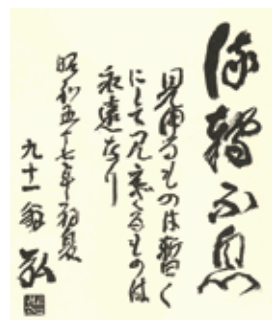
の異動が決まった時の岡村千馬太からの言葉である。外で伴野校長の悪口を言ってはならぬということである。誠にありがたく、今も脳裏に残っていると昭和五四年（一九七九）六月一六日「岡村千馬太先生像レリーフ除幕式記念講話」で語っている。大正十一年（一九二二）、岡村千馬太から手紙が届く。岡田忠彦長野県知事の教育改革により県視学を更迭され、熟慮の末辞表を提出するというのである。手紙には「かかる関係上、官命に背きたる廉を以て再び教育者として立つ能はざる運命に逢著致候とも、これは自ら招きたるの致す処、洵に止むを得ざる義と心得居候」とある。松岡は、この道を進むために誘惑や威圧に屈することなく貫き通し、大節を持った岡村の生き方に深い感銘を受けた。

大正二年（一九一三）洗礼を受けた松岡が研成義塾を始めて訪ねたのは大正四年である。研成義塾は、内村鑑三に感化された井口喜源治が



井口喜源治「備忘録」昭和3年

穂高にひらいた私塾である。昭和三年（一九二八）一二月二日義塾三〇年の記念会に松岡は出席する。井口の日記（備忘録）に「松岡氏は一人の力にて三十年継続するとは驚くべきことである云々」と記している。松岡は、毎週水曜日には井口が開いている祈禱会に参加し経典を学んでいる。松岡は求められて多くの言葉を書にしているが、聖書に依ったものも多い。『三郷文化』創刊に寄せて贈った色紙「見ゆるものは暫くにして見えざるものは永遠なり」は聖書コリント後書第四章一八節の言葉である。



色紙（松岡弘書）

自分が信じた道を貫く

松岡にとつての大節は、子どもへの教育愛であり、政治権力に対する教育の自主性を堅持することであった。

大正十三年（一九二四）、松本附属小学校で起きた川井訓導事件への『信濃教育』第四六一号（大正一四年二月）への寄稿で「教科書を使用せざりや否やにのみ重きを置きて、教育の最も基本であり、生命である教師対生徒との関係（略）考慮することに甚だ薄かりし観あることである」と述べ、教員を指導監督する立場にある者への強い憤りが

伝わる。

穂高尋常高等小学校長であった昭和五年（一九三〇）一月、関東連合教育会長野大会が開催される。他府県が市町村教育費の全額国庫負担を唱え、当面校長給の国庫支弁を主張したのに対して、信濃教育会は教育の中央統制や画一化につながるものであると唯一反対する。この時信濃教育会の代表に選ばれたのが松岡であった。

昭和二〇年（一九四五）、長野県地方視学官として、戦時下及び戦後の混乱期に的確な処理を行う。特に戦後は、進駐軍の指示を待つことなく人事の刷新を図り、一四二名の校長を退職させ、自身も辞表を提出する。

昭和二九年（一九五四）三月、信濃教育会副会長時代には、「義務教育諸学校における教育の中立の確保に関する法律案及び教育公務員特例法の一部を改正する法律案について」（教育二法について）第一九国会衆議院文部委員会公聴会に公述人として出席する。「今度の法案を出されたということは、行き過ぎがある、あるいは偏向教育があるからということであろうと存じます。（略）すでに現行法において教育者の政治活動を制限しております。基本法の第八条にもあります通り、中立維持もすることになっております。それにもかかわらずなお法律をつくり、あまつさへ刑罰をもって臨むといういようなことをしなくてもよい。」と立法化に対して反対の論陣を師道（正義）と教

育愛に基づいて堂々と述べた。

『長野県教育史』編さん

昭和四〇年（一九六五）、長野県学制百周年記念事業として『長野県教育史』刊行事業がスタートした。刊行会長に就任したのは、信濃教育会の会長となっていた松岡である。刊行会は長野県と民間の信濃教育会、信濃毎日新聞社、信越放送、八十二銀行で組織された。県と民間の共同事業としたのは、県民の教育史として実体史の編さんを目的としたからであった。副会長は、八十二銀行頭取黒川三郎（臼井吉見の松本中学校時代の同級生）である。当時編集委員長であった中村一雄は「編集事業の規模の拡大という困難な要求が実現されたのは、役員会と県当局の事業に対する理解と協力によるものであるが、刊行会の初めから終わりまで一貫して最高役員であった松岡弘会長と黒川三郎副会長の存在によるところが大きかった。松岡会長の精神的支柱、黒川副会長の経済的リーダーシップ、このコンビネーションが刊行事業を支える無言の推進力となったのである。」



『長野県教育史』全18巻（安曇野市教育会）

『信濃教育』第一一六三号昭和五八年一〇月」と記している。

『長野県教育史』刊行報告会は昭和五八年（一九八三）三月一二日に行われた。松岡の急逝は、三月八日である。最終巻の第三巻は、松岡の霊前に供された形となった。

残した言葉

松岡は戦前は教職にあり、戦後は教育会などの公職についている。この七二年間、常に長野県教育の表舞台にいた。公の場で話すことも多かった。多くの仲間慕われ、請われて書を残すことも多かった。松岡の息子である松岡昭三郎は「父のこと」と題して松岡の句のことを次のように記している。



「我道一以貫之」（郷土文化財センター）

『吾道一以貫之』『不易流行』『七転八起』『真実一路』『孤高』『一粒の麦、もし地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし』『見ゆるものは暫くにして、見えざるものは永遠なり』



「不易流行」（南安曇教育文化会館）

これらの句、聖句は、父の愛したものであります。これらの中に、父の生涯の考え、生きざまが込められていると信じます。」（平沢重人）

略歴

- ・明治二三（一八九〇） 二月一日、温村（現三郷）下長尾に長男として生まれる 父清作母もとゑ
- ・明治三七（一九〇四） 梓農業補習学校入学 小学校より同級の務台理作と通学
- ・明治四一（一九〇八） 長野県師範学校入学
- ・明治四四（一九一一） 師範学校四年生 後町小学校教務主任手塚縫蔵宅を訪問、聖書と出会う
- ・大正二（一九一三） 西筑摩郡三尾小学校訓導 福島町伝道所において洗礼を受ける
- ・大正一一（一九二二） 倭小学校校長
- ・大正一五（一九二六） 穂高小学校校長 水曜日の夜は井口喜源治の祈禱会、日曜日は松本教会の礼拝に参加
- ・昭和六（一九三一） 長野県視学 御真影盗難事件当面
- ・昭和八（一九三三） 長野県視学 二・四事件当面
- ・昭和九（一九三四） 小諸尋常高等小学校校長 梅花教育を進める
- ・昭和一四（一九三九） 九月一〇日から一〇月一〇日、長野県派遣満鮮教育視察団一員となる
- ・昭和二〇（一九四五） 三月三十一日、長野県地方視学官
- ・昭和二二（一九四六） 二月二十七日、退職
- ・昭和二三（一九四七） より亡くなるまで信濃教育会役員となる
- ・昭和三一（一九五五） より昭和五三（一九七八） 信濃教育会長
- ・昭和五〇（一九七五） より昭和五八（一九八三） 日本連合教育会長
- ・昭和五八（一九八三） 三月八日、逝去 享年九二

5 植原悦二郎

自由主義を貫いた憲法学者・政治家

明盛村（現三郷）中萱に生まれた植原悦二郎（以下植原）は、二二歳で渡米する。アメリカ、イギリスで政治学、哲学を学び憲法学者としての歩みを始める。三三歳で帰国、明治大学教授を務めるなど、教師としての生活を経て、大正六年三九歳で長野全県一区で衆議院議員として初当選、政治家として第一歩をしるす。以来当選回数は一三回を数え、三四年一〇カ月の在職であった。

渡米の道を選ぶ

明治二五年（一八九二）、植原は豊科村他四ヶ村組合高等小学校を卒業する。農業を手伝ったり、諏訪龍上館製糸工場や横浜税関に勤務したりした後、明治三二年（一八九九）一二月渡米を果たす。

後年、植原は『八十路の憶出』（昭和三八）年 植原悦二郎回顧録刊



ワシントン大学時代

行会）に少年時代の回顧を七頁に渡って記しているが、渡米の目的については記されていない。植原家は、かつて庄屋を務めるなど堀をめぐらした邸宅であるが、祖父が明治期に興した事業で失敗し、経済的に厳しい状況であった。植原の妹降幡うめは、「兄は、日本は貧乏だが、アメリカには金がある。どうしてもアメリカに行かなければいけない。と仕事の合間に家人によく話していたようである」と記している（「広報みさと」第五九号）。経済的に豊かになりたという大志や、上級学校への進学がかなわなかった植原の向学心が引き起こした渡米ではなかったかと推察される。

立憲政治に精通

ワシントン大学において政治学、哲学を学んだ後、渡英しロンドン大学で政治学博士号（博士論文「日本の政治発展史」）を取得する。政治学研究のためにイギリス国会を傍聴し、後に首相となったジョージヤチャーチルの演説を直接聞く機会を得た。そして「日本国民を英国国民のように政治的に教育し、英国の政治家のように日本の代議士を訓

練せしめたい。日本の青年をして議会政治の神髄をしらしめ、英国のような議会政治を実現する素質を得たい」（『八十路の憶出』）と考え、帰国を決意する。

帰国後、明治大学教授となった植原は、憲法の解釈や政党政治の在り方について多くの論文を執筆する。郷里の地方雑誌『信濃不二』第一七八号（大正一四年一月）に「徹底せる主義主張」と題して立憲政治について、「立憲政治の下に於いて、普通選挙が行わるる様になれば、少数の利福を計るものか、民衆の生活を基調として考慮するものか、其の何れにしても徹底せる主義主張でなければ立憲国の選挙の勝敗は期し得られぬ」と記している。

他にも「憲法の解釈法」「憲法と政治の実情」「今議会の漫評」など一一本を寄稿している。安曇野市文書館に於いてすべて閲覧できる。



『信濃不二』第26号（大正3年1月）

犬養毅に推され政治家へ

「宏順院法毅日悦居士」は植原の戒名である。植原は妻照子が大正八年（一九一九）に流行のスペイン風邪で亡くなると、妻の戒名に並べてこれを墓碑裏面に刻んだ。戒名に毅を入れていることから犬養毅を強く意識していたことを知ることができる。犬養から「教壇から青年学徒に呼びかけ、正しい議会政治の根を日本におろそうとする努力も大切だし、それもよい方法であるが、それよりも現在、日本の多数の国民は投票権を持ちながら、これを正しく使用することを知らない。それゆえに教壇で、学生を教育するよりは、直接街頭に立つて国民に働きかけ、実際の政治と取り組むことが、議会政治完成の捷徑（しやうけい）ではなからうか。」と出馬を勧められ、選挙戦を争うことになる。

大正八年、植原にとって第二回目の選挙で当選を果たした理由について、『信濃不二』第二十一号（大正九年一月）には、こう記されている。

「固（もと）より彼は人材である。世界的知識を有する学者である。精力家である。国士である。青年政治家である。普選の闘士である。前代議士である。明大教授である。弁舌が上手である。第八区に於いて彼は之という地盤はない。国民党员は一人もない。金はない。参謀運動員に政友会の夫れの如く適任者がいない。実に拾い集めた烏合の衆と

言っても悪口じゃあない。時の天下に対して反対党である。常に郷里から遠ざかっているから真の水火も辞さないと言う友人も少ない。どうして打ち勝ったか。彼が一回二時間ないし三時間の講演を一日一回ないし多きは四回、南北安曇の各村に六一回の咽喉^{いんとう}から血を吐いての演説は確かに力があつたことを信ずる。」

昭和七年（一九三二）の五・一五事件で犬養を失った植原は、昭和三年（一九三八）、近衛内閣の「国家総動員法」に反対する。近衛の秘書から「先生（植原）、国家総動員法で、公爵をいじめられるのですか」と問われた植原は、「もう大勢はすでに決まった。これ以上、いくら反対しても結論は同じであるから、私はもうあきらめた」と伝える。これで議会政治は終わったように思うと、植原は当時のことを追慕する。

昭和七年（一九三二）、衆議院議員副議長となるも戦時中は東条英機に反抗、大政翼賛会に参加しないなど反骨精



日本国憲法制定承認署名（国立公文書館）

神の塊でもある植原は、昭和十七年（一九四二）、第二一回衆議院選挙で落選する。

しかし昭和二十一年（一九四六）、第二二回衆議院選挙で返り咲くと、吉田内閣では国務大臣に任命され、日本国憲法制定承認署名に名を連ねることとなった。

郷里からの信頼

郷里との関わりについていくつか紹介する。

北穂高出身のジャーナリスト清沢洌の「戦争日記」（『暗黒日記』）に植原の名が数箇所登場する。結婚に際して媒酌をとめるなど公私にわたって親交が深かった。

・昭和二〇年（一九四五）三月六日（火）昨夜、植原悦二郎が話したいとのことにて、正午、山王ホテルで会見す。同氏の話によれば、同氏は、戦争終了について重臣方面に話しをしている。若槻（礼次郎）とも逢い、岡田啓介とも会談。幣原（喜重郎）とも逢ったが、（略）植原氏は、無条件降伏それ自身恐ろしくはないではないか。その上で当方から条件を出すこともできるのだといった。植原氏は、やはり愛国者である。

また、ニューヨークを拠点に活躍している草間彌生であるが、渡米の労をとったのは、植原である。『無限の網』（二〇〇二年）に草間本人が、「いよいよ渡米の意思を固め



「広報みさと」第58追悼号（昭和38年1月）

たのだが、現実にはアメリカでの身元引受人を見つけなければならぬ。でもそれが容易ではない。そこで窮余の一策として、家が前国務大臣および内務大臣だった植原悦二郎氏の親類だったので、彼の懇意にしている女性を紹介してもらえることになった。彼女は、アメリカでの私の身元引受人となってくれた」と記している。

平成四年（一九九二）五月二三日、「植原悦二郎先生顕彰の会」が三郷村公民館で開催された。以前東京青山の植原自宅に置かれていた小川大系作植原悦二郎胸像が披露された。これは現在、貞享義民記念館一階に展示されている。

植原の村民葬は、三郷中学校講堂において行われた。会葬者の中に、本郷高等学校（現松本第一高校）職員及び生徒保護者等二五〇名がいた。当校は昭和三二年（一九五七）、植原が信濃高等外語学院として私財を注いで開校さ

せた学校であった。

（平沢重人）

略歴

- ・明治一〇（一八七七）五月一日、明盛村中萱に植原繁太郎、つじの二男として生まれる
- ・明治二八（一八九五）諏訪龍上館製糸工場勤務
- ・明治三一（一八九八）大蔵省税関官吏補試験合格 横浜税関に就職
- ・明治三二（一八九九）渡米 レटना小学校、セントラル中学校、ブロードウエー中学校で学ぶ
- ・明治三七（一九〇四）ワシントン州立大学入学
- ・明治四〇（一九〇七）ワシントン州立大学卒業 渡英 ロンドン大学研究科入学
- ・明治四三（一九一〇）帰国
- ・明治四五（一九一二）明治大学教授、蔵前高等工業学校講師
- ・大正六（一九一七）衆議院議員初当選 以来当選一三回、在職三四年一〇カ月
- ・昭和七（一九三二）衆議院副議長
- ・昭和一二（一九四六）国務大臣
- ・昭和一二（一九四七）内務大臣
- ・昭和三一（一九五六）二月二五日、イギリス上下両院議長しょうあいの鍾愛を受け衆参両院議員団团长として渡英 ドイツ、スイス、フランス、アメリカを歴訪
- ・昭和三一（一九五六）二月一二日、国際連合第一回総会の日 本政府代表顧問
- ・昭和三七（一九六二）九月一日、関東通信病院入院
- ・昭和三七（一九六二）二月二日、逝去 享年八五
- ・昭和三七（一九六二）二月七日、自由民主党葬
- ・昭和三八（一九六三）一月一三日、三郷村にて村民葬

6 務台理作

平和と幸福を追求した哲学者

「私は人生において平和と幸福より大切なものはないと信じている。両者は排他的でなく開放的であり、一元的であるよりも多元的なものである。この平和と幸福を持続させ豊かなものにするには、人間の尊厳を土台として、国民生活の民主化が十分に行われなくてはならない。国民政治の民主化をおびやかすものがあれば、それは民族の敵であり、幸福の敵である。この点でも、ヒューマニズムは戦うヒューマニズムとなるべきであろう。」

明治二三年（一八九〇）八月八日、温村（現三郷温）野沢に生まれた哲学者務台理作（以下務台）が、七三歳の時に『毎日新聞』に寄稿した「哲学十話」の一説である。昭和二十一年（一九四六）、教育刷新委員に就任し、翌年三月



東京高等師範学校時代 21歳

三十一日に施行された「教育基本法」が成立した。その理念は、「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育

成」である。哲学者として務台が求めてきたヒューマニズムの考え方（客観的幸福を探索する第三ヒューマニズム）そのものである。

哲学との出会い

「なぜ哲学の道を選んだのか」について、務台は『哲学十話』に次の二点を記している。

・ どうしてか、私の身边には自殺者が多かった。ほんとうの原因が何であつたか、もちろん少年の私にはわからなかったが、そんな経験がいつか人間の生死について深いおそれと不安とを自分の心に植えつけたらしい

・ 彼（第一高校生藤村操）が日光華嚴の滝に投身直前、そばの立ち木を削って筆で描いたという遺書（がんとうのかん 巖頭之感）を読んで、彼をその自殺にまで追いやったという哲学の問題とは、いったいどういうものかという強い好奇心が起ったことをおぼえている

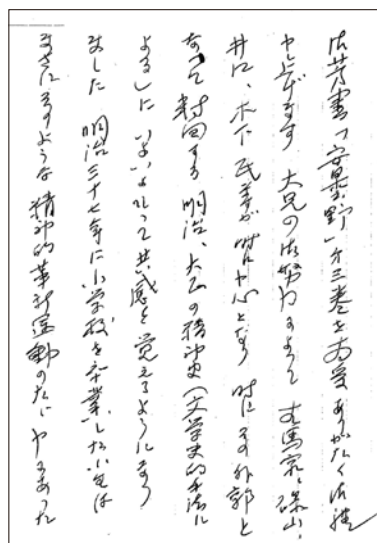
同郷の仲間

務台は、二〇歳で東京高等師範学校に入学する。以降、地元で生活することはない。しかし長尾尋常小学校、農業補習学校と同学年の松岡弘（一一八頁）、とは生涯にわたって親交を深めた。

・松岡弘宛（昭和三九年七月六日、七四歳）

貴研究所が読売教育賞に与^{あず}かることになりました。心よりお慶び申し上げます。同研究所の生みの親である大兄のいままでの御苦心のほどもさることながら、御慶びも大きいことと拝察いたします。全国の地方教育研究所の中でも貴教育会は、特殊の性格があり、それが歴代の所長の努力によつて受賞の実を結ぶことになったと、私もよろこびに堪えないしだいです。

また、一五歳年少であるが、同郷の臼井吉見との交わりも大切にしている。臼井が『安曇野』第三巻発刊に際しての手紙では、「大兄の御努力に



臼井への手紙（昭和47年5月82歳）

よつて相馬家、碌山、井口、木下氏等が時に中心となり時にその外部となつて対向する明治、大正の精神史（文学史的手法による）にいよいよもつて共感を覚えるようになりました。明治三十七年に小学校を卒業した小生はまさにそのような精神的革新運動のただ中であつた」と記している。

西田哲学との出会い、そして対峙

大正三年（一九一四）四月、長野師範学校に着任した務台は、三人の同僚（長坂利郎、菅沼知至、岩下一徳）と『善の研究』（西田幾多郎）を愛読する。西田哲学に強い感銘を受けた務台は、翌年七月長野師範学校を辞し、九月京都帝国大学文科哲学科に入学する。一二月、温明尋常高等小学校での同僚であり、大学生活で経済的に支援を続けた鳥羽佐一宛に「学科で一番面白いのは矢張り西田先生の哲学であります。普通講義では認識論を、特別講義（専攻）の方はフツセルの哲学をやっています。西田先生は、接するほどに学識の深いのに驚く。何といつても人格の人、自ら苦しみながら自ら哲学を持つている人」と記している。西田先生との出会いに感激している様子が伝わる。

務台が追求したヒューマニズムの理念は「主體的な個性」である。その根底に流れるのは、西田幾多郎の「個の

確立と人間の尊厳について追求した個の哲学」である。

昭和三八年（一九六三）『講座哲学体系Ⅰ』『歴史と実存』の中で、「歴史的問題を自分に受け止め問題の中に含まれている革命的要素（最も広い意味での）をとらえ、その実現に向かつていく実践である。このような革命的実践こそ歴史とのつながりにおけるほんとうの実践の意味である。（略）西田哲学に不足していたのはこの意味の実践のとらえ方ではなかったか」と述べている。そして「この試みが従来の西田門下に不足していた。むしろそれをさし向けることこそ深い教えをいただいた私たちがわが師にたいする貴重なつとめであると私は信じている」と結んでいる。西田幾多郎の没後、昭和二六年（一九五一）発刊の『第二ヒューマニズムと平和』は務台の西田幾多郎への対峙ではなく、恩返しであった。

郷里への愛

二〇歳で郷里を離れた務台であったが、昭和四三年（一九六八）一〇月、南安曇教育会創立八〇周年記念講演会において「私の言う第三ヒューマニズムは大地性を基盤とする。これは、私が信州の自然的大地性とのつながりを持っていることと深く関係している思想と信じている」と語っている。前年の昭和四二年、郷里の短歌雑誌『露草』六月

号に「焼野ヶ原」の歌を発表している。終末の言葉を紹介する。

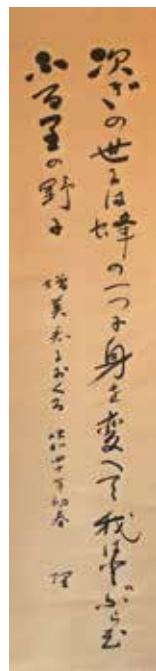
野薄のすがれよ、呼びかわす頬白よ

時たま迷い込んでくる寂しい河原ひわよ

明日は 俺は遠くへ行く

みんなを二度と忘れないために

昭和四〇年（一九六五）一月、甥の務台増美にすがれの歌を揮毫する。すがれ追いに興じた少年時代が自らの精神の原点であることを多くの場で記している。



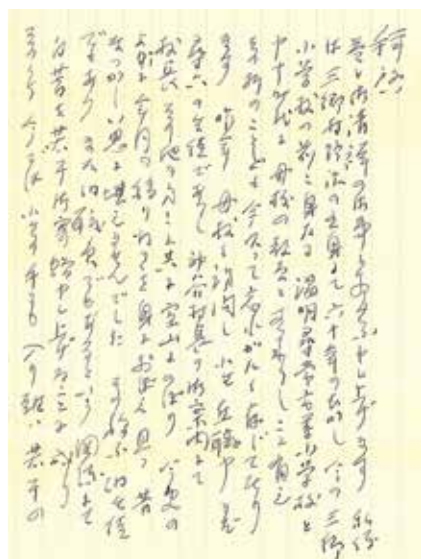
すがれの歌

務台は、明治四〇年（一九〇七）九月から明治四二年（一九〇九）三月まで三郷小学校の前身である温明尋常高等小学校に勤務していた。昭和四四年（一九六九）六月に著書寄贈の手紙を倉田利久三郷小学校長に送っている。

・拝啓 益々御清祥の御事に拝察申し上げます。私儀は、三郷村野沢の出身にて、六十年のむかし、今の三郷小学校の前々身たる温明尋常高等小学校と申す時代に、母校の教員と相成りしこと有之、^{これあり}その折のことども今以つて忘れがたく存じて居ります。昨年母校を訪問し、小生在職中まだ尋六でありし神谷村長の御案内にて、校長その

他の方々
と共に室
山のぼ
り、今更
のように
年月の移
り行きを
身におぼ
え、且つ

昔なつかしい思いに堪えませんでした。(略)



著書寄贈の手紙 (昭和 44 年)

人類の平和と幸福への思い

務台は一四歳の頃、甲辰日記九月五日に「嗚呼戦争よ、命を争う、乃ち戦之程悲惨なる事又と此世になからんや。死より甚だしき酸鼻の事はあらんや。予は其勝利を聞く時も、裏面における幾多の軍人がいけにえとなりつつあるを思うに忍びざるなり。」と記しているように、少年時代から平和の問題を考え続けている。昭和三十三年（一九五八）、諏訪哲学会三〇周年講演会において、核兵器使用における人類の運命を語る。昭和三四年（一九五九）、「安保問題研究会」を発足させ、世話人となるなど、人類の平和と幸福を追求し続けた生涯であった。

(平沢重人)

略歴

- ・明治二三（一八九〇） 八月八日、温村（現三郷）野沢で務台佐一郎、りとの二男として生まれる
- ・明治三七（二〇〇四） 農業補習学校入学 同学年に松岡弘
- ・明治四〇（一九〇七） 東筑摩郡和田尋常高等小学校代用教員 校長岡村千馬太
- ・明治四〇（一九〇七） 九月、明盛組合高等小学校（翌年温明尋常高等小学校と改名）に転任
- ・明治四三（一九一〇） 東京高等師範学校国漢科入学
- ・大正三（一九一四） 長野師範学校勤務
- ・大正四（一九一五） 九月、京都帝国大学文学部哲学科入学 西田幾多郎の指導を受ける
- ・大正七（一九一八） 京都帝国大学卒業
- ・大正一一（一九二二） 第三高等学校講師として勤務
- ・大正一二（一九二三） 大谷大学哲学科教授
- ・大正一五（一九二六） ヨーロッパ留学 フツサルから現象学を学ぶ
- ・昭和三（一九二八） 帰国 台北帝国大学文政学部教授
- ・昭和一一（一九三五） 東京文理科大学教授
- ・昭和二〇（一九四五） 東京文理科大学学長
- ・昭和二二（一九四六） 教育刷新委員会委員となり戦後の教育改革を推進
- ・昭和二六（一九五一） 慶應義塾大学文学部教授
- ・昭和三七（一九六二） 高校全入協会会長
- ・昭和四七（一九七二） 脳出血で入院
- ・昭和四九（一九七四） 七月五日、逝去 享年八三

7 三郷の芸術家たち

温明美術会

明治維新以降、江戸時代の狩野派、文人画の勢力が弱まり、西洋文化の流入が日本の芸術文化にさまざまな変化をもたらした。ウィーン万博に続くように万国博覧会が開かれ、内国勸業博覧会、文部省美術展覧会と続き「展覧会」や「美術団体」の形が生まれた。大正、昭和にかけてそれは加速し、さらに中央から地方へと徐々に美術運動が伝播した。この大きなうねりのなか、三郷ではどのような動きがあったのだろうか。

昭和三年（一九二八）と四年、温明尋常高等小学校で



温明美術会 趣意書
(安曇野市文書館蔵)

は、「温明美術会」展が開かれた。昭和の御大典を記念した展覧会である。会の顧問には、日本画家の野本文雄が就いたほか、降旗篁岳、野本萱斎、加藤華汀、画家で篆刻家の務台亮堂など、三郷の芸術家たちが名を連ねた。現存する展覧会記録には次のように趣意が書かれている。

今秋行ハセラル、御大典ヲ奉祝紀念セン為茲ニ温明美術会ヲ組織シ併テ美術展覧会ヲ開キ我温明ノ美術思想ノ向上ヲ図ラントス

乞フ村内ノ有志諸君斯界發展ノ為ノ發起人トシテ御入会アラシム事ヲ請フ

地元の芸術家やコレクターに呼びかけ、村内の有志に資金を募って、約四〇〇点という作品が集まったとされている。作品展のみならず作品の売買も行われた記録がある。個人でコレクションした掛け軸や屏風を互いに紹介しながら、村を挙げて芸術家たちを応援するという意識の高さがうかがえる。中央の展覧会や博覧会などが活発になるに従い、地方でも芸術家たちが活動し、周囲が支援するという動きがあったことがわかる。

温明美術会 趣意書
(安曇野市文書館蔵)

続いて大正・昭和期に、三郷の日本画の発展に寄与し、中信美術会に影響を与えた芸術家を紹介したい。

野本文雄（明治一七―昭和三三）

野本文雄は明治一七年（一八八四）、楡に生まれた。長野師範学校を卒業後に松本の田町小学校で教鞭をとる。大正元年（一九一二）、二八歳で画家を志して上京。花鳥画や山水画で知られた日本画家・川端玉章^{ぎくましよう}率いる川端画学校に入った。自然主義を標榜した玉章門下の結城素明^{むすけ}らの影響を受けている。大正九年（一九二〇）、第二回帝展に初入選し、昭和五年（一九三〇）までに五回の入選を重ねている。上京時、同宿であった島木赤彦との交流により、歌人としても活躍した。のちに三郷で「大原会」「勢せ

ぎ」などの歌会を主宰した。昭和三年（一九二八）には東京にいながらにして「温明美術会」に参加している。昭和九年（一九四四）、三郷に疎開。当時の農業会楡支庫付近に居を構え、周囲の人々の支援で作品頒布会を開くなど、作家活動を継続した。昭和二年（一九四六）、安曇野・松本の日本画家たちを募って「銀嶺会」を発足。また全信州美術展に参加し、長野県展、中信美術会の審査員を務め地元の活動に尽力した。昭和三年（一九五八）死去。野本の死去により歌会の活動は衰退した。

《早春》は、野本の最も好んだとされる題材だ。残雪の常念岳と水車のある民家は、もやと立木によって絶妙な距離感をもって表されている。《夏景山水画》は、緑を基調とした濃淡と、軽快なタッチが優しい印象を与え、遠景、中景、近景が重なり合い漂う「空気」を感じさせる。この



野本文雄《早春》（制作年不詳・個人蔵）

頃、川端門下では、伝統的な「山水画」の様式から、見えているものそのものを描き出す「自然主義派」様式へと重きを移しつつあった。しかし野本は伝統を重んじた画風を好み、帰郷後もそれを貫いたことがうかがえる。また、晩年は月をテーマとした作品を発表している。墨のにじみを活かした、柔らかな風景画である。地の色で月の明るさを強調した陰影表現は秀逸である。余白を持たず、画面の隅々まで雑木林を盛り込んでおり、軸物の表現から飛躍し、額絵として成立させた作品といえよう。同テーマで長野県展にも出品した。

野本は明治以降の日本画の混乱期において、中央で学んだのちも独自の表現を生涯貫いた。また戦後復興の機運もあいまって、若手の芸術家の指導的立場に立ち、日本画家、歌人として活動を牽引した。戦前戦後の橋渡し役となり、現代に至るまでの三郷の芸術活動の基盤を作ったと



野本文雄《夏景山水画》（制作年不詳・個人蔵）

言っても過言ではない。

日比野霞径

大正四年（一九一五）、楡に七人兄弟の長男として生まれた。本名は允夫^{のぶお}という。絵の才能を認められ、一九歳の時に母方の親戚を頼って日本画家・川船水棹^{すいと}宅に書生として入り、小堀鞆音^{とも}主宰の小堀塾に入塾した。昭和一五年



野本文雄《月光》（制作年不詳・個人蔵）

(一九四〇)に第二回日本画院展に《惜秋》が入選。翌年、松本へ転居、斎藤マサと結婚している。昭和一八年(一九四三)、松本高等女学校(現蟻ヶ崎高校)の教師となり、教職の傍ら制作活動に励んだ。のちに塩尻の丘中学校、豊科高等学校、大町南高等学校、穂高商業高等学校で教鞭をとる。草間彌生ほか、多くの芸術家を輩出し、生徒たちがたえず日比野家に通ってきっていたという。昭和二〇年(一九四五)、戦後すぐに始まった第一回全信州美術展に参加し、野本らと銀嶺会を立ち上げた。戦後も中央へ戻ることはなく、長野県展、中信美術展など地元を発表の場とした。昭和三〇年(一九五五)には、自宅にアトリエを持つことを目的に頒布会を開き、土蔵の二階に制作場を設



日比野霞径《惜秋》絵ハガキ(昭和15年)



日比野霞径《小春日》(昭和20年・個人蔵)



日比野霞径《夕》(昭和33年・個人蔵)

けた。しかし、多忙な日々のなか「絵を描く時間がない」と嘆いていたという。

中央の団体には属さず、師・川船の歴史画ともまた異なる画風を確立し、多彩なテーマを描いた。人物作品は、柔らかながらも確かに引かれた線と、色彩の豊かさが見て取れる。《夕》は、日比野が四三歳の頃の作品。モデルをデフォルメしながらも表情やポーズを的確にとらえている。重心をしっかりと置くことで画面に安定感を与え、体は右へ、顔はやや左を向かせて左右に若干の動きを出している。また花や鳥も好んで描いた。色彩やものの形態を観察

し、咀嚼^{そしゃく}した柔らかな筆致の表現である。これらは小堀門下の安田鞞彦^{やすだ けんげん}や小林古径^{こけい}が、大和絵のおおらかで明るく色彩豊かな画風を重んじながら、洗練された高雅な画風を試みた「新古典主義」の影響と無関係ではないだろう。地方にあっても新しい日本画のあり方を常に追究していた画家の姿がある。

晩年は、住吉神社拝殿の天井画（龍の図）を制作した。京都の寺社仏閣に取材に行くなど準備を入念に行い、自宅に檜の鏡板を敷き詰めて制作、昭和六二年（一九八七）奉納した。平成十一年（一九九九）、死去。翌々年、多くの教え子により「日比野霞径遺作とその教え子展」が豊科近代美術館で開かれた。



日比野霞径《雪に飛ぶ》（昭和 37 年・個人蔵）



日比野霞径《朝》（昭和 23 年・個人蔵）



日比野霞径《おたふく坊や》（昭和 32 年頃・個人蔵）

小島貞観

大正一二年（一九二二）上長尾に生まれた。本名貞夫。多摩美術大学日本画科を卒業し、堀金中学校に勤務した。野本、日比野らとともに銀嶺会で活動した。日展に入選するなど、活躍が期待されたが、昭和二六年（一九五一）病のため若くして亡くなった。

銀嶺会

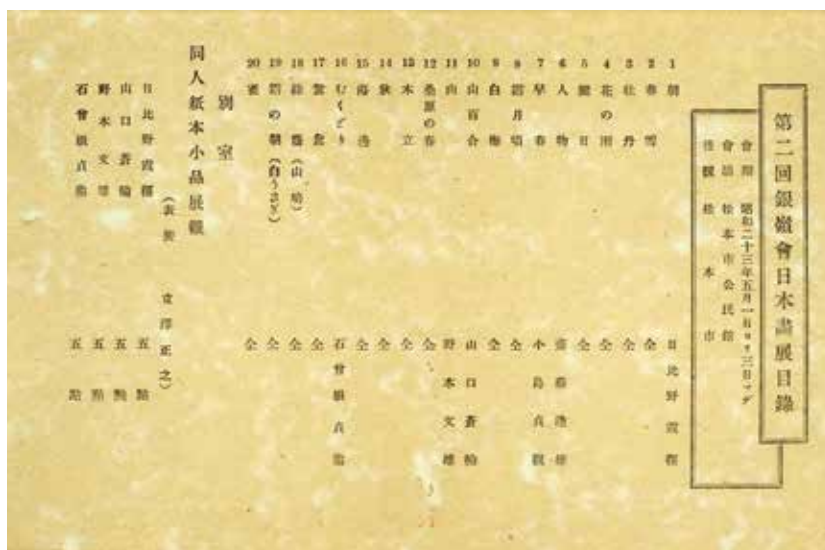
昭和二十二年（一九四六）、野本を筆頭に立ち上がった「銀嶺会」は、地元の若手日本画家の先駆けのグループである。当時「農業会楡支庫」にあった菜種油の搾油工場の空き事務室が活動場として提供された。管理者や農業会文化部の支えが大きかった。日比野霞径（三郷）、小島貞観（同）、山口蒼輪（堀金）、石曽根貞亀（松本）、齋藤達雄（梓川）が集まり、お互い頻繁に手紙で連絡を取り合いながら勉強会を開き、結束を強めた。銀嶺会展は松本を拠点に、昭和二十二年（一九四七）から三回開かれた。昭和二十五年（一九五〇）、蒼輪、翌年に貞観が相次いで死去し、活動は幕を閉じた。

戦中に帰郷を強いられ中央を強く意識した彼らは地元での美術活動に専念することで、自らの基盤を固めようとした。同志が集まったこの会の存在はその後の活動の原動力になったことは間違いない。こうした活動から、この時代にあつて、三郷の人々の芸術活動への深い理解、文化的意識の高さが見えてくるのである。

（塩原理絵子）



農業会楡支庫からの封筒
（個人蔵）



第二回銀嶺会 展示目録（個人蔵）

松本～大町間の鉄道敷設計画

松本～大町間の鉄道敷設運動を始めた、松本市長小里頼永は、明治四三年（二九一〇）に、貴族院議員の男爵、若王子文健^{にやくおうじあやむけ}を筆頭に中央政財界の有力者を発起人にたて、信濃鉄道免許申請書を提出した。そして翌年に認可を受ける。

当初の認可ルートは、江戸時代の交通の大動脈、松本～成相新田町～穂高町～池田町～大町を結ぶ千国街道とほぼ重なる。当時の鉄道敷設は、主要幹線が国（鉄道省）、間を結ぶ路線は私鉄という棲み分けがあった。国は多くの路線が実現できるように私鉄に補助金を出した。全国的に鉄道建設ブームとなり、江戸時代の旧主要街道を、鉄道で結べば儲かるという打算から、素



信濃鉄道線路平面図の一部（大正元年） 長野県立歴史館蔵
信濃鉄道株式会社が総理大臣宛に提出した『路線変更書』に添付された図面。
白線で申請、朱線で変更の路線が入る。当初の駅は「梓橋」「立石」「豊科」、
変更申請（赤線）では路線が大きく西へ弧を描き、「梓橋」「明盛」（一日市場
ではない）、「中萱」、「豊科」に変わっている

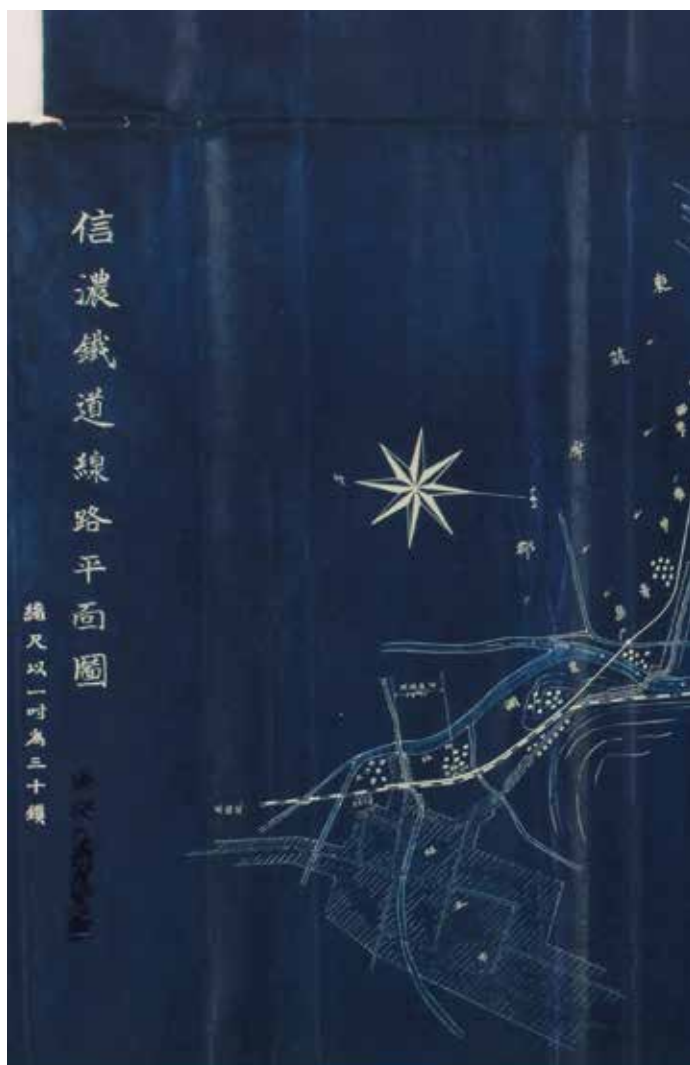
人の路線計画が、雨後のタケノコのように数多く国に申請され、認可された時代であった。

鉄道会社発足と路線変更

認可されると、発起人に新たに地元
の賛同者、さらに鉄道建設に精通する
者を加え、信濃鉄道株式会社が大正元
年（一九一二）に設立された。社長は
才賀藤吉、大阪で才賀電機商會を經營
し、全国で数多くの電燈会社並びに鉄
道会社の事業化支援や經營に参画して
電氣王と称された人物である。社長に就くと、さっそく事
業を精査して建設ルートを見直し、その年のうちに、路線
の変更申請を国に提出した。

変更点は二つ。一つは、元の計画で通っていた池田町を
通らず、松川を通り大町へ向かうルートへの変更である。
これは大町市社地区の地形が、高瀬川に山がせり出し平坦
地がなく、工事に莫大な費用がかかるという理由である。
そしてもう一つのルート変更は、高家村から豊科村間で
あった。

当初の申請書では、通過する村を「高家村梓橋、真々



部、立石、豊科村字鳥羽」と記している。糸魚川街道に沿
うルートである。変更申請では「高家村、明盛村、豊科
村」となっている。糸魚川道をまっすぐ通らず迂回する、
一日市場駅、中萱駅を通る現行の大糸線ルートへの変更で
ある。民家が多くの優良な農地を通過するため、用地買収費
が高くなることを変更の理由に挙げている。ただ、一日市
場駅、中萱駅周辺も、人家や優良農地が多い。加えて路線
の距離が長くなり、当然用地買収費や工事費が高くなるは
ずであり、理屈に合っていない。

路線の変更申請当時の信濃鉄道株式会社の経営陣は、社

長の才賀藤吉ほか、四名が才賀の関係者、残り二名が地元出身者である。一人が松本市白板の折井政之丞、そしてもう一人が明盛村の百瀬亥三松であった。彼の力こそが、明盛村（現三郷村）へ路線を変更し、一日市場駅と中萱駅をつくることに大きな役割を果たしたのである。

百瀬亥三松の開通への貢献

路線変更認可の直後の大正元年一〇月、才賀藤吉経営の会社が資金繰りに窮して経営破綻してしまう。その資金力と技術力を当てにしていた信濃鉄道株式会社は、経営危機に陥り、本社事務所の移転や職員の解雇など混乱がおきる。才賀をはじめその関係の役員が退任し、事務一切を百



百瀬亥三松

文久3年(1863)―大正12年(1923)―
一日市場村に生まれる。明治32年(1899)
に明盛村長、明治36年(1903)県会議
員。梓橋銀行頭取・安曇電気株式会社の取
締役等。中房温泉を経営する傍ら、登山
道、山小屋の整備を進め、広く日本アルプ
ス観光を推進した(中房温泉の絵葉書より)

瀬亥三松、折井政之丞が引き継ぐこととなった。

大正二年(一九一三)一〇月三〇日、新たな経営体制を決める株主総会が開催された。百瀬亥三松が会長席に着く。議事録に「当会社ハ、^{いよいよ}地方問題トシ地方人ニ依リテ経営セラルル様ニナリマシタカラ從テ地方ニ於テ多クノ役員ヲ必要ト致シマス結果此ノ案ヲ提出致シマシタ次第デ御座イマス」と、地元の力で安曇野の鉄道事業の継続を、悲痛な声で呼びかけたことが記されている。しかし出席株主、委任状が定数に満たず、流会になってしまった。一月一日に再び株主総会が開催されやっと承認された。

社長に担ぎ出されたのは、日本を代表する製糸業者、片倉組の重鎮、松本商工会議所初代会頭の今井五介であった。次に、問題となったのが才賀藤吉が手放す株の引き受け手であった。募集当初は、なかなか集まらない。経営陣は広告に、万一引き受け手がいなかった場合は、この地方は交通機関を失い将来の経済発展が難しくなると記し、危機感をあおって株式募集に力を入れる。その結果、直接鉄道が通らない町村を含め、南北安曇郡の有力者が株主に名を連ねることになった。ここに信濃鉄道が、安曇野の重要な公共インフラとしてやっと位置づけられたのである。

困難な工事、そして開通

大正二年に北松本駅で地鎮祭、起工式を行い工事に着手をした。費用面では、国、県、郡、市町村の多額の補助金を受け、なんとか手当ができた。路線は全長三五里ほどとそれほど長くはない。しかし、奈良井川、梓川、穂高川、高瀬川という大河川があり、その架橋工事は大変であった。予定した建設経費も少なく請負業者も決まらなかった。ついには今井五介が陣頭に立って、片倉組の上野新十を技師として起用し、さらに多くの人夫まで動員して工事に当たることとなった。ところが難工事で、期間に間に合わすべく、工法を見直すとともに、文字どおり昼夜兼行で工事を進めた。河原は強い風が吹き砂塵が舞い、人夫たちは弁当に降り注いだ砂を湯で沈ませながら食べたという。

大正四年（一九一五）一月五日に北松本駅―豊科駅間が開通し、翌日開通式、そして営業が始まった。当日は芸者を乗せた無蓋列車が走り、沿線に集まった人々にはミカンや餅が投げられたという。その後、七月一五日穂高駅、翌年七月五日に大町駅まで開通した。最初は蒸気機関車が走っており、大正五年（一九一六）の一日市場駅―松本駅間の所要時間は約三〇分であった。大正一四年（一九二五）には全線電化され、現在の所要時間は一五分である。

開通当初は、当時の好景気もあって輸送量も多く、業績



一日市場駅開業 20 周年祝賀（昭和 10 年（1935））

は好調であった。ところが昭和に入ると、大恐慌もあり収入が大きく減少し、好調時の半分程度になってしまった。料金引き上げや砂利や石材の販売などに力を入れたが、業績は芳しくなかった。

大町以北は、鉄道省が工事を進めていた。日中戦争が激しくなる昭和一〇年頃になると、日本海と太平洋を結ぶ、軍事上重要な路線ということになった。信濃鉄道の松本駅―大町駅間は、昭和一二年（一九三七）六月一日に鉄道省に買収され大糸線となった。

なお、昭和三年（一九五七）に中土駅（小谷村）―小滝駅（糸魚川市）間が開通し大糸線が全通することになる。これにより古くから利用されてきた「塩の道」は、鉄路でつながることとなったのである。

（原明芳）

資源の宝庫
「御林」

今から一〇〇年余り前、三郷地区の西側には小倉官林と呼ばれる国有林が存在していた。この小倉官林は江戸時代は小倉御林と呼ばれ、松本藩の赤松林であった。現代の暮らしては想像できないほど明治時代以前の人々の生活には山林資源が欠かせない。御林は、松本藩の資材供給地として城を増築したり、役所を建てたりするための用材を確保する保護林であった。人々の生活にも山林資源は欠かせない。家を建てるための用材や、火を起こすための薪や小柴、飼育していた馬や牛の餌になる下草、農地の肥料になる落ち葉、食べ物としてのキノコを山林に頼っていた。山林資源は樹木の成長や季節の移り変わりにより採取量や採取時期が限定される。江戸時代にはこうした資源を確保するために、各所で争いが起こっていた。小倉御林も松本藩の許可を得ながら、周辺の村々が資源の採取を行う貴重な山林として、長く利用された場所であった。

御林を利用したのは、現在の三郷地区と堀金地区の村々である。藩から許可を得るため厳しい取り決めに定め

ていた。弘化四年（一九四七）に書かれた「小倉御林岡家（太田屋）文書一四二」には、「山廻り」という分担を決めて見回りをすることや、定められた採取日以外に資源を採っている者がいた場合は、本人だけでなく家族や親類も含めて罰則対象となり、正規の採取日に参加できないとしている。

明治時代となり、松本藩の御林は国有林「小倉官林」となった。江戸幕府から明治政府へと政治の体制は大きく変化したが、人々の生活状況は即座に変わらない。依然として山林の資



小倉御林御締方入会取定之事

源を必要としていた。しかし、政治体制の変化は周辺の人々と小倉官林との関係に変化をもたらした。江戸時代は石高制を基本として、毎年の米の収穫高から年貢を納めていた。また、夫役として街道へ人足を派遣する労働力の提供などがあった。明治時代には、こうした物納や課役がなくなり、税金は金納となった。今まで、御林を管理するという労働力の提供により、資源の採取が認められていた人々には、採取量に応じた金銭を国に支払う義務が課された。明治九年（一八七六）に落ち葉代として金一〇円が課せられて以来、年を追うごとに金額は増えていった。

一方で、江戸時代に幕府や藩が管理していた山林を全て国有林とした明治政府も、その維持管理に苦慮していた。明治二四年（一八九一）には、「官林森林原野及産物特別処分規則」を出している。その中には、「農商



小倉官林保護規約

務大臣は森林の保護のため必要と認めるときは制限を付し（中略）副産物を無料にて採取させることができる」とある。維持管理にかかる労力を、地元の人々からの協力で賄うことにより、副産物を無料で提供するというのである。この法令を受けて小倉官林を利用していた人々は、自分たちが官林の保護を積極的に行うことを主張し、採取料の無料化を訴えていく。明治二七年（一八九四）の「小倉官林保護規約」や、その四年後に提出された「副産物無料採取願」には、地域をあげて官林を保護していく理念や体制が述べられている。

明治三二年（一八九九）には、新たに「国有林野法」「森林資金特別会計法」「国有林委託規則」が制定され、国有林の管理を地元の市町村に委託したり、開墾を目的に払い下げたりできるようになった。小倉官林でもこの制度改正を受けて、管理委託を受けられるよう申請した。二年後には、管理の委託が認められ、小倉村に委託事務を行う事務所が設けられた。これ以降の官林に関する事務は小倉村が行い、多くの文書が現在も残っている。

この時期の小倉官林について、哲学者務台理作は、子供の頃に官林で遊んでいた日々を振り返り、官林の中の一木道を「赤つち道」として自身の思想を支えるものとして紹介している。人々の身近に官林があり、日々の生活に欠かせない存在であった。

近代化で変わる役割

明治時代の半ばから大正時代は、人々の生活に大きな変化が起こった。産業革命の影響で、都市の建物の建材は木材からレンガ等に変わり、燃料の主体は木材や木炭から石炭に代わり、電気の普及により電灯が置かれるようになっていく。

産業も大きく変わり、稲作・畑作が中心だった農家では、輸出産業としての養蚕が行われるようになっていた。明治政府は富国強兵政策をすすめ、農地の拡大や工業生産量の増産に力を入れていた。山林原野は開墾し、新たな産業拠点を築くことが推奨されていた。



国有林野法（国立公文書館所蔵）

た。

「国有林野法」には「国有林野ハ開墾ノ成功ヲ条件トシ予メ其ノ価格及ビ成功期限ヲ定メ随意契約ヲ以テ売却ノ予約ヲ為スコトヲ得」という条文がある。これは、開墾が成功することを前提に、価格と開墾が成功するまでの期間を決めれば、国から土地を購入できるということである。

この条文を根拠に小倉村を中心とする現在の安曇野市三郷・堀金、松本市梓川の人々が連名で国有林を払い下げてもらうよう申請した。大正六年（一九一七）の「小倉国有林予約開墾出願要項協定書」には、「小倉国有林縁故特売者タル小倉、明盛、梓、烏川、三田、温、倭七ヶ村ハ共同シテ国有林野法第九條（条）ノ予約開墾者トナリ小倉国有林中不用存地林野トシテ売却処分サルヘキ土地ヲ相当代価ニヨリ払下ノ見込ヲ以テ耕地整理法第二条ノ二ニ依ル整理施行者トナリ耕地整理法ニ依リ開墾スルコト」とある。人々は山林を資源採取地とするのではなく、開墾して農地とすることを選んだ。この申請は二年後の大正八年（一九一九）に認可され、五六二町六反三畝四歩（約五六三万平方メートル）の土地が二七万四八七二円で払い下げられた。開墾はその土地を一〇区画に分け、一二年の期間をかけて行われた。開墾の起工式に寄せられた長野県知事赤星典太の告辞には、国家政策としての食糧増産計画への期待が述べられている。

伐採される樹木 開墾の様子

開墾地に生えていた赤松は明治三五年（一九〇二）の記録で直径三〇センチが約二八万本、九〇センチ以上が約一五万本といわれている。これらの樹木を伐採し、農地へと整備するのは並大抵の作業ではなかった。開墾には周辺村から通ってくる者のほか、他地域からの移住者もいた。移住者には奨励金の支給もあったが、開墾組合から土地を借りていたため、毎年小作料を納める必要があった。このため大正末期には小作争議が起こり、一〇回に渡り訴訟が行われた。

開墾作業は赤松の伐採から行われた。伐採された木材は

都市部に輸送さ

れ、柴はその場で燃やされている。

当時、開墾地ではあちこちから煙があがっていた。当初、作業は人力で行われていた。しかし、手作業での開墾作業は順調にはすすまない。そ



伐木を燃やす様子



トラクターと抜根機

こで開墾組合では国からトラクターを借り受けた。抜根機を購入したりして作業の機械化につとめた。開墾が進むにつれ、移住者の集落も整備されていった。当時の写真には、道路や水道が敷かれていった様子が写されている。このときできた集落が現在の東小倉区・室町区にあたる。



移住集落の様子



集落の道路と簡易水道

開墾者の生活から

会田血涙が明治末年から発行していた雑誌『信濃不二』には、計四回、小倉官林や開墾者の生活について書かれた記事がある。そこには、南安曇郡全体の期待を受けて始まった開墾と、その計画が順調に進んでいないこと、また開墾者からの投稿で生活の実態が紹介されている。

まず、開墾が始まった大正九年（一九二〇）十一月の第一一八号には、布山嘉幸が「小倉国有林予約開墾をなすに当りて起工式を挙行するに至るまでの経過報告」を寄せている。開墾する土地について「土地概して肥沃、表土黒色爐土にして穀菽（豆）野菜果樹等農作物にして適さざるもの無きは接続せる付近従来の圃場を撿して明かなり、（中略）畑地に開墾し重に雑穀並に桑樹を栽培し以て其利用を益々増進せんとす、尚将来何れかの方法により水利を得て水田とせん希望切なるものあり」と期待を寄せている。しかし、実際に開墾が進んでいくと、布山が期待を寄せた生産量の増進は思うように進まなかった。

開墾者である輪湖平馬は大正一四年（一九二五）五月第一八二号に「小倉開墾地実話」を寄せている。輪湖は開墾場所を通る人に「松林の跡は一〇年程は何も出来ない」と揶揄されながらも、懸命に開墾作業を行い、四反歩は葡萄を植え、六反歩は桑を植えた。しかし、実際に収穫してみ

ると肥料代にも届かない。

そうする内に「三年繰返す中に持て来た一五〇〇円の

金は皆無くなる、故郷へも

帰れず、是れで何の道にすればよいか」と悩む。そう

した思いを妻に伝えたところ「其んな弱

い魂（根）性でどうするか、男のくせに、もう一二年辛棒

（抱）して見ましよう」と励まされた。開墾者の苦しい生活状況がユーモアを交えて紹介されている。

こうした開墾者と交流をもった血涙は、昭和十一年（一九三六）七月第三二七号に「小倉開墾地問題」を載せている。血涙は冒頭で「政府も何んとか名前さへつけば補助金、助成金を出して仕事を致させべく奨励したり、中には俺の時代に何か記念に仕事を残して置こふ的の考へを持つ



小倉開墾地実話（信濃不二より）

たりした役人もあったかも知れぬ。又地方民も何とか政府から補助でも貰って甘味い仕事にありつかんとするやふな心持ちも起こって居つたり。誘ふ風に誘はれんとするものが合致して、小倉開墾と云ふことも成り上がったのではないか？」と糾弾している。その上で、開墾後の収入が大旱^{かんばつ}魃^{ばつ}や、土壌の粗悪さ、肥料代の高騰や繭値の下落により見込みより少ない現状を述べ、この問題を南安曇郡全体で解決する必要性を説いている。

その血涙の思いに開墾者も応えている。次号第三二八号では横澤雅幸が「小倉開墾地より申上候」を寄せている。横澤は血涙と交流し、前号の記事に対し「御記事は私の如き移住者の一員として常に関心を持つ者には特に痛切に感ずる処、其真想其觀察点として、其卓説には敬服の外無^な之、得る所甚だ多きを覚へました」と述べている。また、血涙との交流を思い出し、「御見送り申し家に入ると涙が止め度なく出ました。夫れは淋しいとかお別れしたと云う事より皆様の真からの御同情と御厚意が嬉しくて自然に泣けたのであります。暑き日寒き日、風の吹く日とか、辛ひ事などに会ふ毎に先生の『しっかりやれよ』と繰り返し繰り返し励まし下さった事を金科玉條として今日まで来ました」と血涙を思い、感謝の念を述べている。食糧増産や産業の発展を目標に開墾された小倉官林であったが、当初の目論見とは違い、開墾者の生活は非常に苦しいもので

あった。

不滅の開墾地

開墾者は戦後も農地を生かすための努力を続け、現在のリンゴ畑にたどり着く。その過程では、

養蚕業の衰退による桑畑の減少や、減反政策などに翻弄されることもあった。しかし、その状況を生かし特産物を生み出したのは、人々の努力の賜物である。リンゴ畑の周辺には新たな移住者も増えている。かつて小倉官林として人々の生活を支えた土地は、今、果樹園として安曇野市の産業を支えている。

(青木弥保)



現在の開墾地の様子

1

黒沢川の恵み

三郷のリンゴ栽培

リンゴといえば三郷。安曇野市では三郷地域の黒沢川扇状地を中心にリンゴ栽培が盛んである。堀金地域や穂高地域の扇頂部にかけても栽培されているが、「リンゴといえば三郷」というぐらい三郷のリンゴは名を馳せている。

黒沢川扇状地（上野面）は室山西の窪地以外米づくりに必要な水がほとんどなく、長い間広大な林が広がっていた。江戸時代には藩有林（御林）、明治時代には官林として林産資源が用材や肥料や牛馬の飼料、燃料に活かされていた。やがて大正時代から林の大規模な開墾がはじまる。切り開かれた土地は、少ない天水（雨水）に頼りながら、畑として利用されてきた。その後、養蚕が盛んになると、桑畑として利用されるようになった。

順調に見えた養蚕だったが、昭和の大恐慌、第二次世界大戦後の化学繊維の普及に伴い、生糸の価格が暴落し収益が期待できなくなった。養蚕の衰えとともに桑畑は減少し、大正時代から少しずつ始まっていたリンゴ栽培へと転換されてきた。



色づきが進む 2022 年 9 月。近年は高温により色づきが良くないとのこと。
シナノリップ、サンつがる、シナノスイート、シナノゴールド、サンふじ、シナノレッド、あずさ、千秋、ピンクレディーなど種類も豊富

リング栽培の歴史

安曇野のリング栽培の初めは穂高の牧であると言われて
いるが、大正の頃になると小倉地区でもリング園の開拓が
はじまった。大正五年（一九一六）、降幡宇一氏が開園し
たのが最初といわれる。この当時は、国光・紅玉・祝・
倭錦などの品種が作られた。その後、昭和三年（一九二
八）に降旗広志氏が宇一氏のリングの一部を含むリング園
を開園した。宇一氏のリングの木は、伊勢神宮にお供えす
るリングを作る御領園にもうつされ、もともとあった伊勢
講が「神宮御料リング奉賛会」として御料園でリングづく
りに従事し、収穫したリングを伊勢神宮に供進している。

昭和二年（一九二七）、温村の帯刀三津男氏は、室町に
一町歩（一畝）の国光・紅玉を主としたリング園を開園し
た。昭和七年にはスターキング、ゴールドデリシヤスの
新品種を一町七反（一・七畝）の面積に植えた。同じ頃、
中田儀一氏が室山東側に、降幡作樂氏は室山西に開園し
た。初期の頃には、消毒の仕方などもわからずによいリン
ゴが取れなかったが、昭和期にはいると次第にその技術も
指導員の指導などによって向上していった。リング農家も
次第が増えて、一時は「リング一樹に米二俵」といわれる
ほどの収穫を得た。

中田儀一氏は「信州りんご研究会」を設立し、剪定の技

術・病害虫の予防方法などに関してたびたび講習会を開
き、技術普及とリング栽培の発展に努めた。第二次世界大
戦中は新たな植樹が禁止され、農薬や肥料も底をついた時
代があったが、戦後（朝鮮戦争ごろから）安定期を迎えた。
順調に増産されてきたリングは昭和三七（一九六二）年
には長野県で最大規模になり、一万五三六畝にまで栽培
面積を広げた。ところが、昭和三八年（一九六三）バナナ
の輸入自由化や国内かんきつ類との競合が激しくなった結
果、昭和四三年（一九六八）にリングの価格が暴落してし
まい、昭和五〇年（一九七五）には九七五〇畝まで減少し
た。

その後、「ふじ」「つがる」への品種転換や、作業効率の
向上や反当りの増収のための矮化栽培の導入により、栽培
面積は再び増加した。昭和六二年（一九八七）には一万一
五五〇畝まで広がった。しかしその後は再び減少に転じ、
現在では八四〇〇畝と、多かった頃に比べると半分になっ
ている。

リングは品種によって八月上旬から一月下旬まで収穫
時期が異なる。夏の間は早生種のシナノリップ、十一月ご
ろに入るとふじ、晩生種のピンクレディーなどが好まれて
いる。

リンゴ栽培に適した気候

小倉地域でリンゴ栽培が盛んなのは、気候の影響も大きい。黒沢川扇状地の気温や降水量は松本や穂高の気象データを参考に考えることができる。気温や降水量だけでなく、様々な条件がリンゴ栽培に影響を与える。例えば、標高の高い（七〇〇以上）室山西側や室町上部と、やや標高の低い（六五〇以前後）赤坂段丘上では気象条件がわずかに異なるのだ。ここでは、リンゴ栽培に適した気候について触れてみたい。

一 冷涼な地域

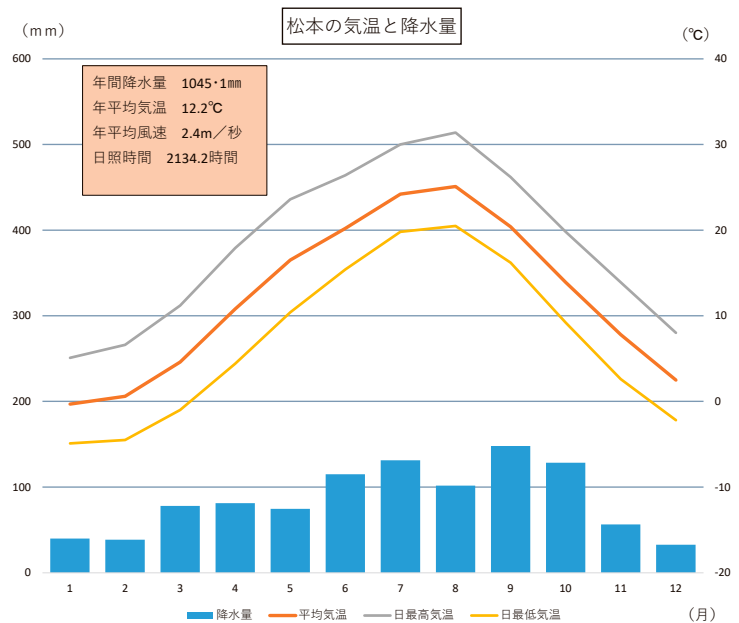
リンゴは、年平均気温が六〜一四度の地域（中国やアメリカ合衆国等）で栽培されている。日本の主産地（青森、長野など）は年平均が一〇度前後の地域（穂高一・五度、松本一・八度）だ。冷涼な地域での栽培に適しているのは、以下のような理由がある。

収穫を終え落葉したリンゴの木は、一二月〜翌年三月まで休眠期間に入るが、休眠から目覚めるには一定期間低温にさらされる必要がある。また、リンゴがきれいに色づくには、秋（九月下旬〜一〇月上旬頃）からの低温が必要であり、リンゴを貯蔵するにも冷涼な方が適している。

二 降水量が少なめの地域

日本の年間平均降水量一五〇〇㎜に対し、穂高一・〇六四・八㎜、松本一・〇三二㎜と、この地域は降水量が少ない。降水量が少ないことは、冷涼な気候であることと合わせ、病害の発生が少なくなることにつながる。降水量が多いと、ツル割れの発生が多くなる。

ツル割れとは、ツルもとに亀裂の入っているリンゴのこと



松本年平均気温：11.8℃ 年降水量：1031.0mm
統計期間：1981～2010 ケッペン気候区分 Dfa

とだ。ツル割れリンゴはおいしいリンゴの目印とも言われており、蜜入り完熟リンゴが多い。しかし、外観が劣り、割れたところから痛みやすく商品価値が下がるため、「良質」なリンゴとは言えない。

また、雨が多いと、肥料の養分が流れてしまうのは言うまでもない。温暖化に伴い高温が続いたり、降雨が続いたりすると玉割れの原因となるが、現在是对応策がないのが現状だ。多発する台風による風害も大きく、葉や枝により果実が擦れ、商品の価値が下がる。

三 昼夜の温度差が大きい地域

昼夜の温度差があると、昼に生長し、夜は寒さから身を守るという過程を繰り返しながら生長する。これにより実の引き締まった、糖度の高いリンゴになる。しかし、気温の日較差が小さくなってきたことから、近年では色づきが悪く、糖度も上がりにくくなっているようだ。



ツル割れの起きたリンゴ

「矮化栽培」から「高密植栽培」へ

リンゴの生産が年々減少する中、高密植栽培がJ A あづみや先進的なリンゴ農家により推奨されるようになった。高密植栽培では、従来の矮化栽培に比べ樹間が狭く三分の一～四分の一程度。支柱と針金により、木の高さは三メートル以内に抑えられている。農家の高齢化を見据えて高所での作業を減らし、剪定をしなくてもある程度の収益が上がるようになってきている。

矮化栽培だと一本当たり約一五〇玉収穫できるが、高密植栽培では一本当たり五〇～六〇玉の収穫になる。収穫可能な木の寿命は双方とも三〇年程度で矮化栽培との違いはない。そのため全体で見れば、面積当たりの収量が多くのことが期待されている。

木の高さが低いことで、従来のリンゴ栽培よりも作業効率は良くなったと話すSさん。一方リンゴ園を始めた当初の、大木となったリンゴに「ふじ」を接ぎ木して大切に育てている。「リンゴはでかい木の方がうまいがね」「子ども達は東京で仕事をしているのでS農園は俺の代で終わりがな」と話す。生産者組合の働きかけにより、栽培を希望する方には直ぐに収穫ができる状態で貸し出される仕組みができていたので安心していいという。

リンゴ園の四季と農作業

九月中旬、K農園（室町）を訪ねた。秋晴れの乾いた空気の日、日中のリンゴ園はまだ暑さの中。家族経営の農園では人手が少なく、毎日二～三人での作業に追われている。今はシナノスイートの収穫を控え、葉摘み作業。一玉一玉に日光を当て、色づきを良くする葉摘みは手間がかかる。葉摘みは出荷前の最後の仕上げだ。むらなく色を着けるために、玉回しも加えて行う。丹精込めて五か月間育て



高密度で植えられた高密度栽培のリンゴの木（上）。樹高が低いので高所作業が少なく済む（下）

てきた青いリンゴが、日光を浴びて色づき出荷を待つ。このところ頻繁にやってくる台風が心配だと話してくれた。リンゴは同じ品種でも一本ずつ生長が異なり、収穫の時期も少しずつずれる。どの作業も果樹園内を注意深く歩き、木の様子や実の様子を見ながら作業を進める苦労がある。

花の時期には、花房を見ながら中心花を残し摘み取る作業が最も気を使い大変だとKさんは話す。花はほぼ一斉に開花するので、この時期には手伝いを入れての花摘み作業。三郷では比較的標高の高い（七二〇㍎）位置にある農園は、盆地特有の霜害に見舞われることは少なく、防霜



K農園の葉摘み作業



真冬の剪定作業

ファンは設置したが利用は少ないようだ。

日照時間が長い南東斜面に位置する農園はリンゴ栽培にとっては絶好の地。標高が高いため、高温障害はあまり出していない、と地の利を基盤に農園を続けていく意気込みを

語ってくれた。

リンゴ栽培の未来

黒沢川の恵みとこの地の冷涼な気候を生かしてのリンゴ栽培。ただ、リンゴ栽培農家も後継者不足により経営が難しくなってきたのが現状だ。果樹園を他の農家や企業に委託して栽培を継続したり、蕎麦などへの転作のため手放したりする果樹農家も増加してきている。

一方で、人々の知恵により開発された矮化栽培から高密度植栽培、リンゴの味にこだわり自らの栽培を手掛けている方々の知恵により土地に合わせた産業が維持できる。また、加工・輸送・販売を一貫して行う六次産業への転換も試みられている。更に、循環式農業の取り組みも進み、自ら考える産業が三郷地域に根付こうとしている。小さな点に過ぎない三郷のリンゴづくりだが、地球の中の三郷を考えた農業が続けられている。

三郷のリンゴは、標高六〇〇〜七〇〇㍎の扇状地、寒暖の差が激しい気候、肥沃な土壌がはぐくむ「安曇野の宝」でもある。毎日一個のりんごは「医者いらず」ともいわれている。三郷のリンゴ栽培への心意気を感じ、生きる指針となる宝そのものだと感じた。

（倉石あつ子、千村裕一）

2 林檎村音楽祭

「地元には有名なアーティストを呼んで盛り上がりたい
ネ、三郷だけに渡辺美里を呼べたらいいのに。」
平成の始め、林檎村音楽祭前夜的一幕である。

林檎村音楽祭は、三郷村若い農業経営者の会等で組織した林檎村音楽祭実行委員会が主催し、平成元年（一九八九）から平成八年（一九九六）までの計八回、毎年開催された野外コンサートである。

三郷文化公園に組んだ屋外ステージの周りは、リングのコンテナを並べた座席を埋めた観客と、土手にレジャーシートを広げた人たちで賑わった。観客数は多い回で約五〇〇〇人を記録し、写真に残る大掛かりなステージからも、当時の熱気が伝わる。



林檎村音楽祭の様子

出演者も魅力的で、例えば、J Rの前身である国鉄で大糸線の車掌もしていた伊藤敏博や、『安曇野』という自身の楽曲を持つさだまさし、といった顔ぶれだ。さらにコンサートグッズとして、「林檎村」ラベルのジャムやリンゴジュース、Tシャツも作り、音楽祭を盛り上げた。

そんな楽しさが詰まった大規模な音楽祭は、一人の若者の熱意から始まった。

若者の力

音楽祭の発案者で、実行委員長を務めた中村隆宣氏に直接話を聞くことができた。現在、中村氏は大規模なリング農園の経営者として活躍している。

昭和の終わり、当時二九歳の中村氏は、農業の面白さを広め、三郷村が活気付くようなワクワクする何かをした

回	開催日	出演者
1	1989.7.30	村下孝蔵&伊藤敏博
2	1990.7.29	スターダストレビュー
3	1991.7.30	さだまさし
4	1992.8.2	杉山清貴、吉水孝之
5	1993.8.1	安全地帯
6	1994.8.6	松山千春、CALL
7	1995.7.28	さだまさし
8	1996.7.28	杏里

い、と常々考えていた。動き出したきっかけは、信州大学名誉教授の玉井袈裟男氏（故人）の「地域を活性化させるのは若者の力、特に行政の若者をその気にさせたら地域は変わる」の言葉であった。音楽好きだった中村氏が、農園経営とは違う形で地域を盛り上げる手段として、音楽祭を選んだのは自然な流れであった。

中村氏が早速、旧三郷村役場職員で同世代の増田英紀氏（故人）を誘うと、彼は快諾し事務局長として活躍してくれた。中村氏は「彼が誘いに乗ってくれなかったら音楽祭の実現はなかった」と懐かしそうに語った。

音楽祭を作り上げた実行委員は、農業経営者や教員、村役場など、異なる業種の地元の若者たちであった。その中には学生や出演者ごとのファンも多く、多い年には一八〇人も集まり、音楽祭は地域の若者たちの交流の場としても盛り上がった。

苦悩する若者たち

その一方で、音楽祭の中心となった若者たちは毎回、資金繰りに苦心していた。チケットの売上が伸び悩んだからだ。八回もやっている「前に行ったから今年はいいや」という人も出てきて、手売りでのチケット販売は大変苦労した。もちろん、地元企業の協賛や公的な助成もあった

が、若者たちの努力も及ばず、最後は数百万円の赤字となった。こうして林檎村音楽祭は平成八年（一九九六）の第八回で幕を閉じた。

林檎村音楽祭の残したもの

林檎村音楽祭のテーマは一貫して「ふるさとを愛し夢を次代に伝えよう」であった。最後は約三〇年ぶりに音楽祭を振り返った中村氏の言葉で締め括りたい。

「赤字の年があっても、継続は力なり、の言葉を信じて一生懸命やっていた。永遠に継続することはできなかったけれど、今から思うと、よく八回もやったなど、あの頃の仲間達を誇りに思う。そんな音楽祭の一番の収穫は、人々の交流。音楽祭成功に向かって活動する中で友情や愛情が芽生え、さらに何組かが結婚したことは、思わぬ副産物だったかな。時代の熱気みたいなのを感じて、大変だったけどやっぱり楽しかったね。」

林檎村音楽祭が育んだ交流は、今も地域に根付いている。

（水谷優美）



第1回のチラシ

3

農業を観光へ 日本アルプスサラダ街道

「観光過疎」を観光地へ

昭和六三年（一九八八）の長野自動車道豊科インターチェンジの開通を前に、西山山麓地域では危機感を募らせていた。元々松本平から安曇野にかけての西側一帯は、比較的観光資源に恵まれず苦労していた。そこにきて高速交通の発展や週休二日制の導入による余暇時間の増加等、社会の流れがより観光産業の追い風となるよう変化し始めたのだ。

一方で、この地域は、ブドウ、レタス、リンゴ等、全国的にも知られた豊富な農産物の特産地である。そこでこれらの農産物を生かした観光振興を進める広域的な村おこしとして、塩尻、朝日、山形、波田、梓川、三郷（全て当時）の六市町村が連携して「日本アルプスサラダ街道」構想が打ち出された。新鮮な野菜や果物の産地を貫く生活道路約三〇㍿を日本アルプスサラダ街道と命名し、沿線の直売所等も含めたアグリカルチャーリゾートを目指すというものであった。

賑わう農業の村

六市町村では、行政の他に各市町村の農業委員会や商工会、観光協会等の各種団体を加えて「日本アルプスサラダ街道協議会」を立ち上げ、本格的に活動をスタートする。そして昭和六三年七月三十一日、街道の両端である三郷村と塩尻市を出発したパレードを皮切りに、サラダ街道が正式にオープンした。



サラダ街道オープニングセレモニー



第4回サラダ街道駅伝（平成5年（1993））



開設当初の直売所（上）と現在のサラダ市（下）

以降、毎年農産物のシーズンになると様々なイベントが企画され、盛況を博してきた。街道沿いを走るサラダ街道駅伝やサラダ街道ウォーク、写真や料理のコンテスト、都市近郊での即売会や、近年では地元のプロサッカーチーム松本山雅のスタジアムでのPR活動などというものもあり、その内容は実に多彩である。

また三郷村では、サラダ街道がオープンした翌年の平成元年（一九八九）に、街道の起点である住吉神社横に農産物直売所を建設した。三郷村内で初めての直売所であり、小規模ながらも多くの客が訪れたという。この直売所は、平成十一年（一九九九）に改装され、「三郷サラダ市」として現在も営業している。

自信と誇りに満ちた地域社会の創造

平成の大合併を経て、協議会の構成団体は三市二村となり、事業内容も少しずつ変化してきた。協議会では二世紀の地域像として、「自信と誇りに満ちた地域社会の創造」を掲げ、地域振興を図っている。そして平成二十六年（二〇一四）に、一定の役割を果たしたとして協議会は解散し、各種事業は日本アルプス観光連盟に引き継がれることになった。

平成の時代を通じて、広域観光と農業の発展を目指したサラダ街道事業。事業主体は解散したが、今も街道沿いには案内看板が設置され、ドライブやサイクリングコースとしても親しまれ続けている。

（幅拓哉）



長く伸びるサラダ街道（三郷小倉・上）と街道沿いの案内看板（下）

4 上高地に続く夢

三郷スカイライン

上高地へと続く道

万延二年（一八六一）に飛州新道が閉鎖とされてからも（七一頁）、地元にはなお、上高地方面と三郷小倉を結ぶ道路を欲する思いが燦り続けていた。

元々上高地は、近世においては木材等の山林資源の採取場所として活用されてきた。それが明治維新後の時世の中で、全国的に開拓が盛んに行われるようになり、上高地にも開田計画が持ち上がり始める。明治十三年（一八八〇）には、地元小倉（当時は南安曇郡科布村）の降幡與一（よいち）が、「御官山地拝借願」を提出し、上高地の開発を願っているが、降幡にはこれに際し上高地から小倉への道を改めて切り開こうという算段があつたようだ。実際に降幡が小倉への道路開削及びそれに関連する諸費用を計算した計算書が残されている。この開田計画は結局監督官庁が許可せず、実現しなかったが、「飛州新道再開発」の考えが地元にあつたことを窺い知ることができる。

その後、徐々に観光地化されていく中で、上高地に至る道路は旧安曇村内（現松本市安曇地区）を通るルートが利



大滝山頂から上高地を望む（昭和 28 年）。飛州新道が閉鎖されてからも、ここに道を開くことが三郷村民の願いであった

用され、小倉へはついぞ道が通ることはなかった。やがて昭和初期には、梓川沿いの難所・釜ヶ淵に釜トンネルが開通し、そこが名実ともに上高地の入り口となったのである。

三郷スカイライン構想

こうして一度は潰えたかと思われる上高地―小倉ルートだったが、交通機関や土木工事技術の発達、さらに上高地を訪れる観光客や登山者が増加するにつれて、再び脚光を浴びることになった。

そもそも小倉地区は、直線距離だけで言えば他のどの集落よりも上高地に近い。それゆえに、袋小路であり交通機

関の乗り入れが一ヶ所に限られている上高地に、小倉から乗り入れられるようにしようという考えが生まれたのは必然であった。

三郷村に合併する前の昭和二八年（一九五三）、小倉村では、大滝山を経由して上高地に至る環状バス道路建設に向けて初めての实地踏査を行った。このとき

には、衆議院議員であった植原悦二郎を招き、大滝山頂へと登っている。当時七六歳の植原は山駕籠に乗っての登山であった。

その後、昭和二九年（一九五四）の三郷村への合併に際して、この道路開発を推進することが条件とされ、合併後の昭和三〇年には村議会に奥地開発観光特別委員会が設置されて本格的な道路建設の取り組みが始まった。

まずは鍋冠山の森林資源利用を目的として冷沢^{つやざわ}まで道路を新設し、さらにそこから先、鍋冠山から大滝山、徳沢園を経て上高地へと続く観光道路を開く。「三郷スカイライン構想」と名付けられたこの計画は、村民の観光振興への大きな期待を受けて進められた。

昭和二八年から三四年（一九五九）にかけて、北小倉の登山口から東峠までの五二一〇^{メートル}の車道が林道補助工事として開設されたのを皮切りに、昭和三年に展望台まで、翌三四年には展望台からなめし頭山頂の国有林境まで、それぞれ村の単独事業として車道が開設された。また昭和三七年（一九六二）には国有林境から冷沢までの二三六五^{メートル}が歩道として開設された。

こうして開かれた道路に、昭和三五年（一九六〇）には松本電鉄バスが開通する。土日祝日のみ、一日二往復ではあったが、このことは観光振興における発展を益々期待させるものであったという。村ではさらにこのスカイライン



大滝山頂にて、調査登山の一行。山駕籠に乗っているのが植原悦二郎（昭和28年）



県によるスカイラインの計画図。赤い線が計画道路を示す

が上高地まで開通した暁には、これを有料道路として通行料金を徴収し、大滝山に山荘や売店を建設、冬季にはスキーをできるようにし、麓にほど近い室山周辺と併せて一大観光産業としていく青写真を描いていたようである。

県と国の狭間で

折しもこの頃は全国的に観光熱が高まりつつあり、上高地方面の観光客数も毎年増加の一途を辿っていた。一方で上高地へ続く唯一の道路である県道安曇上高地線は、大雨の度に決壊を繰り返し、そのたびに交通が途絶した。県の統計では昭和三二年（一九五七）から三七年の六年間で、この道路の被災箇所は延べ一七九ヶ所を数え、実に一八回の通行止めが発生している。

昭和三三年（一九五八）七月に台風によってもたらされた集中豪雨では、県道の決壊により登山客が上高地に足止めとなった。この時には三郷村役場小倉支所に災害救助本部が設置され、大滝山経由ルートで上高地へと救助隊が向かい、一〇人ほどを下山させている。



昭和 33 年 7 月台風 スカイラインより上高地へ入る救助隊

このこともあって、三郷スカイライン構想は、上高地への道路に回遊性を持たせ、この状況を打開する県の施策としても大きく取り上げられることとなった。以降、昭和三〇年代を通じて、村や県の各機関、さらに国や日本道路公団等が現地調査を実施し、その数は三〇回以上にも上った。そして度々の陳情要請等により、実現の期待の持てるところまでこぎつけたのである。

しかしそこで大きな壁が立ちはだかる。国立公園を所管する当時の厚生省が、自然保護と高所道路の維持の困難さを理由に、国立公園内への道路建設に難色を示したのだ。さらに当時の文部省の文化財保護委員会において、上高地の自然保護を理由として「自動車道路建設は許可できない」とされたのである。

村や県では様々な角度から検討と協議を繰り返したが、結局、「国立公園内に道路を通す」という点がいかにともしたがたく、スカイライン構想は立ち往生することとなってしまった。県では国立公園際の大滝山頂までを自動車道とし、そこから遊歩道で上高地へと繋ぐ「雷鳥ライン構想」を提案する等、代替案もいくつか検討されたが、いずれも予算や文化財保護委員からの許可が下りないといった問題を抱え、やむなくスカイライン構想は終わりを迎えることとなった。

構想の跡に

当初掲げた道路開発の目的は叶わなかったが、一〇年余りの歳月をかけたこの構想は、その後の三郷村の観光産業の発展に寄与したものととして評価されている。

標高一四〇九・四メートルに建てられた展望台は今も人が訪れ、松本平一円を眼下に収めるその眺望（二八頁）を楽しんでいる。また大滝山や鍋冠山への登山口として公衆便所や駐車場が整備され、付近には原生林が広がり、山菜も多く自生する。道沿いにはカタクリの花が咲き、街中では見られない里山の動植物が生息しており、近年では生物学を学ぶ地元の大学生の研究フィールドとなっていたりもする。

上高地を目指した夢の跡地は、里山の自然環境に触れられる身近な場所に形を変えて、今も静かにその役目を果たしているのだ。

（幅拓哉）



スカイライン展望台

5 室山アグリパークとファインビュー

室山アグリパーク開設以前

アグリパークは、平地の中に際立って鎮座する標高七九三の室山一帯の三〇鈔余りの公園である。

近くには縄文中期の南松原遺跡があり、周辺地域は江戸時代は小倉御林として、明治時代は「小倉官林」と呼ばれた国有林として、うっそうとした松林に覆われていた。その後、大正年代から開墾が始まり、現在はりんの産地として、豊かな農村風景が広がる果樹地帯となっている。また、この地域には、巨人デイルボッチャが室山を生み出したという伝説が息づいている。

大正年間より、松本平を一望できる眺望の素晴らしさから、室山一帯を観光の名所にしたいという住民の声があった。時代が下って昭和四六年（一九七一）、「室山周辺観光開発研究委員会」が発足し、開発の方向が示された。そこでは、室山を村民憩いの場として、山頂には保養センターを建設すること、麓にはテニスコートなどのスポーツ施設をつくること、室山池には釣り堀を設け、冬にはスケート場とすることなどの計画が立てられた。



パンフレットから（室山アグリパークの全容）

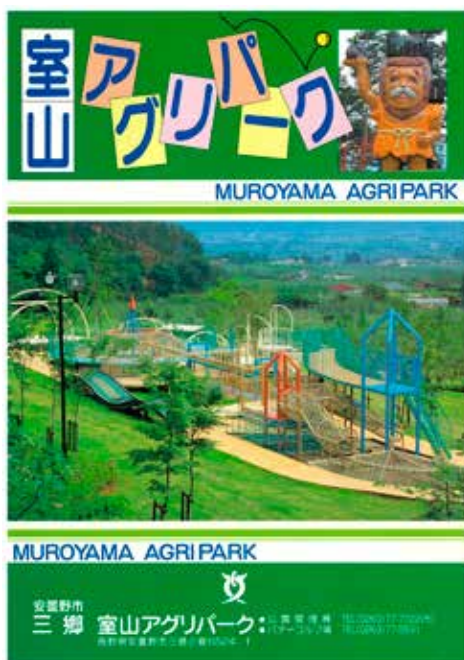
室山アグリパークの開設

昭和五七年（一九八二）七月、室山公園北側にクレイコートと全天候型テニスコートが開設された。また、室山

西側の室山池は、昭和五七年の改修工事に続き、スケート場としてオープンした。

昭和六三年（一九八八）、時の竹下総理大臣が提唱した「ふるさと創生事業」を活用し、地域おこしの一環として、「室山アグリパーク整備事業」が構想された。そして平成二年（一九九〇）七月、自治省の地域づくり推進事業として採択されると、一〇億八〇〇〇万円の事業費で二年事業として実施され、平成四年（一九九二）八月にオープンした。設置された主な施設は、リフト・ボブスレー・ジャンボ滑り台・周遊道路・デリラボッチャ展望台・正面広場・展望広場・パターゴルフ場などである。

アグリパークの目玉は、なんといっても山頂から連なるサマーボブスレーやジャンボ滑り台、そしてリフトを上つ



パンフレットから（アスレチック遊具）

た山頂展望広場の一角にある、巨人の姿をした「デリラボッチャ」の展望台であった。

開園から一〇年余りの間は、子どもから大人まで年間五万人ほどの利用があり、大勢の人で賑わった。

ファインビュー室山の建設

ファインビュー室山の前身は、昭和四八年（一九七三）に竣工した三郷村保養センター「室山荘」である。経営は村から委託を受けた村の開発公社が行った。松本平を一望できる展望のよさと相まって、室山山頂一帯の施設の整備と共に利用客が増加し、昭和五〇年（一九七五）には室山荘の別館を増築した。やがて利用客の増加と共に「三郷村に温泉を」という声が高まった。平成八年（一九九六）から空中探査や電気探査、平成九年（一九九七）にはボーリング調査を行い、毎分二五〇㍑が湧出し、水温は三〇度を超える温泉が見つかった。

一方、この当時の室山荘は、開設以来二〇年余り経過し建物や設備の老朽化が目立っていたので、温泉湧出に併せて近代的施設への改築が計画された。平成九年四月に建設に取り掛かり、翌一〇年四月二五日に竣工した。

さて、「ファインビュー」の名称についてである。これは、この施設の愛称として一般から募集した八二点の中か



ファインビュー室山の遠景と近景

ら決定したものである。この愛称には「素晴らしい眺めと素敵な温泉、抜群な自然環境にある施設で心も体もリフレッシュし、明日の農業に活力がわく」という意味が込められているという。

愛称と併せて、施設について見てみる。松本平を見下せる大パノラマと一体になれる開放的な大ホール。天然温泉の露天風呂・大浴場・サウナ・ジャグジーが設置され、宿泊室（二〇室）も完備された。その他、研修室・レストラン、加えて、地元産のそば・野菜・果物の加工体験ができる食品加工室も設置され、観光と農業を結んだ特徴的な施設として機能を始めた。平成一二年（二〇〇〇）には利用者は三十万人余りとなりピークを迎えた。先人の願いが

見事に結実した瞬間であった。

時代の荒波のなかで

バブル崩壊以降、時代は大きく変化し、ファインビュー室山も困難に直面した。経済の停滞や雇用環境の変化、少子高齢化・人口減少などの影響が集客数の低下を招き、施設の維持管理に大きく影を落とした。平成二二年（二〇一〇）には、アグリパーク一番人気だったボブスレーとリフトが撤去されることとなった。完成当初六万人近くいたアグリパーク施設利用者数も年々減少し、廃止前年の平成二二年（二〇〇九）には二万人を切



室山アグリパーク利用人数の変化と内訳

り、ピーク時の四分の一にまでなっている。

一方、ファインビュー室山の利用者数も、平成一二年度を境として、現在に至るまで減少傾向が続いている。それでも、経営主体を第三セクターによる三郷村振興公社、そしてファインビュー室山と変更しながら、経営努力を重ねてきた。

新型コロナウイルスの影響もあり、現在でも苦しい状況は続いている。今後のファインビュー室山を含めアグリパーク全体の事業展開を見通した時、厳しい状況を乗り越えるための創意工夫が求められている。

三郷の宝であり続けるために

こうした中、室山一帯の将来の存続・発展のために、市民や市担当者がすでに新たなプランに挑戦したり構想を温めたりしている。その中から、いくつかの意見を紹介したい。

市民の願いの中から…市民のニーズを生かして、可能な限り公園や施設の機能を強化したらどうか

・近隣の観光地や地元の農業と連携した施設として活用する、公園施設をリニューアルして多くの市民の皆さんの利用をめざすなどが考えられる。

室山一帯を有効活用しようとする動き…室山を市民から親しまれる里山にしたい

・安曇野市里山再生計画を推進する市民、事業者、行政が一体となって取り組む企画「さとぷろ」の中で、室山においても多くの市民や団体とともに、植樹作業や手入れなど様々な活動の展開がスタートしている。

三郷中学生の思いの中から（一部）…新たな仕掛けでたくさんのお客さんに来てほしい。でも、今のままでもよいかも知れない

・映えスポットを作ってSNSを駆使して、魅力を発信する、季節ごとや定期的なイベントを開催する。（でも今のままで変わってほしくない考えの生徒も…）

※生徒の皆さんには、アンケートで室山一帯に対する思いを寄せていただいた。

今後、室山アグリパークとファインビュー室山の将来を語り合う機会が設けられ、アイデアが具体化していくことを期待したい。またその中で、三郷地域全体の在り方に対する関心が高まると共に、市民のつながり合いが一層広がり深まることを願って止まない。

（藤松伸二郎）

6 人と森の交差点としての室山

木材の収穫

令和四年（二〇二二）、積雪ある二月、室山の安曇野市有林に植えられて八〇年になるヒノキ材を伐採し、搬出した。令和四年度から建設される三郷西部認定こども園新園舎の柱などの構造材として利用するためである。このヒノキの伐採時には、三郷西部認定こども園を三月に卒園する



伐採され横たわるヒノキ

年長児とその家族を招き、見学会を開催した。子どもたちが固唾を飲んで見守る中、その大木は、枝葉に積もった雪を舞い上げながら地響きを立てて横たわった。その瞬間、ワーツと歓声と拍手が森の中に響いた。見学者たちは切り株に触れながら、木の香りを感じ

じたり、年輪を数えたりした。この室山ヒノキ林は、昭和一六年（一九四一）に当時旧小倉村小学校一年生が、皇紀二六〇〇年（昭和一五年）を記念して植林したとされる。八〇年を超える大木は、根元直径七〇センチもあった。

新園舎は安曇野市が合併以来、初めて建物全体の構造にすべて安曇野産の木材を利用する公共施設である。室山産ヒノキは本柱・土台として、室山産アカマツは間柱として、三郷スカイライ

ン上部に位置する堀金市有林のカラマツは梁・桁・垂木として、子どもたちを育む園舎を支えることとなるのだ。そして、こども園の園庭からは、今回木材を伐り出した里山を望むことができる。



80年生ヒノキの切株に触れる子どもたち

森のはじまり

五月、「室山ヒノキの森はじめ」と題した植林イベントが開催された。小倉区、三郷西部認定こども園に通う園児、フラインビュー室山の職員や宿泊者など、多くの方々の手により、新たなヒノキの苗木が切り株の隣に植えられた。このイベントには八〇年前、記念植林をした八六歳の方が参加され、孫とひ孫とともに再びこの室山に苗木を植えた。八〇年前に彼が植えたヒノキは大きく育ち、ひ孫の通う園舎を支える柱となる。今回新しく植えたヒノキの森は、小倉区の方々と一緒に手を加えて整備を行っている。伐採時に開削した作業道は、その時に出土した枝条を破碎したウッドチップが敷き詰められ、山頂へ向かう遊歩道へと続いている。これから多くの人がこの森を訪れる道となる。

人の暮らしと森の循環

「樹木」は私たち人間よりもはるかに長生きである。私たちの暮らしとは、その命のスケールが異なる



親子でヒノキを植林する様子



上：植林後、下草の除去作業をする様子



下：作業後に森を楽しむ様子

生き物なのだ。しかし、私たちは次の世代に引き継ぐことができる。木と人はその命のすり合わせを行いながら、その関係を調整することで初めてバランスが保てるのである。だから、里山として、人が森林との関係を築くには、世代を超えて絶えることなくその関わりを引き継いでいかなければならない。

室山は、人間の暮らしと自然の生き物が交差する里山であり、地域の大切な宝である。人が木を植えて、育てて、収穫し、その恵みを暮らしへ紡ぐ。そして、また植える。そのような命の繋がりと、そこに関わる人々の暮らしの循環が絶えることなく、これからも続いていくことを願っている。

(田原佳世子)

7 地域へ飛び出し、地域に学ぶ子どもたち

〈三郷小学校〉

三年生の「りんご学習」

地元の子どもたちにもりんごの事をもっと知ってもらいた



初めてのりんごの摘果作業

いという農家の人の思いと学校としての学習のねらいが一致し、一八年前の平成一六年度の三年生から始まった。併せて、日頃から遊びや諸活動の場として親しまれている、隣接する文化公園に植

えられているりんごの木の話も始まった。以来、地域体験学習として大切に実施されてきている。

令和三年度の三年生は、五月の摘果作業からスタートした。二組の子どもたちは、「ナカムラフルーツ農園」にお世話になった。中村隆宣氏からポイントを教えていただき、初めての活動だったが夢中になって取り組むことができた。作業が終わった後、中村氏が作詞作曲された「りんご園の唄」「ピンクレディーの唄」を聞かせていただいた。中村氏がりんごをととても大切にしている熱い思いが伝わり、子どもたちもとても盛り上がり一緒に大きな声で歌った。また、子どもたちの質問に中村氏は丁寧に答えてくださり、六月の観察会に向けて学校でもりんご学習を進めていった。

九月には再び農園に出かけ、学校で準備してきたシール貼りをを行った。また、フル稼働している大型冷蔵庫にも入らせてもらったり、選果の工程を体験させてもらったり、あきばえおいしい秋映のりんごをいただいたりした。

十一月、いよいよりんごの収穫。晴天に恵まれ、真っ赤に実るりんごの畑をバスの中から眺めながら、農園に向かった。まず、真っ赤なピンクレディーをみんなで採り、



待ちに待ったりんごの収穫

次に、自分たちオリジナルのシールを貼ったふじを収穫した。
うまく形や文字ができていたりんごがたくさんあり、子どもたちは大喜び。教室での学習とこのように現地の農園での体験学習が相まって、子どもたちにとって真に実になる学びとなった。



大変だけど楽しかった田植え

五学年の「アイガモ農法」での米づくり
アイガモの命と真剣に向かい合うこの学習は、地元農家の鈴木達也氏からの話がきっかけで二年前の平成二二年度から始まり、以降大切に実施されてきている。
令和三年度の学習活動の様子を写真で紹介する。
この学習は、バジルクラブをはじめ、地域の方々や保護者の理解と協力なしでは成り立たない「命の学習」でもある。五年社会科の日本の農業を学ぶ単元に関わって、体験



アイガモとの出会い



子どもたちが新たに作ったアイガモの小屋



足踏み脱穀機での脱穀体験も



みんなで分担・協力してできた稲刈り



収穫祭に向けて



アイガモの解体（希望者が参加）

的に学ぶために総合的な学習の時間や他教科等を合わせて展開している。生産から消費までを米とアイガモを通して学び、更に真剣に命と向き合い、自分なりにしっかり考え、判断をしている子どもたち。教師は、「命をいただく」ことへの道徳学習もしっかりとカリキュラムを組んで進めている。学社協働の価値ある尊い実践である。大変だと思うが、是非、今後もこの学習を大切に続けていってほしいと願っている。

〈三郷中学校〉

三郷SELF

平成一四年度から中学校で始まった「総合的な学習の時間」のことを「三郷SELF」と呼んでいる。Sはサーチ【探究】、Eはエンバイロメント【環境（現代的課題）】、Lはライフ【生き方】、Fはフレンドシップ【共生】。自分らしく生きることを目指し、地域の現代的課題について体験的な問題解決学習の展開をカリキュラム化した。それから二〇年間、地域の方々に支えられながら、大切に継続されている。一学年で



地域学習講演会

は、「地域を知る（三郷に学ぶ）」をテーマに、三郷地域の「歴史・民俗」「自然」「産業」「福祉」について、一学期に地域学習講演会とフィールドワークを位置づけて、生徒たちが、自ら追究課題を発見でき

るようにしている。二学年では、「地域で働く／社会とつながる」をテーマに、職場体験学習を中心に社会とのつながりの中で、自分の生き方や自分らしさを見つめ直している。三学年では、「地域に発信する／共に生きる」をテーマに、それまでの学びをもとにして地域にどう発信・貢献していくのかを考え、実践している。

令和四年度一学年の学習の様子の一部を紹介する。

五月の地域の講師を招いた講演会では、これまで生活していた三郷地域の話なのに、新



旧三郷民俗資料館・三柱神社等でのフィールドワーク



車椅子体験

しく知ることがたくさんあり、各分野とも毎回、生徒たちは、大いに興味をもって聴いていた。

での三郷の産業や祭りに関わる道具が展示されていた。

帰りには、堰や神社、石仏などを見た。生徒たちは、身近なところにも歴史的な価値のあるものがあふれているという実感をもつことができた。

「福祉」分野では、「車椅子って何のためにある？」という質問からスタートした。実際に車椅子に乗り、介助をし、その質問の真意を実感していた。また、バリアフリー

やユニバーサルデザインといった今社会全体で求められているものについても自分の考えを深めることができた。

「自然」分野では、住吉神社や黒沢川に行って三郷の自然について学んだ。大変暑い日であったが、生徒たちは、この折角の機会を逃さないように講師の先生の話を食い入るように聞いていた。三郷の地形や生物のこと、黒沢川と住吉神社との関係、自然のあり方等について、改めて関心を深め、自分なりの疑問を持ち、もっと調べてみたいと考えを深めることができた。



住吉神社の社叢や黒沢川でのフィールドワーク

地区生徒会の地域学習

地区生徒会での地域学習会は平成一六年度から始まり、今年度で一八年目となる。当時、地区生徒会の活動に「地域を学び、地域を知り、地域に誇りをもつ学習活動」を取り入れることで、学校経営の柱として位置付けている「地域との関わりを深め、地域や地域の人々に学び、地域と共に生きる心の醸成」の具現化を目指そうと考えたのである。折しも三郷村では、村誌編纂委員会を組織して事業を進めていた。特に村落誌は、村落の有識者が地域の歴史・文化・自然等について編纂していたので、これらの方に講師をお願いすることができた。編纂委員の方々にとっては、研究したことが村民への還元のためのよい発表の場ともなり、共に育つ学社融合の活動につながることもあった。

五月の第一回地区生徒会では、学校を会場に各地区の講師の先生を招き、地区について学習を進める。七月の第二回地区生徒会と一二月の第三回地区生徒会は、各地区の公民館や集会所を中心に地区内でフィールドワークをしたり、地域の郷土食である「やしようま」作り等の体験的な活動をしたりする。二月の第四回地区生徒会では、講師の先生方やPTAの方々に、自分たちが学んだことや感じたことを発表する。このような形で、地区生徒会の地域学習会が展開されてきたのである。



今年度の中萱地区の地域学習会

がら、学校と地域と共に継承発展していくことを願って止まない。

きっと、三郷の子どもたちは、「地域へ飛び出し、地域に学んだこと」を生かし、自らの手で未来への扉を開けて行ってくれることだろう。

(窪田尚幸)

今日まで、形式や内容、実施の仕方等を工夫したり変更したりしながら、継続してきている。学校では新たな教育課程のもと、時数の確保や準備等大変な面もある。また、講師も高齢化が進み、地域の人材の発掘・継承に苦労している。地域の人たちに支えられて続けてきたこの学習活動。今後も課題を双方で解決しな

○主な参考文献（五十音・年代順）

- ・ Hisanori Okamiya *et al.* 2018 An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic Hynobius salamander from Japan PeerJ 6:e5084
- ・ Natsuhiko Yoshikawa, Masafumi Matsui 2022 A new salamander of the genus Onychodactylus from central Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) Current Herpetology, 41 (1) :82-100 (2022)
- ・ 安曇野市教育委員会 2011『安曇野市の無形民俗文化財』安曇野市の文化財第1集
- ・ 安曇野市市民生活部環境課編 2014『安曇野市版レッドデータブック』安曇野市
- ・ 安曇野文化刊行委員会 2022『安曇野文化』42号
- ・ 伊藤政人 1969『解説 中萱加助』白水社
- ・ 植原悦二郎回顧録刊行会 1963『八十路の憶出 植原悦二郎』
- ・ 川副昭人・若林守男 1976『原色日本蝶類図鑑』保育社
- ・ 菊地俊朗 2017『釜トンネル 上高地の昭和・平成史』信濃毎日新聞社
- ・ 郷土出版 1995『長野県美術全集』第5巻
- ・ 倉石忠彦監修・安曇野市教育委員会編 2016『祭りが結ぶふるさとの絆 安曇野風土記Ⅱ』安曇野市教育委員会
- ・ 倉科明正 1996『貞享騒動の正しい理解』三郷村教育委員会
- ・ 慶友社 1974『信州塩尻赤羽家 元禄大庄屋日記』
- ・ 高坂邦彦 2014『植原悦二郎の憲法学』安曇野文化講座実行委員会
- ・ 国書刊行会 1996『信府統記』
- ・ 呉座勇一 2012『一揆の原理』筑摩書房
- ・ 迫野貴大 2020『日本のカエル 48 偏愛図鑑』河出書房新社
- ・ 自然観察資料集作成委員会 1990『松本盆地のおいたちをさぐる（改訂版）』松本市教育会・東筑摩塩尻教育会・南安曇教育会・北安曇教育会
- ・ 信濃教育会 1983『信濃教育』1163号
- ・ 信濃史料刊行会 1974『新編信濃史料叢書』第八巻
- ・ 信濃史料刊行会 1977『信州信濃史料叢書』第十九巻
- ・ 信濃毎日新聞社編集局 1998『信州の活断層を歩く』信濃毎日新聞社
- ・ 清水祥二 2019『安曇野のひと多田加助』貞享義民記念館
- ・ 貞享義民を讃える会 1987『貞享義民参百年祭 記念誌』
- ・ 田中薫 2002『松本領 貞享義民一揆の実像 改訂版』信毎書籍出版センター
- ・ 田中薫 2004「中萱村多田加助について（上）（下）」『義民かわら版』18・19号 貞享義民記念館
- ・ 田中薫 2011「江戸時代の凶作飢饉の生活史―広域松本領の地域像―」『松本市史研究』21
- ・ 田中薫 2022『信州の地域史研究』信毎書籍出版センター
- ・ 田中薫・清水祥二 2018『貞享騒動をたずねて「二斗五升」に命をかけた義民たち』安曇野市教育委員会
- ・ 塚田正公 1986『義民 城に叫ぶ ―加助騒動の真相をさぐる―』信濃教育会出版
- ・ 築島裕 2016『古語大鑑』第2巻 東京大学出版会
- ・ 豊科町史編纂委員会 1995『豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編』
- ・ 長野県史刊行会 1987『長野県史 通史編 近世一』
- ・ 中村隆宣 2013『神様がくれた時間』ドットクリエーション
- ・ 半井桃水 1987『義民加助』徳刈忠房
- ・ 保坂智 2004『近世義民年表』吉川弘文館
- ・ 松井正文 2013「2007年以降に記載ないし、分類変更された日本産両生類について」『爬虫両棲類学会報』2013 (2)

- ・松岡弘講述集刊行会 1984『「師道」松岡弘講述集』
- ・松本市 1995『松本市史 第二巻歴史編Ⅲ近代』
- ・松本市 1996『松本市史 第二巻歴史編Ⅱ近世』
- ・松本市美術館 2007『松本平の近代美術』
- ・三郷村誌編纂委員会 2004『三郷村誌Ⅱ 第一巻自然編』三郷村誌刊行会
- ・三郷村誌編纂委員会 2006『三郷村誌Ⅱ 第二巻歴史編上』三郷村誌刊行会
- ・三郷村誌編纂委員会 2006『三郷村誌Ⅱ 第三巻歴史編下』三郷村誌刊行会
- ・三郷村誌編纂委員会 2006『三郷村誌Ⅱ 第四巻村落誌編』三郷村誌刊行会
- ・三郷村誌編纂委員会 2009『三郷村誌Ⅱ 資料編』三郷村誌刊行会
- ・三郷村誌編纂会 1980『三郷村誌Ⅰ』
- ・三郷村教育委員会 1985『三郷村合併30周年記念誌』
- ・三郷村教育委員会 1995『信州安曇野 長尾組与手代御用留日記上』
- ・三郷村教育委員会 1996『赤つち道』
- ・三郷村教育委員会 1997『信州安曇野 長尾組与手代御用留日記下』
- ・三郷村教育委員会 1997『善の綱』
- ・三郷村教育委員会 1998『りんご村への道』
- ・水本邦彦 2003『草山の語る近世』山川出版社
- ・南安曇教育会 1991『務台理作と信州』
- ・南安曇郡誌改訂編纂会 1968『南安曇郡誌 第二巻上』
- ・宮坂武男 2013『信濃の山城と館7 安曇・木曾編』戎光祥出版
- ・務台理作 1976『哲学十話 務台理作』講談社
- ・百瀬新治 2005「国府の対岸―信濃国安曇郡南部における古代集落の変遷―」『長野県立歴史館研究紀要』
11 pp.14-25
- ・柳田国男 1936『信州随筆』山村書院
- ・山田瑞穂 2012「東小倉遺跡の調査」『長野県考古学会誌』141 pp.22-59
- ・湯本貴和編 2011『シリーズ日本列島の三万五千年―人と自然の環境史 第3巻 里と林の環境史』文一
総合出版
- ・横山篤美 1971『上高地開発史』山と溪谷社
- ・横山十四男 1986『信州の百姓一揆と義民伝承』郷土出版社
- ・若尾政希 2018『百姓一揆』岩波新書

○協力者一覧（敬称略、五十音順）

飯田素史、植原脩市、上宝ふるさと歴史館、歆喜寺、小林農園、浄心寺、曾根原農園、中田信好、長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、中村隆宣、中村フルーツ農園、服部充、一日市場観音堂管理人会、日比野宏夫、二木農園、降旗久司、平福寺、松本市立博物館、丸山善太郎、丸山隆、三郷小学校、三郷中学校、務台信一郎、村上紀子、横澤典利、瑠璃光寺

○執筆者（五十音順）

青木 弥保（安曇野市市民生活部市民課市民担当）
窪田 尚幸（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
倉石あつ子（安曇野市豊科郷土博物館職員）
斉藤 雄太（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
塩原理絵子（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当）
高山 裕司（安曇野市市民生活部環境課環境政策担当）
田原佳世子（安曇野市農林部耕地林務課林務担当）
千村 裕一（安曇野市文書館職員）
土屋 和章（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
寺島 俊郎（貞享義民記念館長）
那須野雅好（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館担当）
幅 拓哉（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館担当）
原 明芳（安曇野市豊科郷土博物館長）
平沢 重人（安曇野市文書館長）
藤松伸二郎（安曇野市三郷公民館長）
逸見 大悟（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館担当係長）
松澤 果穂（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館担当）
松田 貴子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
水谷 優美（安曇野市福祉部高齢者介護課長寿福祉係）
宮本 尚子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
百瀬さくら（貞享義民記念館学芸員）

本書に掲載された写真及び図版の無断転載を禁じます。

『三郷の宝』

令和5年（2023）2月28日 発行

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

発行 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

（中核館：安曇野市豊科郷土博物館）

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289番地8 TEL 0263-72-5672

印刷 藤原印刷株式会社